

支那の古文獻に現はるゝ麒麟について

昭和五年一月「史苑」第三卷第四號

- 一 從來の諸説の紹介
- 二 仁歌瑞獸としての麒麟
- 三 麒麟の形態
- 四 麒麟の由來に關する諸説の批判
- 五 麒麟の由來に對する鄙見

一 從來の諸説の紹介

支那上代の文獻に、往々麒又は麒麟といふ靈獸が現はれてゐることは、人のよく知るところであるが、私の寡聞なる猶ほ未だその由來が如何なるものであるかに就いて考究した結果の學界に提示されたものあるを聞かないから、茲に未熟ながら聊か鄙見を陳して讀者の是正を仰ぎたいと思ふ

今、その鄙見を開陳するに先立つて、一應麟に就いて從來如何なる説が存したかを顧みて置くことは、考察を

支那の古文獻に現はるゝ麒麟について

進めるに便するところ尠くないと考へるから、最初にそれら諸家の見解を簡単に述べることにする。

想ふに、従来の諸説の要旨は、これを(一)麒麟を Giraffe とする説と、(二)それは異つた説明を試みる説との二種に大別することが出来る。第一の説に就いては既に LAUFER 氏も指摘せられた如く、BRETSCHNEIDER 氏が嘗て麒麟と Unicorn とは何等かの関係あるものではあるまいかと顧慮しつゝ、然もなほ、十五世紀に入り支那使節が西方亞細亞より Giraffe を購ひ歸つた事例を記し、後世の所謂麒麟は Giraffe なるを説かれ⁽²⁾つゝ、H. KOPPE 氏は『天方至聖實錄年譜』の回教的西方諸國の記事の中に麒麟即ち Giraffe と思爲せられる記述があり、麒麟の字音と Giraffe に對する亞刺比亞名及び埃及名とは類似して居るといふことを述べられた⁽³⁾。更に De Groot 氏は『説文』『淮南子』など種々の文獻を引いて麒麟の Giraffe なるを主張し、支那の地、上古には Giraffe を産したのではあるまいかと論じてゐる⁽⁴⁾。また近く章鴻釗氏『三靈解』なる書を著し、その「麒麟解」に於いて或は字音の相似を論じ、或は形態上の記述につき考査を試みてゐるが、要は麒麟は Giraffe であるとの臆測を試みたのである⁽⁵⁾。而して、こゝに述べ來つた關係を斷定的に説いたのは A. FORKE 氏⁽⁶⁾、氏は諸種の古文獻を引き「想ふに支那人が穆王の旅に據つて駝鳥を知つてゐたと同様に、既に周代の古から Giraffe をも知つてゐたであらう」と言つてゐる⁽⁶⁾。

なほ、O. MÜNSTERBERG 氏は漢畫象石中の騎射の圖に Giraffe の存することを主張せられた⁽⁷⁾が、これは LAUFER 氏も指摘されたやうに遽かに Giraffe とは定め難いと信ずるから、私はこゝにはたゞその斷定に疑ひを挾

む餘地あることを述べて置くにとどめる。

以上の諸説は、私がこゝに考査を試みようとする上代文獻に現はれた麒麟に限られてはゐないけれども、皆麒麟が Giraffe である事を主張する説である。

次に、第二の方の説には如何なるものがあるかといふと、上に述べた BRETSCHNEIDER 氏の説や LAUFER 氏が Giraffe in Chinese Record and Art に於いて考査したやうに、東西交通の結果後世支那に生きた Giraffe が齎されたことは明白なる事實であつても、それを以つて古文獻上の麒麟をもまた Giraffe であると逆推して斷じ去ることは不可能である。こゝに於いて麒麟の由來を Giraffe 以外に求める説も當然現はれる筈で、かの KINGSMILL 氏が、動物であつて然も人間的要素を多分に含む點を對比して、麒麟は印度の神鳥 Garuda と同一視すべきを主張したのは⁽¹⁰⁾、所説そのものは首肯に値しないが此の種の見解の一例として注意される。併し、この種の説の中で尊重すべきは LAUFER 氏の高説で、氏は「二三の支那學者の説とは異つて Giraffe が上代支那人には知られてゐたといふ誤つた結論は、十五世紀明朝の治下にこの動物が支那に齎された際、古代神話上の空想的動物の記憶及びその詩的回顧によつて Giraffe が麒麟と稱せられたことに因るので、麒麟の古の原義が歴史時代に Africa に限られしむた Giraffe なる事は無論である。實際麒麟の記事もその繪畫も共に何等 Giraffe と相似點は認められないのである。——中略—— Giraffe を見る者は、誰しもその丈の高さ、非常に長い首、前肢と後肢との割合など特徴ある形態とすべきであるのに支那の麒麟にはこれに當たるべき何物もない。また、古記録に

は時に麒麟の聲のことが敘してあるが、動物學の教へるところに據れば聲を出さないのが Giraffe の特徴である⁽¹¹⁾と論じて古文獻上の麒麟は Giraffe でないことを明瞭にせられた。たゞ LAUFER 氏はその著書の對象が Giraffe の考察であつた爲、古文獻上の麒麟が何であるか、或はその由來が何にあるかに就いては説明せられなかつたが、その點は甚だ遺憾に思はれる。後に詳記する如く、私は上代文獻に就き麒麟の考究を試みた結果、この LAUFER 氏の主張には全然贊意を表するに吝ならぬ者であるが、上代文獻に現はれる麟、麒麟についてはなほ究明を要し、それが何であるか、或はその由來如何といふ點について考察を試みて置くのは徒爲ではないと信するから、以下その問題に對して鄙見の開陳を試みるのである。

二 仁獸瑞獸としての麒麟

先づ、古文獻に麒麟に就いての記述が如何様に現はれてゐるかを見ると、『詩經』國風には「麟之趾振振公子、于嗟麟兮、麟之定、振振公姓、于嗟麟兮、麟之角、振振公族、于嗟麟兮」とあつてこれは正義の注にも示されたやうに公子、公姓、公族の信厚なるを言つたものであり、麟が普通の動物でない⁽¹²⁾と考へられてゐたことだけは推察し得るが、これだけの記述のみでは麟の性質が如何に考へられてゐたかといふことは明言し難い。然るに、『說文』には「麒麟仁獸也」と明記されて居り、『易林』には「鳳凰在左麒麟處右仁聖相遇」といふことがあるし、『說

苑』辨物篇の「麒麟(中略)含仁懷義」や『博雅』の釋獸にこれと等しい記述⁽¹³⁾の存するなど、皆麒麟なるものが仁獸と考へられてゐたことを示す史料である。

かくの如く、麒麟は一方に仁獸とされてゐると共に、瑞獸とも考へられてゐたことが多くの文獻上の記述から知られる。かの『春秋』の哀公十四年の條の「春西狩獲麟」は、津田博士が嘗て論及せられたところ⁽¹⁴⁾に従へば、麟を瑞獸とする漢代の思想の現はれであることとなるから、これが聖王の世に現はれる瑞獸とされてゐたと見て差支へあるまい。この麒麟を瑞獸とする思想は、他の文獻にも多く現はれるところで、『淮南子』覽冥訓の「昔者黃帝治天下而力牧太山稽輔之……鳳凰翔於庭、麒麟游於郊」や、『新書』雜事篇の「昔者禹及立爲天子、天下化之、蠻夷率服、北發渠搜南撫交趾莫不慕義、麟鳳在郊」や、或は『論衡』講瑞篇の「或曰鳳皇麒麟太平之瑞也太平之際見來至也」や、『白虎通』封禪篇の「天下太平符瑞所以來至者、以爲王者承統理、調和陰陽、陰陽和萬物序、休氣充塞、故符瑞竝臻、皆應德而……至則鳳凰翔、鸞鳥舞、麒麟臻」などは、皆麒麟を瑞獸としたことに由來があらう。なほ、緯書のうちにこの思想の豊かに現はれて來ることは言ふまでもないが、念の爲め一二の例を挙げれば、『孝經援神契』には「德至鳥獸則鳳凰來鸞鳥舞麒麟臻」とあり、『尚書中候』には「河龍出圖洛龜書威赤文綠字以援軒轅麒麟在囿鸞鳥來儀」などとある。これら以外にも史書の至るところに散見する記載、詳しく云へば、『後漢書』明帝本紀永平十一年⁽¹⁵⁾、安帝本紀延光三年七月、八月、同四年正月⁽¹⁶⁾などの麒麟の見はれた記事、『三國志』吳志、孫權傳の赤烏元年八月、『晉書』の武帝泰始元年十二月、同二年、咸寧五年二月、太康元年四月、後趙後涼

南涼寺の記載にある麟、麒麟もしくは白麟蒼麟の記事⁽¹⁶⁾、かゝる諸説を取纏めた『宋書』符瑞志の精細な記載など、凡て麒麟を瑞獸とした祥瑞思想の現はれであることはこゝにとりたてていふまでもないであらう。

更に、文獻の上に往々次のやうな記述を見る。則ち、『荀子』哀公篇の「古之王者好生惡殺、故麟遊其郊野」や、『呂氏春秋』有始覽名類篇のうちの「割獸食胎、則麒麟不來」の外、『淮南子』本經訓、『大戴禮』の易本命などにも同様の意味のことがあるが、これらもまた麒麟が仁獸とされ、瑞獸とされた思想から後世展開したものと想像される。而して、それが極まつては『說苑』辨物篇にある「晉中律呂行步中規、折旋中矩、擇土而踐、位平然後處、不群居不旅行、紛兮其有質文也、幽間則循々如也、動則有容儀」といふ極端な屬性までも附與されるに至つたのであらう。上に述べたところによつて瑞獸とされるのが麒麟の最も著しい性質なる事概ね明瞭になつたと信ずる。

三 麒麟の形態

かく麒麟の仁獸及び瑞獸としての、換言すれば、靈獸としての性質上の著明な特徴を考へて來ても麒麟とは何であるか、或はそれが如何なる由來のものであるか、といふ問題は解決の端緒と思はれるものすら得られないやうに考へられるから、茲に轉じて一應その形態上の特徴に関する文獻の記載を辿つて更に考究を進めてみる。

形態について最初に思ひ當るのは、『爾雅』の釋獸にある「麤身牛尾一角」であつて、これは體が麤のやうな一角獸とするのである。(圖版第四ノ九) 麤の字については、既に孔穎達が『左傳』哀公十四年のかの獲麟の條の注に爾雅のこの文を引いてゐ、これに據つて麟と麤は唐代にあつては同義に用ゐられてゐたことが知られるが、それは恐らく古からさうであつたものと推察して大過ないと思ふ。『說文』の麟の條には「麒麟仁獸麤身牛尾一角」とあり、「春秋感精符」などには「麒麟一角者明海內共一主也」とある。また、『史記』の封禪書には「其明年(徐廣はこれに「武帝立已十九歲」と注してゐる。)郊雍獲一角獸、若麟然、有司曰、陛下齋祗郊祀上帝、報享錫一角獸、蓋麟云、於是、以薦五時、時加一牛、以燎錫諸侯、白金風符應於天也」とあり、『漢書』郊祀志にもこれと同一の文がある。然るに、『漢書』の方では既に王先謙氏も注意した如く麟が麤に作られてゐ、武帝の元狩元年の事になつてゐるが、麟を一角獸とする思想は前の諸例と變るところがない。なほ、『漢書』の終軍傳⁽¹⁷⁾には「武帝異其文、拜軍爲謁者給事中從上幸雍、祠五時、獲白麟一角而五蹄」とあつて一角なることに言及してゐる。

後世の記録で古文獻を傳承しつつ、然も麟の屬性を豊かに記述してゐるのは、『爾雅翼』であるから聊か煩瑣ではあるが念のためにそれを記せば「麒麟麤身牛尾一角、春秋之書麟亦曰有麤而角者耳、蓋古之所謂麤者止於此、是以其物可得而有其性能避思不妄食集、故其游於郊藪也、則以爲萬物得其性太平之驗、是不亦簡易而自然乎、至其後世論麤者、始曰馬足黃色圓蹄五角、角端有肉、有翼能飛含仁懷義、晉中律呂行步周旋中規、折旋中矩游必擇土翔必後處、不履生蟲不折生草、不羣居不旅行不犯陷阱、不罹罟網、牡鳴曰游聖、牝鳴曰歸和、夏鳴曰扶幼、秋

鳴曰養綏」とある。

上來、麒麟も同一のものと假定して、その形態に関する記述を擧げたが、次に試みにその名稱を顧みると、麟といひ、麒麟といひ、極めて稀に麒とも稱せられてゐるが、かゝる名稱の方から何かその解釋に暗示を得られるやうなことは無いが、これから敢てその方面の考究を試みる。前にも引用した如く、『詩經』のうちには「麟之趾」「麟之定」「麟之角」と「麟」と稱せられてゐ、『禮記』の禮運にもまた「麟以爲畜故獸不狘」とあり、『爾雅』の釋獸には前述の「麟」があるし、『左傳』にも「獲麟」とあつて古文獻には概ね麟もしくは麟の稱が用ゐられてゐる。なほ、こゝに麟といふ用例の重なるものを列記してみれば「麟以之游」(『淮南子』原道訓)、『鸞舉麟振鳳飛龍騰』(同兵略訓)、『歲星散爲麟』(『春秋保乾圖』)、『蒼之滅也麟不榮』(『春秋演孔圖』)、『麟圖則日無光』(同上)、『麟毫爲廉』(『洞冥記』卷二)、『麟鳳所遊安樂無憂』(『焦氏易林』卷一)などがある。かく麟なる名稱は極めて多く用ゐられてゐるが稀に「麒」の名稱が用ゐられて居り、『說文』にそれがあり、「麒麟麟仁獸也」といひ、麋の條には「牝麒也」とある。これに據ると自然麒は牡、麟は牝を稱したことが知られ、後世概ね此の説を採り、『獸經』には明かに「麒牡麋牝」と記されてゐる。かくて麒麟といふ名稱はその兩者が併稱されて現はれたものと信ぜられ前に引いた『大戴禮』や、『說苑』や、『呂氏春秋』有始覽名類篇の麒麟の稱、『尚書中候』や、『孝經援神契』や、『春秋感精符』など緯書のその稱、或は『春秋繁露』王道篇、五行順逆篇などのそれ、その他『淮南子』『論衡』、『吳越春秋』、『述異記』、『博物志』などに現はれる著明なものを始め此の名稱は全く枚擧に遑ないばかりである。而して、明確に論定することは至難であるが、上の「麒牡麋牝」といふ事は果して古から信ぜられた説であらうか。麒が牡、麋が牝なることが古來信ぜられてゐたならば、何故古文獻には通稱として麟即ち麋が多く用ゐられてゐるのであらう。此の問題は中々容易に解決し難く、然も上に掲げたやうに古文獻には麟が一般で、恐らくその點から推してそれが古い名稱であつたらうと想像せられ、最初は何等性別などを附することなく通稱として用ゐられてゐたのであらう。

なほ、往々白麟といふものが記されてゐ、例へば『宋書』符瑞志中に纏められてゐる歴史的の所傳を見ても、漢武帝の元狩元年十月、太始二年二月、吳孫權の赤烏元年八月、晉武帝咸寧五年二月、太康元年四月などに白麟の現はれた事が記されてゐ、漢武内傳西王母至る所などにも「乘白麟」とあるが、これは恐らく白雉、白鳥、白虎、白狐などいふと同じく、黒色に反して明るい感のある白を擧げて、後世その陽なる性質を一層強く表示しようとしたもので、『晉書』の後趙載記に蒼麟十六云々とある「蒼」もまた東方の陽色なる蒼色を以つて麟の陽性を強く現はしたに過ぎないのであらう。

四 麒麟の由來に関する諸説の批判

上來聊か説明を試みたやうに、麒麟は仁獸瑞獸として、或は音は律呂に中り、行歩規矩に中るといひ、或は生

草を折らず、生蟲を履まずといひ、その性質温良なるをいふ一方に、麒麟の形態については文獻上種々異説もあるが、結局一角獸なることには一致してゐると云つて大過あるまい。

かく考へて来て、然らば麒麟は如何なる由來のものであるか、果して實在の動物の或る一面が思想上發達して靈獸とまでなつたものであらうか、或は何等かの欲求に由來する全く想像上の動物であらうか、更に或は西方からの影響によつて生じたものであらうか。

こゝに於いてか、先づ一應検討を試みる必要のあるのは Giraffe を麒麟とする説である。云ふまでもなく、後世の記録、例へば『瀛涯勝覽』に「阿丹國麒麟、前足九尺餘後足六尺餘、頂長頭昂至一丈六尺、傍耳生二短肉角、牛尾鹿身、食粟豆粟餅餌」とあるの類は明かに Giraffe を以つて麒麟と稱してゐるが、かく後世 Giraffe を麒麟と稱してゐるからと云つて、上代文獻上の麒麟もまた Giraffe であるといふ推斷は今の場合不可能で、それは此の靈獸の性質形態などの記述をよく考へて見て、それが Giraffe と比定し得る場合にのみ許容される結論である。而して、Giraffe の極めて温和な性質が靈獸たる麒麟の一面である生草を折らないとか、生蟲を踐まないとかいふのと近い關係にあるやうにも思はれるが他の點が一致し難いならば、それは別の起源のものがかく説かれるに至つたものと考へる外ない。私は此の問題に就いては、最初に言及して置いた LADNER 氏の「實際麒麟の記事も繪畫も何等 Giraffe に似たところはなし」と言つて「Giraffe は、その丈の高さ、非常に長い首、前肢と後肢との割合などその特徴ある形態が、不注意に觀た者にも印象づけられるのは明白な事實であるが、支那の

文獻に現はれる麒麟及びその特性は全然かゝる Giraffe の特徴とは一致しない」と述べられた着眼に全然賛意を表する者である。LADNER 氏がその著書の中に明瞭に指示して居られる通り、埃及、亞刺比亞、波斯を初め歴史の各時代を通じて Giraffe は、繪畫は固より文獻の上に記される場合を検すると、殆ど凡て首の長いこと、前肢と後肢との割合などが注意されてゐ、またそれは Giraffe を觀察して當然想起せらるべき點であるのに、前に掲げた諸例を見ても直ちに知られるやうに、上代の支那文獻にはそれらの點を麒麟の特相として記したものは皆無であり、一應 Giraffe の肉角の事を考慮に置いて見ても麒麟の一角といふ事——この事に就いては後に言及する——には全然該當しないから、上代文獻上の麒麟を以つて Giraffe に當することは到底不可能であらうと思ふ。なほ H. KOPPEL 氏及び章鴻釗氏の説のやうに、麒麟と Giraffe の亞刺比亞名なる Zūrafā などの語とを比較して同一語といひ、もしくは音の近似を説いて兩者の間に密接な關係ありといふのは恐らく兩者を同一視しようといふ意向に基く附會の説であると信ずる。

またその名稱は兎も角として、Giraffe が現地質世代に於いては Africa に限られてゐるが前地質世代にあつては、より廣い範圍に分布し歐亞の各地、特に希臘、波斯、印度、支那に棲息してゐたといふ推定を根據として、古代支那人も何等かの傳承からこの動物を聞知してゐ、それが實見されないのであつた爲一層神秘的に想像せられて靈獸とまでなつたのではあるまいかといふ推考も至極尤もな考へと思はれる。併し、これも現今 Giraffe の棲息地が Africa 限られてゐても、古文獻の記載が兩者合致するところ多いならば許容し得るであらうけれ共、

殆ど兩者の間に一致點が無いのに、然もなほ前地質世代に棲息してゐたとの故のみを以つて推斷することは同意出來ない。元より前地質世代の生物が、現世代に於いても或は説話的に傳承せられ或は繪畫として表現せられて歴史的記述に現はれる場合の存するのは強ち無理ならぬことではあるが、そのやうな場合には今少しはその間の階程を明かにし得るであらうし、今一步譲つて Giraffe と上代文獻上の麒麟との形態の上に於ける一致點が有るか無いかといふ問題は暫くこれを措くとしても、Giraffe が比較的廣大な分布の範圍を有した時代から現今の如く極めて狭小な分布地域となるに至つた次第が地理上歴史上相當明かに解かれな限りは、直ちにこの所論に同意し難いのである。かくて、これらの諸點からも上に述べた上代文獻上の麒麟を以つて、Giraffe に當てるのはかなり困難であらうといふ鄙見は一層確められると云つてよからう。

なほ、麒麟は一角獸であるといふ事があるから、これを實在の動物中で一角なるものと比較して念の爲點檢を試みると、實在の動物中一角獸として著明なものは Rhinoceros であるが、此の動物は概して智力に乏しく、鈍重で非常な力を有し、本來の性質は臆病なのであるが一度傷つき、或はまた危険を感じると獐狂となつて、他に危害を加へるものであつて、唯一角なる點と特に Javan Rhinoceros (Rhinoceros Soudaicus) の尾が牛尾に似てゐるといふ點以外には上代文獻上に現はれる麒麟とこの動物とは一致するところが無い。Rhinoceros は犀といふ名稱で上代支那人に知られてゐた動物であるから、一角なる故のみを以つて靈獸であり溫和なことがその特徴である麒麟と Rhinoceros とを關係づけることは不可能である。

更に考究を試みる必要のあるのは Unicorn 希臘の所謂 *μονοκεράς* (Monokeros) 即ち一角獸である。この *μονοκεράς* に就ては、幸にも E. B. SCHRAEDER 氏が *Die Vorstellung von μονοκεράς und ihr Ursprung* (28) なる、かなり精細な研究を公にしてゐ、殊に Persepolis のものを始め藝術品に表現された諸例を示して説明された點が注目されるが、これが實在の動物でなく空想的のものであることは明白で、Ktesias の記録に「印度方面からの影響に依つて現はれた野驢で、首は赤く體は白く、然も額上に一角を有し、その角は上の方が赤、中が黒、下の方は白になつてゐる」と記されてゐて全く想像的な動物である。その他 ARISTOTLE が *ΟΥΧ* と稱する Antelope (羚羊) の一種と、印度驢との共に一角なる二種類の動物を示したことを紹介し、STRABO は鹿のやうな頭の一角獸が印度に存すると述べたことを引いてゐる。これらの記述に依ると一角なる事は勿論、大體體の大きさの表現といひ、體が白いと云つてある事といひ、また鹿に似た頭といひ、かなり麒麟に近い點も認められるのである。かくて、麒麟の由來はこの不可思議な動物が、何等かの機會に漸次東方に影響を及ぼした結果生じたものではあるまいかと考慮せられるのみならず、その起源を多少共印度に求めて説くところに一層疑念を深くするのであつて、影響關係の論斷には相當確實な證據、もしくは或る程度迄その間の階程を説明し得ることが必須の條件であるといふ、私平常の主張を今の場合に當て兼ね難いとしても、なほ、考慮に價すると考へたのである。けれ共、翻つて熟慮するに、私の寡聞淺見の爲ではあらうが、西方諸國及び印度の説話に於いては一角獸なるものは餘り重要な位置を占めるものではないと信ずる。元來かゝるものが遙か東方に波及し、然もその土地の思想

に影響を及ぼすには元の土地にあつて非常な著名なものであるか、然らざれば原地に於けるそのものの性質が影響を受けた方の土地の人々の心に多くの接觸點を持ち、或は感銘せしめる點ある場合にのみ傳播する筈であるとは言ふまでもない事であるのに、一角獸の説話はさまで著名なものでない上に、性質の上でもさまで支那の人々の心に接觸點を持ち或は感銘を與へるやうなところも無いやうに思はれるのみならず、SCHRAEDER氏の記述を見て、私はその一角は凡て力を象徴したものと信ぜられるので、力強いものであるが故に時に靈獸とされるに至る場合の存する事は、無論、思想上許されるけれ共、力強い動物が仁獸とされ瑞獸とされる事は殆ど全くあり得ないことと云つてもよからう。かく考へて私は Unicorn, Monokeros を麒麟の prototype とする説は到底成り立ち難いと信ずるに至つたのである。

以上私は麒麟はその起源を Giraffe と Rhinoceros と Monokeros と異にするものなるを論じ來つたが、『石索』にある漢麒麟碑、同山陽麟鳳碑に存する圖樣（圖版第四ノ10・11）や、漢畫象石のうちにある麒麟と推察される圖樣が、それらの動物とは全く相違すると思はれる事も、また、上述の推考の誤謬ならざるを傍證するものであらうと思ふ。

五 麒麟の由來に對する鄙見

以上麒麟の由來に就いての諸説はほゞ批判して、遽かに贊同し難い理由をそれ／＼述べ來つたから、最後にそれに對する鄙見を開陳して識者の是正を仰ぎたいと思ふ。こゝに於いて、その究明に採るべき殘された方法は、文字の検討及びそれに附隨する考察と、遺物に推考を加へることであるが、もしこの兩方面からの考察が一致するならば、その見解はほゞ當を得たものと云つてよからうかと思ふ。

是に於いてか文字の検討を試みる爲に『説文』を繙くと麒麟(30)とあつて麒も麟も共に麋に基づく文字で「其」も「吝」も音符であつて、文字の方面からは、麒麟は何等かの意味で鹿と關係があるのではないかといふ事を思はしめる。而して「麟大牡鹿也从鹿犴聲力珍切」とあるに於いて一層その感を強くする。また、羅振玉氏の『殷虛文字類編』(31)では（鹿）について麋(32)これは麋(33)に从ひ「似鹿而角異」とあるからやはり鹿に關係がある。なほ、また『論衡』講瑞篇には「春秋之麟如驪、宣帝之麟言如鹿、鹿與驪小大相倍體不同也」と云つて明かに麟と鹿とは關係あるものとしてゐる。更に、後世のものではあるが、『舊唐書』の五行志に「元和七年十一月、龍州武安川會田中嘉禾生、有麟食之、復麟之來一鹿引之群鹿隨之」とあつて、文字からの聯想によつてかゝる説話を生じたとするよりも、寧ろ古來の思想がかゝる形で現はれたと見る方がよからうと思はれるから、これも麟と鹿と何等か關係あるものとされた例とするに足りるであらう。この見方にほゞ過誤無しと信ずる私は、更に進んで上代支那人の鹿に對する思想、及びそのうちにそれが發達して果して麒麟のやうな靈獸となる素因を含んでゐるか否かに就いて考究を試みて見よう。

固より鹿に就いての記載は、古文獻にも多く現はれてゐることいふまでもないが、その一々に對しては別にこれを考究する機会があると信ずるから、こゝには鹿がたゞ麒麟の淵源に何等か關係を持つてゐるのではないかと思はれる諸例のみを考察するのである。先づ『詩經』の大雅にある「王在靈囿、鹿攸伏、麀鹿濯々」が思ひ當るが、これが祥瑞思想の現はれであるとは遽かに断定出來難いからこれは暫く措くとして、『史記』の封禪書には「天子苑有白鹿、以其皮爲幣、以發瑞應造白金焉」とある、この白鹿の皮を幣としたといふことはこれまた祥瑞思想であるか否か明瞭でないが、その後「其明年郊雍、獲一角獸若麟然、有司曰陛下肅祇郊祀上帝、執享錫一角獸蓋麟云、於是薦五時、時加一牛、以燎錫諸侯白金風、符應合於天也」とあるのは、明かに祥瑞思想であつて、これと共に説かれてゐる事から推察すると前のも同一の思想と見て大過ないと思ふ。また『前漢書』郊祀志には鼎を迎へて甘泉に至るところの後に「至中山、晏溫、有黃雲焉、有鹿過、上自射之、因之以祭云」とか、またその後「五帝獨有俎豆醴進、其下四方地爲膾食、羣神從者、及北斗云、已祠昨餘皆燎之、其牛色白、白鹿居其中、兔在鹿中、鹿中水而酒之、」などとあつて鹿が瑞應とされたり、祭に關係した事のあるのを知り得る。なほ漢の五瑞圖の中に白鹿と想はれるもの存するものこれに關聯して注意される。(圖版第十ノ30) 加之白鹿を祥瑞とする思想は、後漢に關する文獻には盛に見受けるところで、著明な例を挙げれば『後漢書』章帝本紀建初七年癸丑十月西巡狩の條に「又獲白鹿云々」とあり、同じく「元和中白鹿見郡國」とあるし、安帝本紀の「延光三年六月辛未扶風言白鹿見雍、秋七月潁川上言木連理白鹿麒麟見陽翟」とある。この記述に於いて白鹿と麒麟と

が全然同一に見られてゐるのは特に注意に價する。その他、『白虎通』の封禪の條には「天下太平符瑞所以來至者以爲王者承統理調和陰陽、陰陽和萬物序、休氣充塞、故符瑞並臻皆應德而至」といひ德至鳥獸の中に白鹿の現はれたことがあるし、『宋書』符瑞志(中)「白鹿王者明惠及下則至」の條には、魏晉宋の各時代に涉つて祥瑞として白鹿の記事が多く現はされてゐる。これらの例に於ける白鹿の白は、白麟の場合と等しくその明るい性質を現はさうとしたものに過ぎないから、その根本は鹿を祥瑞と考へる思想であつて、上述のやうな記述の多くの存することから推すとその思想が相當有力であつたことが知られる。こゝに於いて、かゝる思想の由來如何といふことが問題となるが、それはなほ十分研究を試みた後でなければ明言は困難であるけれ共、鹿は見た感じが他の動物に比して極めて高雅なことや、支那古代の狩獵の對象のうちで鹿は重要な一つとして生活の資料ともなつたといふことが、この動物の崇拜される一つの原因であつたらうといふ事だけは言ひ得よう。

然るに鹿には以上のやうな一面があると共に、また他面には極めて不可思議な動物に轉化したらしく、その事が『山海經』その他に現はれてゐる。即ち『山海經』南山經、祖陽之山の條に「有獸其狀如馬而白首其文如虎而赤尾、其音謠其名曰鹿蜀佩之宜子孫」とあり、これはその狀馬の如しとあるが、鹿蜀といふ名が注意せられ、西山經には「臯塗之山有獸焉、其狀如鹿而白尾馬足人手而四角名曰嬰如」とあつて、これは形が鹿のやうな空想上の動物が想像されたものと思はれる。その他「西皇之山……其獸多麋鹿」とも「上申之山……獸多白鹿」ともあるし、東山經の「尸胡之山北望洋山」に「有獸焉其狀如麋而魚目名曰袞胡」などや、中山經、穀岸之山の條に

「有獸焉其狀如白鹿而四角名曰夫諸」なども鹿に關聯して不思議な形が想像されてゐる。

これらの諸例は、鹿が異常な動物となつた例の存することを示したものであるが、更に範圍を狭くして鹿と關係ある一角獸はないかといふと、『爾雅』の釋獸には「麤大麋牛尾一角」とあつて麋に甚だよく似てゐる、鹿から發達して牛尾一角の形とされるに至つたものは必ずしも麟に限らない事が知られる。

かくて、上に考察を試みた結果と藝術品に表現せられた麒麟とを對比して、果してその間に矛盾は起らぬであらうか。先づかの麒麟碑及び山陽麟鳳碑の具體的な形態を見ると、それは四足獸で一角があり、その體の形は鹿に似てゐるやうに思はれる。(圖版第四ノ10)併し、これは馬に酷似してゐるとも考へられるが、極めて粗略な表現にあつては鹿と馬とは體形だけでは明瞭な區別は中々つき難いので、私が特にこの圖様を鹿に近いものと斷ずるのには次の理由に據るのである。即ち、第一に漢代の圖様に於いては、良馬を現はすには屈撓あることが顯著なる特徴で、その詳細に就いては近く發表しようとしてゐる「天馬考」なる小考のうちに論ずるつもりであるが馬に由來するならば靈獸とまでされたこの動物に屈撓のない筈はないといふことと、第二に所謂漢の五瑞圖の白鹿とせられるものと、この圖とが角と尾との相違を除いては大體同じいこと及び、第三には鹿と馬とは蹄が全然相異なるがこの碑の圖様にあつては蹄が明かに割れてゐて鹿のそれと同一であるといふ三つの理由に據るのである。序に一言挾んで置きたいのは、麒麟碑などの麟の開母廟畫象にある一角の獸(圖版第四ノ9)とは同様のものと思はれるから、これまた麟を現はしたものと見て大過なからう。かくて上に推考を試みた「説文」その他から

得た結果と、これらのものとはほぼ一致して矛盾しないやうに思はれる。

なほ、前に一角なることを麒麟の特徴の一つと考へて置いたが、一角は必ずしも麒麟に限らないので、現に『爾雅』釋獸に「驩如馬一角不角者騏」とあつて、馬にも一角が想像されてゐるし、またこゝに『山海經』に現はれてゐる種々の不思議な一角獸が思ひ當るが、その二三を例示すると西山經、章莪之山の條に「有獸焉其狀如赤豹五尾一角」とあるし、同じく中曲之山には「有獸焉其狀如馬而白身黑尾一角」とある。その他北山經、敦頭之山にも「多髯馬牛尾而白身一角」とあり、秦戲之山にも「有獸焉其狀如羊一角」などとあつて、一角なる動物が麟に限らず想像せられた事實が推知せられるのである。かくて麒麟を一角とする事も勿論實在の動物などに由來するものでなく、上代支那人が思想上考へて生じたものである事はほぼ疑ふ餘地がないと信ずる。

かく考察を試みて來ると、麒麟はその起源を鹿の崇拜に發しつゝ、それが思想上漸次靈獸たる屬性を附加して行くにつれ、終に實在の鹿とは異なるを要しその角が一角とされ、ついで靈獸としての屬性も結成するに至つたものであらう。そして現存する種々の古文獻が形を整へた頃には、既に麒麟はその起源をいづれに繋ぐものであるか殆ど明かにし難いまでに發達してゐた事を考へると、これがその本源なる鹿と思想上分離したのは、それを何時の頃と今から推測することは不可能であるが、ずつと古のことであらうと想像される。そして現存の諸文獻が成立した頃には、最早麒麟としての屬性が發達してゐ、政治的な祥瑞思想とも結びついてゐて、その事が漢代に

なつてこの靈獸を益々發展せしめる誘因ともなり、支那思想上特に重要な靈獸の一ともされるに至つたのであらう。要するに支那の上代には種々の想像的動物が存するのは著明な事實であるが、かゝる想像的動物の一起源は恐らく動物崇拜にあつたに相違ない。即ち人の想像力に依つて myth として現はれてゐる麒麟の由來の一面が鹿の動物崇拜に存し、それに種々の分子が附加し、展開した事が未熟ながら以上の考察によつて明かになつたと信ずる。

- (1) Berthold Laufer, *The Giraffe in History and Art*. Chicago, 1928. p. 96, note.
- (2) BERTSCHNER, *China Intercourse of Central and Western Asia in the 15th Cent.* (The China Review, Vol. V, 1876. p. 172.)
- (3) H. Kopsch, *The Kilin identified with the Giraffe.* (The China Review, Vol. VI, 1878. p. 277.)
- (4) De Groot, *The Giraffe and the Kilin*, (The China Review, Vol. VI, 1879. pp. 72—73.)
- (5) 章鴻釗『三靈解』第三、麒麟解、二十五枚裡二十六枚表。
- (6) A. Fokke, *Mu Wang und die Königin vor Saba* (Mitteilungen des Seminars für orientalische Sprachen, Jahrgang VII, 1904. ss. 139—141.)
- (7) O. Münsterberg, *Chinesische Kunstgeschichte, zweiter Band*, S. 65. abb. 90.
- (8) Laufer, *op. cit.* p. 96.

氏は Münsterberg 氏の問題とした動物は單に鹿であると云つてゐる。想ふにこの動物の首は随分長いから或は

Giraffe ではないかとも思はれるが、他に馬や鹿を現はしたものの、例へば開母廟石闕畫象のうちにも可成り長い首があつた、これは表現の拙劣なところからのことであらう。

- (9) Laufer, *op. cit.* Chap. 5, pp. 41—54.
- (10) The China Review, Vol. VIII, p. 137.
- (11) Laufer, *op. cit.* pp. 41—42.
- (12) 魏、張揖『博雅』卷十、釋獸「獸貉狼羆肉角含仁懷義(下略)」
- (13) 津田博士「儒教成立史の一側面」(第一回)〔史學雜誌〕第三十六編、第六號、四三〇—四三二頁。
『左傳』の「哀公十四年春西狩於大野叔孫氏之車子鉏商獲麟、以爲不祥以賜虞人、仲尼觀之曰麟也然後取之」といふのは如何に解すべきか、必ずしも明確でないが、春秋の獲麟が津田博士の説かれたやうに祥瑞思想の表はれとして、王者を未來に待つたためのものか王ならぬ王が當時あつたとするか何れにせよ漢代の思想とすれば、聊か詮索に過ぎる観はあるが、『左傳』のこの記載は春秋の混亂永きに涉つて聖王の現はれない爲、麟も久しく現はれず、それが現はれても世人はその何であるかを知らず、仁聖の王者にも比すべき仲尼にして始めてその瑞獸なる事が知られたといふ説話ではあるまいか。麟に關係ある問題であるから試みにこゝに附記して置く。
- (14) 『後漢書』卷二、明帝本紀、永平十一年「麒麟白雉醴泉嘉禾所在出焉」
- (15) 同上卷五、安帝本紀、「延光三年七月潁川上言水連理白鹿麒麟見陽翟」、「同八月潁川上言麒麟白虎見陽翟」、「同四年春正月壬午東郡言黃龍二麒麟一見濮陽」
- (16) 『吳志』卷二、孫權傳、「赤烏元年八月武昌言麒麟見」。『晉書』卷三、「泰始元年十二月是月鳳皇六青龍三白龍二麒麟各一見于郡國」、「二年鳳凰六青龍十黃龍九麒麟各一見于郡國」、「咸寧五年二月甲午白麟見平原、九月甲午麟見河

支那の古文獻に現はるゝ麒麟について

- 南」、『太康元年四月白麟見頓丘』
- 『晉書』卷百六、載記九、「後趙郡國前後送蒼麟十六白鹿七」、卷百二十二、「後涼麟見金澤縣」、卷百二十六、載記二十六、「利鹿孤立二年龍見於長寧麒麟游於綏羌」
- (17) 『前漢書』、卷二十五、郊祀志、「郊雍一角獸若麟然（師古曰鹿屬也）形似麋牛尾一角有司曰陛下蕭祇郊祀上帝報享錫一角獸蓋麟云於是薦五時時加一牛以燎賜諸侯白金以風符應合於天地」
- (18) 『前漢書』、卷六十四下。
- (19) 『大戴禮』、卷十三、易本命、「有毛之蟲三百六十而麒麟爲之長」。『說苑』卷十八、辨物篇、「凡六經帝王之所著莫不致四靈焉德盛則以爲畜治平則時氣至矣故麒麟麋身牛尾圓頂一角含仁懷義」（下略）。『呂氏春秋』卷十三、有始覽名類篇、「凡帝王之將興也天必先見祥……禍福之所自來衆人以爲命安知其所……列獸食胎則麒麟不來」
- (20) 『尚書中候』「河龍出圖洛龜書成赤文綠字以授軒轅麒麟在圃鸞鳥來儀」。『孝經授神契』「德至鳥獸鳳凰來鸞鳥舞麒麟臻」（下略）。『春秋感精符』の「王者德旁流四表則麒麟至」
- (21) 『春秋繁露』卷四、王道、「麒麟遊於郊」、卷十三、五行順逆、「恩及於毛蟲則走獸大爲麒麟至」
- (22) 『淮南子』第三、天文訓、「麒麟闢而日月食」、第四、墜形訓、「應龍生建馬麒麟生庶獸等」
- 『論衡』卷五、異虛篇、「麒麟野獸也桑穀野草也」卷十一、說日篇、「仰視天之運不若麒麟」。『吳越春秋』、卷四、越王無余外傳、「麒麟步於庭」。『述異記』上、「丹陽大姑陵陰下有石麟二枚不知年代傳曰秦漢間公卿墓則以石麒麟鎮之」
- 『博物志』、卷一、物產、「神宮在高石沼中有神人多麒麟琪芝神草」、卷四、物理、「麒麟闢而日蝕」
- (23) 註(16) 參照。

- (24) Lauren op. cit. pp. 41—42.
- (25) 註(3)(5) 參照。
- (26) Lauren, op. cit. p. 3.
- (27) The Encyclopaedia Britannica (13 ed.) Vol. 23—24, pp. 243—245.
- (28) Sitzungsberichte der königlich preussischen Akademie der Wissenschaft (zweiter Band) ss. 573—581.
- (29) 『石索』、四。
- (30) 『說文解字註』十編上。
- (31) 羅振玉『殷虛文字類編』第十、第三枚。
- (32) 岩井大慧學士は、鹿が生活のミツタルとして重要であつた爲崇められることになるのは明かであるとして、『遼史』太宗紀三年「四月戊寅東巡、巳卯祭鹿神」や、別に「遼俗好射鹿、每出獵必祭其神以祈多獲」とある其神は鹿鹿神であるとの例を、これは近い世の史料であるが、プリミティブな狩獵民族の鹿を神として崇拜する例として古代も大した相違はなかつたらうと附言して私に寄與せられた。茲に懇切な助言を特記して感謝の意を表する。
- 附記(壹) 村田治郎氏は「東亞」七、八兩月の誌上に「麒麟考」なるものを執筆して居られる。主としてラウフェル氏著書の紹介であると記されてゐるが、支那の史料をも豊富に示されてゐる。九月號には結論を出されることと期待し、それを一讀した上で本稿を公にしたいと思つたが、同誌上に休載されたからその結論を拜見し得なかつたのを遺憾に思ふ。
- (貳) 津田博士は麒麟が先づ瑞獸とせられ、ついで瑞獸は仁君の代に現はれるものなることから思想上麒麟が仁獸となり、又は仁君は殺伐を惡み生成を好むといふことから轉じて、『呂氏春秋』などの「割獸食胎則麒麟不來」とい

ふやうな思想に展開したのであらうと教示せられ、私はこの卓説を敬承しその然るを信ずるに至つたが、こゝには思ふところあつて、敢て私の最初に考へた未熟なまゝの形として置く。

(昭和四年十月二十八日稿)

天馬考

昭和五年六月「東洋學報」第拾八卷第參號

緒言

- 一 希臘に於ける天馬の思想
- 二 バビロニア、ユダヤ、アルメニア、マッサゲータ及び波斯の天馬
- 三 印度に於ける天馬
- 四 支那に於ける天馬の思想
- 五 支那に存する天馬思想の由來とその思想展開
- 六 上代支那の馬と北方産馬とに對する考察
- 七 漢代の西方馬に對する考察
- 八 大宛汗血馬の由來に對する臆測

緒言

悠遠の古から馬は從順な家畜の一として、或は乗用に或は物資運搬の用に供せられ、また時には勇士の伴侶と

もなつて、人類生活の進展に密接な關係を持つて今日に至つたことはこゝに事新しく言ふまでもないことである。加之、力強いその體軀、輕快なその歩様は屢々詩や歌の題材ともせられてゐる。併し茲にはそれらの問題を考察しようとするのでなく、馬を太陽の乗物とし、或は太陽の車を輓くものとする思想及び支那に於いて天に配された馬を綜括して天馬と稱し、その由來を考察し、ついで支那上代の馬が如何なるものであつたかの究明を試みようとするのである。元來前者は主として思想上のことであり、後者は史的事實であつて、全く異つた方面の問題であるが、後者も天馬と稱せられた場合があつて、その點に聊か接觸點があるから、此の小編に於いては便宜上敢てその兩者を併せ考へることとした。而して天馬の思想を考察するに當つても上代支那の、その思想を中心とすることはいふまでもないが、支那の思想の真相を明かにする爲めに先づ世界諸民族の間に存するその事例をも述べることにする。

一 希臘に於ける天馬の思想

上古希臘に於いて、太陽神ヘリオス(Helios)は馬の頭を以つて象徴せられた場合のあつたことが傳へられてゐるが、それは太陽神を表現するにその乗馬を以つてしたのであつて、これをかのファエトン(Phaethon)がヘリオスの馬を御することが出来なくなつた時、その暑さのために、リビヤは沙漠となりエチオピア人は黒人と化

し、ナイル河の上源は枯渴したといふ説話と對比して見ると、太陽は馬に乗つて東から西に運行するものであるといふ思想の存したのを窺ひ知ることが出来る。而して、これには太陽の車(sun-chariot)の事は現はれてゐないが、この説話は概ね太陽の車の話になつてゐる場合が多いのである。嘗て此車の事についてフレイザー氏(Frazer)はその著書の中で、ホーマー(Homer)のうちに壯麗な形容を以つて、太陽の車が黄金の輻で抑へられた駿馬に依つて輓かれる事を述べ、つゞいて希臘の文學や美術に表現されたものにもその例が存すると述べてゐる。後世になると苟くも古典説話を取扱ふ者は、太陽の事を述べるに當つて概ねこの馬車のことを言つてゐるのであつて、單に馬に乗るとせられた例は極めて稀であるから、フレイザー氏の如きは種々の説を引いて車の事例を記した後に「最初太陽神は大空のその道を骨を折つて歩むとされたが、文化の進歩につれて、終には駿馬の輓く車に乗つて意のままに旅をすることになつた」と言はれてゐる。

かくて、一度馬に輓かれた車に據るといふ思想が生ずると、次には崇敬すべき太陽に乗物を供するといふ考へも起こるのが當然であつて、茲に太陽への犠牲として馬或は車を供する風習も生ずるのである。その顯著な例はスパルタ人(Spartans)が景色美しいテーゲタス(Taygetus)の山上で太陽神の爲めに馬を犠牲にする風習の所傳であつて、それは太陽神は日中この山上を過ぎる頃、その疲れた馬を元氣に充ちた新な馬と換へてその金色の車に輓絆するといふ思想に由來するのである。更に希臘に程近いロードス島の住民(Rhodiens)の間には篤い太陽崇拜が存し、一年の行程の遠さにその馬は老ひ、その車は損じたであらうとして年々新に造られた車と四頭の

駿馬とが太陽への犠牲として海に投ぜられる習俗も存する。⁽⁶⁾ ヴィクトル・ヘーン氏 (Victor Hehn) は光の神への犠牲には白馬の用ゐられるのが一般で、その例は希臘に存すると共にイランにもあることを論じて居られ、ここにその事を一言すべきであるが、それは後に印度及び支那に存する白馬の事例を述べる所に譲つてこゝには省略する。なほ羅馬に於ける例をも述ぶべきであるが、それは概ね希臘の傳承に過ぎず、特にそのカストール (Castor) とポラックス (Pollux) のことは後に論ずる必要があるからこゝには敢てそれを述べない。以上記述し來つたところで、古から希臘に太陽の馬及びその車といふ思想が存したことだけは知られるであらう。

二 バビロニア、ユダヤ、アルメニア、マッサゲエテ

及び波斯の天馬

天馬の思想の存するのは希臘に限らず他の諸地方にもそれがある。キング氏 (King) に依ると上代バビロニア (Babylonia) の傳説では太陽は天蓋の東門から天の原を西門に至るものと言はれ、その一説に二頭の駿馬を以て輓く馬車に依るといふものがあることが知られ、マイスナー氏 (Bruno Meissner) はバビロニアに太陽は「非常に速かに走る驢の繋がれた車」に依つて大空を行くといふ所傳の存することを指摘して居られるから、バビロニアにも一説として天馬の思想が存したのである。又、ユダヤの上代にあつては、太陽がその行程を平安に運行す

るやうにとの念願から、エルサレムの祭壇で太陽の爲めに馬及び車が供せられた事が傳へられて居り、オルゴット氏 (Olgott) の説くところに依るとアルメニア (Armenia) にも太陽を拜する祭日に馬を犠牲とする風習があつたとす。⁽¹¹⁾ なほこれは既にフレイザー氏やハウエー氏 (Howey) などによつても注意されてゐるが、ヘロドトス (Herodotus) のうちに裏海の東、トルキスタンの住民マッサゲエテ (Massagetae) について「此の民の崇敬する唯一の神は太陽であつて、彼等は最も駿足な神は犠牲としてもまた、動物中最も快走に適するものを喜ぶといふ考へのもとに、この神に犠牲として馬が供せられる」とあるが、この事はヘーン氏も特に注意を拂つてゐるところである。⁽¹²⁾

次に波斯であるが、こゝにも同様の思想が存してゐたことは、フレイザー氏がその著書の中にヘロドトスやセノフォン (Xenophon) などの記述を引いて論證せられたところから疑ふ餘地は無い。即ち古代波斯人の間には天體を崇拜する風習が盛で、峻峰の山嶺で種々の犠牲が供せられる祭事が行はれ、その中に太陽に馬を供する儀式がある。而して、この民族の間では太陽がアキラ・マズダ (Ahura Mazda) の眼と信ぜられる一方に Swift horsed Sun と稱せられてゐる。ゼント・アベスタ (Zend Avesta) 殊にその太陽の讚美 (Khorshéd Yast) の中に「不滅に輝く速き馬に依る太陽」といふ句が屢々現はれてゐる。この事はウィリアム・ジャクソン氏 (William Jackson) も注意してゐる。またササン朝の浮彫の中にアキラ、マズダが馬に乗つてゐる様があると言つてゐる。⁽¹³⁾

これらの事例の外にハウエー氏がその著書の中に説く所に據ると、スキート人(Savthians)の間にも太陽に馬を犠牲とする風習が存したと傳へられてゐるから、北西アジアの方面にも天馬の思想は存したのであらう。

三 印度に於ける天馬

古代の印度にも天馬の思想が存したことは明瞭な事實で既にヴェダ(Veda)のうちにそれがあり、マクドロール氏(A. A. Macdonell)は、その著書に次のリグ・ヴェダ(Rig-Veda)の讃歌を引いてゐる。即ち

日の神スールヤ(Surya)その快馬を車から放つと、忽ち夜はその衣を萬象の上に擴げ⁽¹⁹⁾

といふ日暮の歌があり、太陽の活々とした屬性を現はす神サヴィトリ(Savitrī)に對するものに

疾く走る快馬を驅り來つて、今彼はその馬を放ち、ひた走り來つたその車を停めた。長蛇の如く迂り來つた馬の歩みを止め、こゝにサヴィトリの命ずるまに、暮色が迫る⁽²⁰⁾

といふ一節もあり、共に日暮に及んで太陽の馬はその走りを留め、夜の來るところを言つたので、馬が太陽の車を曳くといふ思想に基づくこと明白である。

またマクドロール氏は別の著書のうちに、曉の神ウシヤス(Ushas)を論じたところで、それ／＼ヴェダ讃歌中の所在を指摘し、「彼女は赤い駿馬に輓かれると言はれ、それは御し易く、また規則的に歸絆せられ、その駿馬を

得て初めて輝くと言はれてゐる。而してまた時には赤毛の牛に曳かれる事にもなつてゐるが、かく赤毛といふのは曉光の紅なのを現はしたものと思はれ牛といふのは紅の曉雲を言つたのであらう。(中略)なほ、ウシヤスは日の神スールヤの道を開く者で、彼女は神々に眼を興へ、美しい白馬に乗るとも云はれてゐる⁽²¹⁾と説明して居られる。この事に就いては既にマクス・ミュラー氏(Max Müller)がその著書に詳しく注意し、グーベルナティス⁽²²⁾(Angelo de Gubernatis)はその著の馬の條に特にヴェダの天馬の諸例を詳述せられてゐるし、オルコット⁽²⁴⁾氏⁽²⁴⁾、コックス氏⁽²⁵⁾、ハウエー氏⁽²⁶⁾など皆等しくこの種の事例を記述してゐる。

上に述べたところで、上代印度に於ける日の馬は赤毛及び白毛の二種が想像されてゐたことが知られるが、また別にその馬の數についてミュラー氏はスールヤの馬車は一頭から七頭の馬に據つて曳かれることになつてゐることを考察して居られる⁽²⁷⁾。

なほ遙か後世に編纂せられたものではあるが、ソーマデヴァ(Somadēva)のカタサリット・サーガラ(Kathasarit-Sāgara)の多くの説話のうちに太陽の馬の毛色についての説⁽²⁸⁾などがあるが、これらも恐らく近い世に作られた説話でなく、上述のやうな源流から轉化して生じたものであらうかと念のため一言附け加へて置く。

四 支那に於ける天馬の思想

上に述べ来たところで世界諸民族の間に存する太陽の馬、或はその馬車の思想の概要はほゞ明かになつたと信ずるから、次に轉じて支那に於けるその思想について聊か考究を試みよう。

先づ『楚辭』離騷には「朝發軔於蒼梧兮、夕余至乎懸圃、欲少留此靈瑣兮、日忽忽其將暮、吾令羲和弭節兮、望崦嵫而勿迫、路曼曼其脩遠兮、吾將上下而求索、飲余馬於咸池兮、總余轡乎扶桑、折若木以拂日兮、聊逍遙以相羊」とあるが、この中につき羲和は古來日御として著明なもので、こゝに事新しく説明する要は無いし、崦嵫は王逸も「崦嵫日所入山也」と注してゐて、これが太陽説話を中心としたものなることを断定して大過ないであらう。加之咸池は「日浴處」であり、扶桑は『淮南子』天文訓にも「日出暘谷、浴乎咸池、拂于扶桑、云々」とあるし、『山海經』の大荒東經にある「湯谷上有扶木」は郭璞の注に依ると「扶木扶桑也」とあり、別到大荒東經には「湯谷上有扶桑十日所浴」ともあつて、太陽説話に關係があり、この記述全體が太陽説話に由来する事を思はしめる。然らば「飲余馬於咸池兮、總余轡乎扶桑」といふのを太陽の馬、その馬の轡と解しても強ち當を得ぬ解釋ではあるまい。(20) 同様に『楚辭』の九歌、東君には「暎將出兮東方、照吾檻兮扶桑、撫余馬兮安驅、夜皎皎兮既明、駕龍轡兮乘雷、載雲旗兮委蛇、長太息兮將上……青雲衣兮白霓裳、舉長矢兮射天狼、操余弧兮反淪降」とあつて、古來東君が日とされてゐることから、これもまた離騷のものと同じく太陽の馬を言つたものなること明白である。

また『淮南子』天文訓には「日出于暘谷、浴于咸池、拂于扶桑、是謂晨明、(中略)至于悲泉爰止其女、爰息其馬、是謂縣車、至于虞淵是謂黃昏」とあつて、『楚辭』の文と對比してほゞその意味が窺ひ知られるし、強ひて推

考を試みると、縣車といふ語から車に據るといふ思想も存したのではなからうかとも考へられる。

なほ、『尙書』堯典の所謂暘谷昧谷の如きものが實在の土地でなく、神話上の日出日没の所であることは疑ふ餘地が無いし、かの羲氏和氏の名も恐らく日御たる羲和に由来があるに相違ないであらうから、これも太陽に關する説話的分子に負ふ所極めて多く、その點から推測を加へると、『史記』五帝本紀、堯の條に「其仁如天、其知如神、就之如日、望之如雲」とある抽象的な表現について、極めて具體的な「形車乘白馬」とあるのを前の諸點と併せて考へて太陽の馬車の思想がこゝに混入して來たものであらうと思はれる。更にまた嘗て白鳥博士が論證(3)を試みられたやうに、『尙書』にある堯の事績は天に、舜のそれは人に、禹のは地に限られてゐ、ある時代に天地人三才の思想に基づいて纏められたものとすれば、『史記』にある「形車乘白馬」も太陽の馬のことが天の事に關聯してこゝに現はれたものといふことが出来ると思ふ。

於是余は今一步進んで『易經』の説卦傳に「乾爲馬、坤爲牛」とある天に馬を地に牛を配する思想について、地の牛は別の考察に譲るとして、天に馬を配することの一つの由来は恐らく上に述べたやうな思想から展開し來つたものであらうと思ふのである。

五 支那に存する天馬思想の由来とその思想展開

余は、支那に於ける天馬即ち太陽の馬、その馬車及び天に馬を配する思想が、如何なる特徴を有するものなるかの真相を明かにせんが爲め、最初に世界諸民族の間に存する該思想を述べて置いた。而して、馬は必ずしも太陽のみ關係づけて説かれるものでなく、種々の由來によつて月にも風にも、その他種々のものに聯想せられる場合のあること(31)は言ふまでもない。併し、今それらの問題は暫く措いて、上に説いて来たやうな天馬の思想は如何なる由來あるものであらうか。勿論、民族の相違によつて、説話の内容にも相違があるから、その由來も亦各自に異なつてゐる點もあらうが、以上の概観によつて、そこに何等か一脈の相共通するところが認められるのであるから、試みにそれらに相通する由來を考へてみるのも強ち無理な事ではあるまい。この場合その由來について、次のやうな三つの推測が可能である。即ちその一は馬は觀る者をしてその悍威と駿足とが、如何にも力強い感を起こさしめるから、何れの時にか力の象徴として太陽に力を與へる犠牲とせられ、それが太陽と馬とを結びつける誘因となつたのではあるまいかといふ考へであり、その二は、前のもののやうに詮索に過ぎた考へを爲さずに、極めて平易に考へて、文化の程度がなほ幼稚な民族の間にあつて、太陽の日々の運行を説明するのに、空を飛ぶ鳥との聯想(32)を以つてするのと等しい心理から、その運行を地上を行くことに利用せられる馬と聯想し、先づ太陽は馬に乗つて日々(33)の行程に就くと考へ、ついで、前に一瞥したフレイザー氏の説のやうに、漸次文化の進むにつれて、馬車に據るといふ思想が生ずるに至つたものであらうといふ説であり、その三は天馬の思想を有つ以上のやうな民族の間にあつては、馬或は馬車は、概して王者や貴人勇士の乗物として注意せられてゐるから、

それとは別に太陽崇拜の思想が發達した際に、崇拜の對象たる太陽の乗物に王者や貴人の乗物が聯想せられ、やがて太陽は馬或は馬車に依るといふ思想が結成せられるに至つたのであらうといふ考へである。この三様の考へ方は、何れもこれを史料に就いて詳かに説明することは出来ないものであるから、何れが最も當を得たものかを、思想發達の一般に照して判斷する外ないのである。先づ第一の説は、さやうの場合が想像し得ることはいふまでもないが、聊か詮索に過ぎた嫌があるやうに思はれるし、第二の説は鳥が日と關聯して考へられることは空中にある點から極めて自然であるが、跳躍の様から聯想せられぬとは斷言し難いとしても、馬が天空を走るといふのはやゝ不自然な、無理な考へ方とも思はれ、余には結局思想の展開から、第三の説が穩妥なものやうに思はれるのである。

かく考へて来て、更に困難な問題は、その各自の思想は凡て同一の起源に發したものと否かといふことである。余の知る限りに於いては、上述のやうな天馬の思想は古代埃及の説話にこれあるを聞かない。尤も、この事はずつと古代の埃及には驢が存したのみで、ヘーン氏の説の如く第十八王朝の頃に初めてパピルス(Papyrus)にも繪畫にも馬が現はれるといふやうな事實と説話の起源、もしくはその傳承といふことを對比して考へて見るべきであるが、その事はこゝには省略する。たゞ前に述べた希臘のフェイトンの馬が意のままに動かなくなつた説話にはリビヤのことが出て来るから、古代埃及にもそれに似た話があつたのではないかと考慮せられるが、これは寧ろリビヤの土地の説話に由來があるのでなく、希臘人のリビヤ沙漠を説明した説話に過ぎぬものであらうか

ら、この事から埃及方面にこの種の思想が存したといふ推斷は許され難いことである。然るにバビロニアやユダヤやアルメニアの説話にこの思想が存した事は上に述べた通りであるから、それら諸民族の間にかゝる説話が存したこと疑ひないし、アーンリヤ民族には古代希臘にも波斯にも印度にもこれが存した明かな證據が多いのである。そして上に述べた通り、支那の上代にもそれが存したこともまた明白な事實である。

然らば、今假にセミティックの民族の例は暫く措くとしても、希臘、波斯、印度の説話が、細部に於いて独自の發達を爲したことは言ふまでもないが、その源流を一にするものであらうことは、近世に於ける或は比較言語學の發達や、或は比較神話學の進歩により、殆ど疑ふ餘地無き事であるから、余はこれらの各説話は根源を一にするものであると信ずるのである。

こゝに於いてか、このアーンリヤ民族の同一説話群と支那の説話との關係如何といふことが考慮にのぼつて來る。若し關係があるものとすれば、遼遠の古からの交通の結果、印度方面のものが東方に波及して來たか、希臘方面のものが北方交通路を経て影響を及ぼすに至つたかでなければならぬ。最近東洋研究の著しい進歩に依つて、種々な西方の知識が以上二つの通路を経て、支那に影響したことは明白な事實となりつゝあるが、天文の知識とか、特殊な宗教思想とか、或る種の技巧とかいふやうなものであればその間の關係を推斷することは比較的容易であるけれども、説話の類同といふやうなことはさう簡単に斷定してしまふことは出來難い。たゞ上に述べた支那思想はあまりに希臘印度などの思想に酷似し、特に希臘に白馬のことがあり、羅馬の光明の神カストール、ポ

ラックスは雪白の馬に乗り、緋の外被を纏つてゐることになつてゐ、印度にもウシヤスの白馬のことがあり、赤い駿馬といふこともあるが、これらの類似は前に説いたところから怪しむに足らないとして、支那にも「形車乗白馬」などいふことがあるのは、その間の關係を認めようとするには絶好の資料といふべきである。併し、翻つて熟々考へてみると、白馬の白といふことはネーゲライン氏 (Julius von Neeflein) の「白色の民俗的意味」なる論文に精緻な論證があるやうに白色は最も明るい感じを與へるのが一般であつて、往々光に聯想せられるものであるから、それが太陽の馬に附け加へられるに至つたのであらうし、赤いといふことは、マクドール氏が紅の曉雲に由來することを説かれてゐるのであつて、必ずしも特殊な民族の間のみ存して、絶対に他に起り得ぬ思想といふ譯ではなく、西方の説話と支那のそれとの間に關係あることを認める説も、何等の確實な證據は無いのであつて結局推測に過ぎぬのである。この程度の推測が許されるならば、また各自分離して存してゐ、其間の關係を決定する確實な證據も無いのであるから、獨自に發達したのではあるまいかといふ推察も容認せられねばならぬ。かくて、上に述べ來つたやうな天馬の思想の存する諸民族の間にあつては、種々の史料から馬もしくは馬車が一般の乗用ともせられた中にも、王者や貴人勇士の乗物として注意されたことが察せられるし、また、それらの民族の間には太陽崇拜の習俗も嚴存したことが知られるから、王者や貴人勇士の乗物としての聯想から轉じて馬や馬車が崇敬すべき太陽の乗用とも考へられるに至つたとするならば、そこにはこれは必ずしも傳播によつてのみ生じた思想でなく、分立して發達したと考へる説の長所もあると言ひ得よう。

要するにかゝる議論は現在の此の方面の研究の程度を以つてしては、早急に決し難い難問題であるから、我々は勉めて忠實に事實の究明に盡し、遺憾ではあるが、かゝる問題の解決は將來研究の進歩による後人の解釋に待つ外なく、余はこれが現在に於いては最も學に忠實な態度であると確信するのである。なほ、他の諸民族の間にも上に述べたやうな意味の天馬や、農耕に利用せられる動物として牛と大地とを關係づけた説話なども存するが、それらの意味は支那で「乾爲馬、坤爲牛」と言つたやうなものとは相違してゐ、これのみは全く支那獨特の思想で他に相似たものを求め得ぬものやうである。

六 上代支那の馬と北方産馬とに對する考察

上に述べ來つたところは、主として支那の天馬の思想を究明しようとしたのであつたが、こゝに轉じて上代支那の馬の歴史的事實について考察を試みようと思ふ。併し、歷代正史の兵志や、『文獻通考』の兵考や、更に近くは明、朱健の『古今治平略』とか、清、蔡方炳の『廣治平略』とかに詳細に現はされてゐる馬政などの事實を考へようとするのでなく、主として馬種、就中天馬の子と稱せられてゐる漢代西方馬種を究明しようと思ふのである。然も、その爲めには先づ一般に用ゐられてゐたと思はれる北方産馬の事を述べて置く必要があるのである。而して、今便宜上『史記』の匈奴傳を見ると、匈奴について「隨畜牧而轉移、其畜之所多則馬牛羊、其奇畜則橐

駝、騊羆、騊駼、駒騶、驛騶」とあつて、古來朔北にあつたこの民族は遊牧生活を事とし、馬、牛、羊、などを飼養してゐたことが知られる。その奇畜といふものを見ると橐駝は別として騊駼は『説文』には「騊駼、馬長耳从馬盧聲」とあり騊駼は「騊駼父馬母也」とありし、騊駼は徐廣の註に「北狄駿馬」とあり、騊駼は『説文』に「騊駼父騊子也」とある。また駒騶は『説文』に「駒騶、北野之良馬也」とあり、『山海經』海外北經には「北海內有獸其狀如馬其名駒騶也」とあつて、特に北方のものなることが注意されて居り、驛騶は『説文』に「野馬屬从馬單聲」とあつて凡て馬種に屬するものなることが知られ、かゝる記載によつて、匈奴の住地が古來馬産地として漢人の間に著明であつたことが知られると共に、騊駼を北狄の駿馬といひ、駒騶を北野の良馬などいふところに北方の良馬が漢人の間に注意されてゐた事が察せられる。かう考へて匈奴傳を見ると、こゝに馬に關する記述の尠くないことが極めて自然に解せられ、「冒頓既立、是時東胡強盛、聞冒頓殺父自立、乃使使謂冒頓、欲得冒頓時、有千里馬、群臣皆曰千里馬、匈奴寶馬也、勿與、冒頓曰奈何與人鄰國而愛一馬乎」などであるのも、この民族が馬を尊重してゐた事實を窺はしめるのである。その外にも或は「以天之福、吏卒良、馬彊、力以夷滅月氏」といひ、或は「驅馬牛羊百有餘萬」といひ、或はまた「以爲漢兵不能至及粟馬發十萬騎、負私從馬凡十四萬匹」などであるものを見ると、この地が如何に馬産地として漢人の注意を惹いてゐたかといふ事が推察せられる。かくてかの『左傳』昭公四年の條にある「冀之北土馬所生」との記事も同じく古から北野が馬の産地として注意されてゐたことを示してゐ、『淮南子』墜形訓の中には「北方幽晦不明天之所閉也、寒水之所積也……其地宜菽多犬馬」と

ある。

併し、此の事實を更に確實にする爲めにはなほ他の方面から考慮を試みる必要があるが、幸ひヘーン氏の名著『栽培植物と家畜』の内には「馬」なる一章があつて、馬に對する極めて精緻な歴史的研究を發表して居られるから、余は權威あるその所説の一部をこゝに引用し、併せて聊か私見を付け加へ、以つて以上の事實の傍證としようと思ふ。ヘーン氏は馬族の原産地が概して不毛なる草原地帯に富む中央亞細亞方面と推定せられ、その方面にあつて古より馬に親んだ騎馬民族は、東には蒙古族があり、西に突厥族があり、これらの民族は現今と雖も馬と離るべからざる關係にあるといひ、特に蒙古族については「蒙古族は常に馬背に居り、歩行するのは恥づべきことのやうに考へる。さういふ状態であつた爲め、彼等が時に馬に乗つてゐないと何となくその大切な要素を缺いてゐるかのやうである。蒙古の子供達は、ろくに歩行の出来もせぬ内から馬に乗せられ、蠶によぢ登り、馬背で育つといふやうな次第でやがて馬と離るべからざるものとなる。恐らくこの生活様式は何千年もの昔から、幾世代をも經過して今日に及んだものと信ぜられるから、終に蒙古人の體格に一つの特徴を生ぜしめるに至つた。その特徴といふのはその脚が彎曲してゐる (sabelhörig) その歩行は不活潑で (schwerfällig) 上半身は前屈みになつてゐる事である。」と述べてゐるが、これを以つて見ても如何に蒙古高原一帯の地が馬と關係深かつたかといふ事が推知せられ、その事實は既に『淮南子』主術訓に「伊尹賢相也而不能與胡人騎驪馬而服駒駘」とあることから、漢代に十分知られてゐたことが明かである。また、嘗て白鳥博士はその「室韋考」の中に「バイカル湖の

沿岸が蒙古人の住地であつたことは(中略)此の民族の口碑傳説からも推測せられる。元朝秘史には蒙古の根源を敘して、昔、上帝の命をもつて生れた蒼き狼と慘白き牝鹿とが騰吉思を渡つて、幹難木連の源、不見罕合勒敦にすまひしたとある。此の騰吉思は蒙古語の tengis の對音で、廣大な湖水といふ語であるから、此處では Balkal 湖を指したに疑ひない。又朶莽篋兒干の妻阿蘭媛の父豁哩刺兒台篋兒干はもと豁哩秃馬惕の住人であつたけれど不見罕山に野獸の多いのを聞いて、此の山の主人晒赤伯顏兀良孩をたよつて此處に徙つて來たと云ふ。此等の口碑に依つても蒙古人が Balkal 湖の沿岸から東して Onon 河の流域に移轉した形跡が認められる。且つまた茲に馬の傳統を考へても此の民族の發祥地が此の湖水の縁邊にあつたやうに思はれる。其は何故かといふに此の動物の本源地の一は Caspi 海と葱嶺との間にあつたのに疑はないが、今一は蒙古の高原に索めんければなるまい。天山 Altai 山以西の Ural-Altai 語の馬を at と Sā のは Turk 語の傳はつたものであるが、蒙古語で之を Mori とす所から之を察すると、此の動物は太古から此の地に固有のものであつたのが推される。蒙古の東に位する Tunguse, Gilyak 朝鮮語等に於て馬を Mori, Mar と Sā のは確かに蒙古語を輸入したものである。而して、蒙古の高原に於いて良馬の産地として有名なものは、前にも述べた如く Balkal 湖の東岸であるから、此の地方が蒙古民族の發祥地なことも、自ら推知せられるのである」と論ぜられてゐる。(37) これらの論證によつて蒙古の地が馬と如何に密接な關係があり、また蒙古民族と馬とが如何に深い關係にあつたかといふことは最早贅言を要せぬであらう。然らば、かくも著明な馬産地なる蒙古高原を北方に控へた支那の地が、地理上より考へて蒙

古馬系圖の一部であつた事は、これを後世常に馬を蒙古に徴する事實から推しても明かな事であるし、且つ朝鮮語の *Mar* (馬) が蒙古語の *Mori* (馬) に負つたとするならば支那の *Ma* (馬) なる語もその蒙古語を單綴音にしたものなること疑ひないであらう。かう考へた結果として、古來支那の地に於いて飼養された馬はその本源を蒙古に發したものであつたらうといふ事が推知せられ、乗用として將亦輓曳用として使用されたものは、皆今の蒙古馬のやうな比較的體軀矮小な概して鈍重な、然も極めて頑強なものであつたことが窺ひ知られる。

かゝる北方産馬の形體が如何なるものであつたかは、これを現在この方面に廣く分布し棲息する土産馬の現状から推してほとり察知することが出来るが、又孝堂山石室畫象東壁石の一例(圖版第五ノ13・14) シャヴァンヌ氏圖録、圖版二八の第五〇、(CHAVANNES, Mission Archéologique. Pl. XXVIII, Chambrette du Hiao Tang Chan. N° 50—Partie inférieure de la Paroi orientale.) から當時の實際を明確に知ることが出来る。なほ、霍去病墓前の極めて寫實的な石馬(圖版第五ノ15)もまた恐らく同系統のものを現はしたに相違ないし、これが孝堂山石室東壁畫象の一例、特にその中央部の馬とは頸部など酷似してゐるのを認め得るのであつて、當時の實際を窺ふ好資料である。(附記一参照)

こゝに一言附け加へて置きたいのは、往々先秦の文獻に見える馬、一例を示せば『周禮』の夏官司馬の條に「校人掌王馬之政辨六馬之屬、種馬一物、戎馬一物、齊馬一物、道馬一物、田馬一物、驚馬一物」などといひ、或は「天子十有二閑、馬六種、邦國六閑、馬四種、家四閑、馬二種」などあつるのは、この記述そのままを史實

と見ることは出来ないとしても、古から馬といふものが注意されてゐた事を示してゐる。而してそれは何れの民族の間にも存する文化發達の自然の欲求に出ること、その當時飼養され、利用された馬は、上に考察を試みたところから推して、恐らく蒙古馬の系統のものであつたに相違ない。春秋の分裂時代から戰國時代を経て秦の世に至る間、支那の内部に於ける諸勢力の競争に際しても無論馬は用ゐられたであらうけれども、支那に於いては騎馬民族たる匈奴の勢力と對抗するに及んで馬に對する欲求は非常に切實となり、秦末漢初に於いてはその狀勢一層切なるものがあつたらうといふことは容易に推察せられると共に、その事情が漢武帝の時大宛の馬を隨喜した事と密接な關係を持つてゐたに相違ない。

七 漢代の西方馬に對する考察

上に考察を進めて來たところで、支那古來の馬が蒙古馬の系統のものであつたといふ事は容認して大過ない事と信ずる。然るに『前漢書』(卷六)武帝本紀を見ると、大初元年に「遣貳師將軍李廣利、發天下謫民、西征大宛」とあるのについて「四年春貳師將軍廣利、斬大宛王首、獲汗血馬來、作西極天馬歌」とある。こゝに所謂天馬とは前に述べ來つたやうな進展の過程を辿つて現はれた思想であるが、この文面を以つて察すると汗血馬即ち天馬といふ考も存したものと察せられる。然も『前漢書』卷二十二禮樂志の「天馬徠從西極、涉流沙九夷服、天馬徠

出泉水、虎脊兩化若鬼、天馬徠歷無草、徑千里循東道、天馬徠執徐時、將播舉誰與期、天馬徠開遠門、竦身遊崑崙、天馬徠龍之媒、游闔闔觀玉臺」といふ郊祀歌は「太初四年誅宛王、獲宛馬作」と題されてゐて、上のものと相照應するところのものである。また汗血馬を歌つたものと信ぜられる「太一況天馬下、霑赤汗沫流藉、志倣儻精權奇、籟浮雲曉上馳、體容與泄萬里、今安匹龍爲友」といふのは「元狩三年馬生渥洼水中作」と題してあり、それを本紀に照合すると元狩二年の條に「夏馬生余吾水中」とあるのみで元狩三年に上のやうな記事が無いのみならず、この兩者は全く別の記事と察せられる。然るに渥洼水から馬を生じたことは、その例が本紀元鼎四年にもあつて「六月得寶鼎后土祠旁、秋馬生渥洼水中、作寶鼎天馬之歌」とある。此の記事はその翌年の詔に、鼎と馬とがいつてあることから推しても重要視されたものに相違ないから、元狩三年の渥洼水から馬を生じたといふのは元鼎四年の事から作爲されたものではないかと考へられる。たゞかゝる記載に通ずる水中から馬を生じたといふのは如何にも解し難いことであつて、或は「龍爲友」とか「龍之媒」とか云つて、時に龍と關係づけられてゐるこの動物は、龍と水との縁から轉じてさやうなこととなつたのではあるまいかと考へられ、或は馬といふ動物は水無くしてはその性能を發揮し得ぬもので、時に食糧は缺くことがあつても飲水は缺くべからざるものであるから、その事實が説話的に發展して馬が水中から生ずるといふ形になつたものではなからうかと察せられるが、これだけの史料からでは如何とも断定は下し難い。なほ、前の元狩二年の記事は「夏馬生余吾水中、南越獻馴象能言鳥」とあつて、南越の象や能言鳥と結びつけて説かれてゐるところに南北を對稱したらしき思はれ、余

吾水を今の外蒙古翁金河に比定する説もあるから、これは北方の産馬に關係ある説と想はれるに對して、渥洼水といふのは上に引用した記事に李斐が注して「屯田燉煌界、數見於此水旁羣野馬、中有奇異者、與凡馬異⁽¹¹⁾」と言つてゐて燉煌方面の河水と信ぜられ、それから推して燉煌の邊を経て稀に西方の汗血馬が漢土に齎された事實を示したものと察せられる。

さて、本紀元鼎四年の記事は西方の天馬の意味が現はれて居り、それから作爲されたものかと思はれる元狩三年のは霑赤汗とあるところから汗血馬であつたらうと考へられるが、果して然らば西方馬、換言せば汗血馬は太初四年李廣利の大宛遠征の結果始めて漢に齎されたのではなく、既にそれ以前に知られてゐたものと信ぜられ、且つその間の事情は當時の史料を検するとほゞ明瞭になるやうに思はれる。即ち『史記』及び『漢書』の記載によると、大宛の善馬が漢に知られるに至つたのは張騫遠使の結果であつて『史記』卷一百二十三「大宛傳には「(上略)具爲天子言之曰、大宛在匈奴西南、在漢正西、去漢可萬里、其俗土著、耕田稻麥、有蒲陶酒、多善馬、馬汗血、其先天馬子也、」とあり、漢書卷九十六西域傳大宛國の條には「宛別邑七十餘城、多善馬、馬汗血、言其先天馬如也、張騫始爲武帝言之」とある。元來元朔三年に張騫が僻遠の西域から歸來してより、先づ漢朝當局者の西域に對する知識が著るしく進んだことは想像に難くないが、永年騎馬民族たる匈奴に對する作戰に苦しめられてゐた際ではあり、一部識者の注意が張騫の所謂大宛の善馬に向けられると共に、如何にかしてこれを得ようといふ欲求の切であつたこともまた察するに難くない。而して上に推測を試みたやうに、稀に西方の汗血馬が齎さ

れたこともあつたであらうが、永年希求された汗血馬が漢土に育生されるに至つたのは太初四年の大宛遠征の結果であつたに相違ない。また上に屢々引用し來つた『史記』、『漢書』の文面を見ると天馬の思想と「鬻赤汗沫流赭」とある汗血馬とは結合してゐ、天馬即ち汗血馬といふ思想の存したことが窺ひ知られる。換言すれば本來は別のものである天馬と汗血馬とが結びつけられてゐるがこの事は後に説明を試みるであらう。

かくて、『史記』、『漢書』の記すところを検すると、武帝が李廣利に命じて大宛に遠征せしめた目的の一角が天馬之子を獲得しようといふことにあつた事は頗る明白な事實であるし、その間の事情については白鳥博士が「大宛國考」に委曲を盡して論證せられたところで、最早贅説の要はないから、こゝには『史記』、『漢書』にある遠征の結果の記載を引くにとどめる。即ちその結果につき『史記』大宛傳には「漢軍取其善馬數十匹中馬以下牝牡三千餘匹、而立宛貴人之故待遇漢使善者名昧蔡以爲宛王」とあり、『前漢書』西域傳、大宛の條には「伐宛四年、宛更にその馬人斬其王母寡首、獻馬三千匹漢軍乃還、語在張騫傳、貳師既斬宛王、更立貴人素遇漢使善者名昧蔡爲宛王」とある。その數を知る爲に『前漢書』卷六十一張騫李廣利傳を見ると「漢軍取其善馬十匹中馬以下牝牡三千餘匹」とあつて前の記述と同一である。上に引用し來つた種々の記載によつてこれらの一部が汗血馬であり、然も當時にあつて極めて珍重すべきものであつた事は疑ひ無いが、李廣利の大宛遠征によつて齎された三千餘匹の馬は、從來漢土に存した蒙古系統の支那馬とは著るしく趣を異にした駿馬であつたことが推察せられると共に、古來發達し來つた天馬の思想はこの駿馬を見るに及んでこれと結びつけられることとなつたのであらう。良き馬

を天馬に聯想し、これと結びつけた事實は『史記』卷一百二十三大宛傳にある「神馬當從西北來、得烏孫馬好、名曰天馬、及得大宛汗血馬、益壯、更名烏孫馬、曰西極馬、大宛馬曰天馬」とあるところから極めて明瞭な事である。上に述べ來つたやうに記録に推考を加へた結果、一般の支那馬は蒙古系統の土產馬であり、そこに漢の武帝の世の大宛遠征によつて、優秀な西方の駿馬が入り來つたとするならば、その事はまた前者の土產種であつたのに對し、後者は何時の頃から如何にしてといふことは明言し難いが、兎も角改良種であつたらうといふことが推察される。さう考へて、『前漢書』大宛國の條、天馬の下に孟康が「言大宛國有高山、其上有馬、不可得、因取五色母馬、置其下、與集生駒、皆汗血、因號天馬子云」と注してゐるのを見ると、この話は餘程説話的に發達した後形であるが、その根柢に馬の改良が行はれた意味を宿してゐると信ぜらる。

かく考察を試みると、上に述べた二種類の馬種は夫々趣を異にして特徴を持つてゐたに相違ないから、一應畫象石についてその考究を試みずにはゐられない。幸に漢畫象石には馬の圖様がかなり豊富に遺つてゐるので、その考究に有力な參考となるが、想ふにその馬は、僅かに孝堂山石室東壁の一例（圖版第五ノ13・14）を除いては全部極めて堂々たる體軀、輕快な歩様のもののみである。而してかく畫象石に表現せられるに當つては恐らく世の常ならぬ良き馬、即ち普通のものより立派なものが採られたらうと想像せられ、それは恐らく大宛の汗血馬或はそれに縁ある馬種と思はれる。然らば、唯一の例である孝堂山石室東壁の雜兵騎戰の圖様の馬は、恐らく前に考究を試みた蒙古系統の土產馬であらうと推考せられる。余は畫象石の馬をかく考へてゐたが、先頃圖らずもラウ

フェル氏(B. LAUFER)がその名著『漢代の土器』の中に「胸、首及び臂が非常に發達した堂々たる體軀とその軽い脚をその特徴とすべき漢の bas relief の馬を漢史の記載に依つて立證しつゝ、それが漢代にバクトリアから齎されたる良駿の特殊な馬種を表はしたものであるといふ説を立派に打ち建てたのはレイナック氏 (Salomon REINACH) の大にして没すべからざる功績である。例外であつて、然も唯一の例である孝堂山の戦場の馬は今蒙古矮馬と稱せられて、支那全土に見受ける小さい馬種を現はしてゐる」と言つて居られるのを知り喜んだのであつたが、たゞラウフェル氏據る所のレイナック氏が La Revue Archéologique に載せたとし「古代及び近代藝術に現はれた襲歩の表現」(La représentation du galop dans l'art ancien et moderne) なる論文を見る機會を得ないのは余の甚だ遺憾に堪へぬところである。依つて、今余はラウフェル氏の引用せられたところのみを以つて、レイナック氏の説を窺ふ外ないのであるが、氏が胸、首、臂の非常に發達した堂々たる體軀と軽い脚のみの二條件を以つて、畫象石中の西方馬種を論斷せられたとするならば、余はその着眼に深甚なる敬意を表すると共に、なほこれに重要な一條件を付け加へて論ずる要があり、且つ論じ得ると確信するから次にその事について聊か述べてみようと思ふ。

余は漢の畫象石の馬の圖樣を考究してみた結果(圖版第五・第六ノ16)、ラウフェル氏引く所のレイナック氏の説明するやうな點も認められること勿論であるけれども、なほこゝに看過し難い重要な事實があるといふのは、極めて收縮した姿勢を爲し、後肢を深く踏込み、前軀を起揚し、頂を屈撓し、前肢は高くこれを擧げて、如何にも



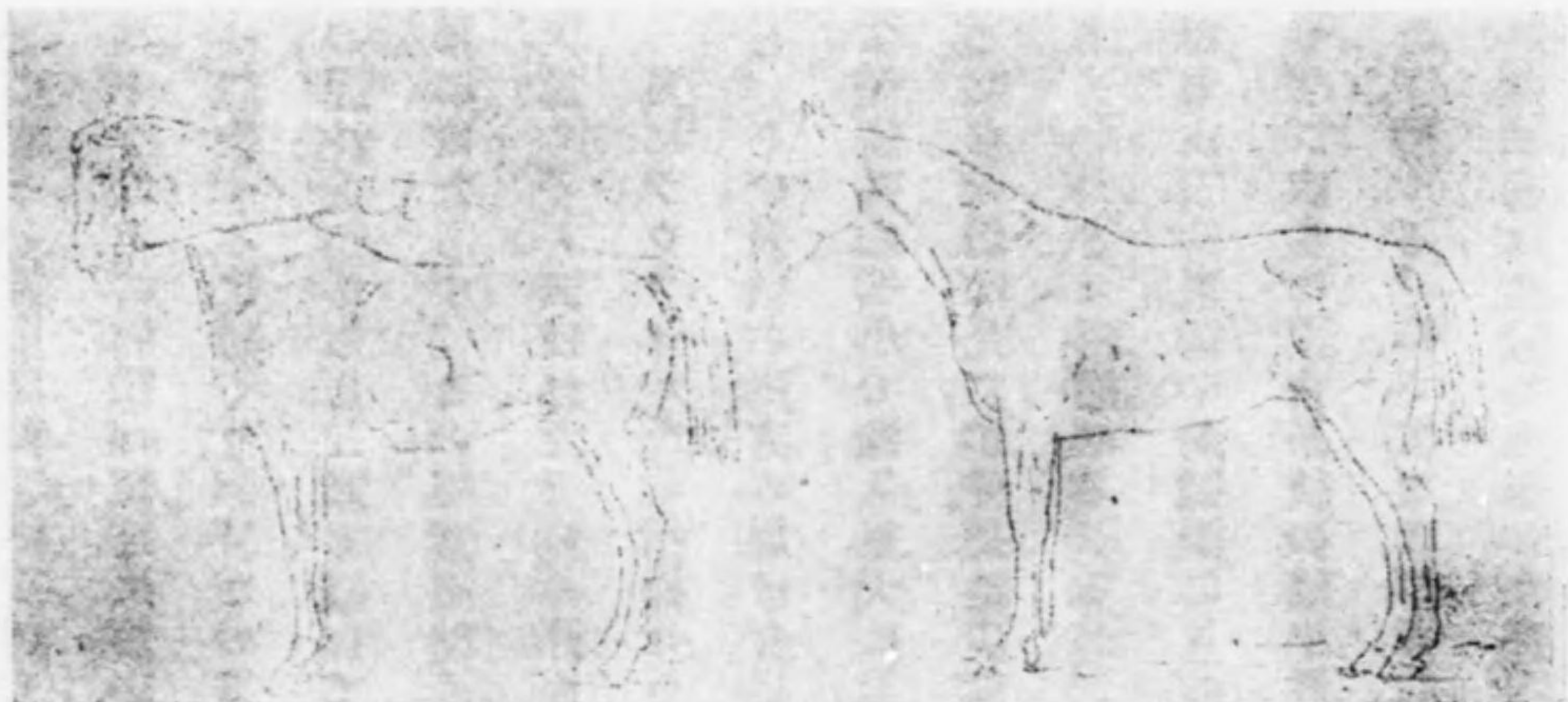
勢姿縮收 勢姿然自
 擡屈を項し揚起を肢前み込踏を肢後はてつかに勢姿縮收
 る得げ擧を肢前く高際歩運てめ初てし縮收くか。るす
 るあで勢體のこて凡ど殆は馬の石象畫がるあでの

豁達にして輕快な歩様をしてゐることであつて、かゝる體軀歩様は斷じて蒙古系統の馬には求め得ぬところである。實にかゝる姿勢及び歩様は骨格に基因するところ大であると共に、決して自然姿勢で可能なものでなく、必ず或る種の御術を使用したものなることがわかる(上の挿圖参照)。換言すればその骨格は自然のままの原種のそれではなく、改良種にのみ見得るものであるといふ事實と、漢代には馬を馱す技術が相當進んでゐたに相違無いといふ二つの顯著な事實を明瞭に示してゐると信するのである。

先づ骨格のことから詳説してみると、この圖樣にある馬は實物を寫したのが基本となつてゐるに相違ないが、非常に前軀を起揚し項を屈撓させてゐる。固より多少の屈撓的體勢は原種に於いても求め得ぬ譯ではないが、概して蒙古系統の馬は頭が重大で上膊骨と肩胛骨との爲す角が鈍角を爲し、自然、肩の傾斜が急であり、然も肩胛骨が短い上に頭が稍、厚くして短かいので、その結果骨格上、頭を起揚し項を屈撓し難いのが一般である。蒙古馬も最近

フェル氏(B. LAUFER)がその名著『漢代の土器』の中に「胸、首及び臂が非常に發達した堂々たる體軀とその軽い脚をその特徴とすべき漢の *Das Relief* の馬を漢史の記載に依つて立證しつゝ、それが漢代にバクトリアから齎されたる良駿の特殊な馬種を表はしたものであるといふ説を立派に打ち建てたのはレイナック氏(Salomon RENACH)の大にして没すべからざる功績である。例外であつて、然も唯一の例である孝堂山の戦場の馬は今蒙古矮馬と稱せられて、支那全土に見受ける小さい馬種を現はしてゐる」と言つて居られるのを知り喜んだのであつたが、たゞラウフェル氏據る所のレイナック氏が *La Revue Archéologique* に載せたといふ「古代及び近代藝術に現はれた襲歩の表現」(La représentation du galop dans l'art ancien et modern)なる論文を見る機會を得ないのは余の甚だ遺憾に堪へぬところである。依つて、今余はラウフェル氏の引用せられたところのみを以つて、レイナック氏の説を窺ふ外ないのであるが、氏が胸、首、臂の非常に發達した堂々たる體軀と軽い脚のみの二條件を以つて、畫象石中の西方馬種を論斷せられたとするならば、余はその着眼に深甚なる敬意を表すると共に、なほこれに重要な一條件を付け加へて論ずる要があり、且つ論じ得ると確信するから次にその事について聊か述べてみようと思ふ。

余は漢の畫象石の馬の圖樣を考究してみた結果(圖版第五・第六ノ16)、ラウフェル氏引く所のレイナック氏の説明するやうな點も認められること勿論であるけれども、なほこゝに看過し難い重要な事實があるといふのは、極めて收縮した姿勢を爲し、後肢を深く踏込み、前軀を起揚し、頂を屈撓し、前肢は高くこれを擧げて、如何にも



收縮姿勢 自然姿勢
收縮姿勢は、前肢を高く起揚し、後肢を深く踏込み、頂を屈撓し、前軀を起揚し、頭を高く擧げて、如何にも

體軀にして輕快な歩様をしてゐることであつて、かゝる體軀歩様は斷じて蒙古系統の馬には求め得ぬところである。實にかゝる姿勢及び歩様は骨格に基因するところ大であると共に、決して自然姿勢で可能なものでなく、必ず或る種の御術を使用したものなることがわかる(上の挿圖参照)。換言すればその骨格は自然のままの原種のそれではなく、改良種にのみ見得るものであるといふ事實と、漢代には馬を馭す技術が相當進んでゐたに相違無いといふ二つの顯著な事實を明瞭に示してゐると信するのである。

先づ骨格のことから詳説してみると、この圖樣にある馬は實物を寫したのが基本となつてゐるに相違ないが、非常に前軀を起揚し頂を屈撓させてゐる。固より多少の屈撓的體勢は原種に於いても求め得ぬ譯ではないが、概して蒙古系統の馬は頭が重大で上膊骨と肩胛骨との爲す角が鈍角を爲し、自然、肩の傾斜が急であり、然も肩胛骨が短い上に頭が稍、厚くして短かいので、その結果骨格上、頭を起揚し頂を屈撓し難いのが一般である。蒙古馬も最近

世になると優良馬種との交雑も行はれ、今サンペーズ馬に見るやうな優秀なものも生ずるに至つたけれども、上のやうなその特徴は現今に於いてさへ、その然るを見るのであるから、上代には一層さうであつたらうといふ事は想像するに難くない。この根本的な観点から對比して見ると、畫象石の馬には殆ど凡て顯著な前驅の起揚と項の屈撓とがあるし、頭も概して小さいから、これはどうしても蒙古地方土産馬などの原種でなくして改良種と認めねばならず、この事實を前の記録の考察と對比すると、この改良種は古來支那に存した蒙古系統の馬ではなく、天馬の子と云はれた大宛の汗血馬もしくはその系統のものと思はれる。

更にラウフェル氏の指摘せられた孝堂山畫象東壁、雜兵騎戰の圖様（圖版第五ノ13）に現はれた馬を考へてみると、その騎戰の兩方の馬は合して僅かに十八九頭に過ぎないが、その馬は他の畫象石の人と馬との割合から推して體軀甚だ矮小で頭も重大に見え、頸は極めて短かく、遺憾なく蒙古系統の馬の特徴を現はし出してゐる。たゞこれらの馬は凡てが伸長馳歩の圖であるから、後肢の踏込の如き前驅の如き事が現はれてゐないのではあるまいかとも考慮せられるが、多くの畫象石の馬の體尺と、乗つてゐる人の身長との大體の割合を調べて見ると、孝堂山石室東壁の騎戰圖の人の身長と馬の體尺とを對比すれば、その馬が矮小種なることが直ちに氣付くのであつて、容易に蒙古系統の矮小馬なることを知り得、これが他の畫象石に現はされてゐる馬とは全然異なるものなるを了解する。かくてこの事實は記録の考察から得た結果と全く一致するのである。

次に前に注意して置いた畫象石に多く見る如何にも收縮した姿勢で、後肢を踏み込み、前驅を起揚し、項を屈

撓したその姿勢は決して自然のままのものでなく、或る特殊な御術を以つてしたものであらうといふことであるが、かゝる姿勢は馬にとつては不自然なものであると共に、かなり苦しいに相違ない。如何なる馬と雖も、自ら好んで自身にとり甚だ窮屈なかゝる姿勢をする筈はないのであつて、これは馬を推進しつゝ、轡を控へ衝を受けしむることによつて初めて可能なのであるから、この意味で特殊な技術を以つてしたことは疑ふ餘地がないのである。なほこの特殊な御術を用ゐた證據は他にも存するので、漢代のものとされてゐる明器の馬首を見ると、往口を開いたものが存し（圖版第六ノ17）、畫象石のうちにもそれがあつたと共に、馬脰にあつては屢々下顎の破損してゐるものを見るが、それは口を開いてゐた爲め下顎の部分が薄弱で破損し易いことに原因してゐるのである。

（圖版第十六ノ17）然もかゝることは一般には殆ど注意されてゐないが、これと同じ事實は唐代の馬脰にあつても一層顯著なのである。（圖版第六ノ18）然らば何故口を開いてゐるのであるかといふに、それに對して、余はフィリス氏の所謂屈撓と口との關係の説を以つて説明して過ちないと信するのである。即ち氏は「屈撓は單に頸に於いて表現せられたるのみにして満足すべきものにあらず。必ず口を開きつゝこれを表現する。下顎をも服從せしめざるべからず。これ下顎の屈撓は屈撓作業に最も重大な影響を有するものなるを以て特に注意を要す」と云つてゐるが、馬の性狀の大體は今も古も大なる相違は無い筈であるから、この事を參考すると漢代の馬脰に口を開いたものの尠くないこと、及び往々下顎の破損して無いもの存するのは、當時屈撓に對する御術が或る程度まで進んでゐた事を示して餘りあるのである。

なほ漢代の西方馬については「汗血」といふかなり困難な問題がある。汗血といふのが如何なる意味であるか容易に解き難いので、余は時にはこれが何等か西方の言葉の音譯ではないかと考慮を試み、時にはこの文字が何等か性質を現はしてゐるものではないかとも考へ耽り、また時には改良種は性鋭敏なため使役に際したゞちに發汗することが著しく目につくものであるから、汗の文字は何等かさ様の事實と關係あるものではないかとも想つたが、血といふことになる、出血は馬にとつて最も忌むべきことであるのみならず、此の動物は一度血を出す程の外傷を受けるとその痕跡は生涯残つて發毛せず外貌を損すること甚だしいものなる事、古と雖も變りはない筈で、さういふやうに解いて見たのでは到底この事は解釋されない。

かくて、終に「露赤汗沫流緒」ともあるのであるから、これは汗血といふ言葉から聯想せられたのでなく、當時の人々の實見、もしくは實見から發達した比喩に基づくものと思はれ、やはり「血を汗する」の意とするの妥當なるを信ずるに至つた。而してこの推定は、『後漢書』卷七十二光武十王列傳にある東平憲王蒼傳に「遺宛馬一匹、血從前膊上小孔中出、常聞武帝歌天馬露赤汗、今親見其然也」とあるのや、太初四年汗血馬の條に應邵が「大宛舊有天馬種、鬪石汗血、從前肩膊出如血、號一日千里」と注してゐるのや、更に王先謙『漢書補注』に「案今伊犁馬之強健者、前膊及脊往有�瘡出血、名曰傷氣、必在前肩膊者以用力多也、前賢未目驗、故不知其審」とあるのなどを併せ考へてみると誤り無じことが察せられる。殊に最後の伊犁馬についての記述は、文勢上記者の實見と思はれるから、或る地方に「有�瘡出血」ものが存したので、さやうな事實が多少説話的に發達して汗

血といふことになつたのではあるまいか。果して然らば現在もさやうな馬がゐない筈はないから、余は近世に於ける中央亞細亞方面旅行者の記録にして、この甚だ珍奇な現象に注意した者が存するであらうと考へ、及ばずながらも涉獵これ努め、苟くも馬に關しての記述あるものは入念にこれを調べてみたが終にその例を見出し得なかつた。併し、驪つて考へると歐洲の旅行者が如何に凡ての方面に興味を有して注意深いとは云へ、動物に對し特に研究欲のある者か、然らざれば馬を愛するの心ある人でなければ、かゝる特殊な事は注意しないのが寧ろ當然であらうから、近代旅行者の記録の中にその記述が無いからと云つて、上に引いたやうな事實が皆無であり、或は記録が眞を缺いてゐると斷ずるのは早計に失したことであらう。

かくて、余は策の施す無きを思ひ失望の間を時を經るうち、偶々白鳥博士はフランツ・シュワルツ氏 (Franz Schwarz) の著はすところなる、『トルキスタン、印度日耳曼民族の搖籃』なる書を檢索し考究すべきことを教示せられた。就いて見れば、シュワルツ氏はトルキスタン地方の馬種につき精細な記述を試みた後に「トルキスタンの馬種——特にその優良種——の特徴は汗血 (Blutschitzen) の稱あることで、この状態は既に古代支那の記録者も氣がついてゐて、その當時特殊な比喩物語を爲す起原となつてゐる。といふのは、肩及び頸に結節ある血管 (Blutaderknoten) を生ずることに基づき、その怒張が見苦しい痒疹となり、馬は齒で以つてそれを搔くのである。それがため、かゝる馬は肩及び頸に春の間血痕が斷えない。この現象はトルキスタンの馬は冬中戸外にゐるか、或は半戸外的な厩舎に入れられてゐて、極寒期に吹雪によつて馬の皮膚に血液滯滯が起り、それ

が爲め結節ある血管を生ずるのである。馬が極寒中無保護に身をまかせるといふ状態の永い繼續は、温暖の候に至つてその毛の甚だしい脱落となり、乗つたりまた車に繋いだりする際、断えず馬の毛が衣服に附着して極めて不愉快である」と述べて居られるが、古、汗血と稱せられたのは、かゝる事實が物語的に發達して現はれたものと解いて大過なからう。

元來蒙古種の如き原種は比較的皮下脂肪が多量な爲め、自然極寒の環境に對しても抵抗に富むのであるけれども、これに反して、改良種は如何なる事由に據るのか動物學の専門的知識に乏しい余には不明であるが、兎も角皮下脂肪が一般に薄く、それが爲め血管が皮膚に近く存し、寒氣はたゞ冬、毛が密になることによつてのみ防いで、自然血管に對する刺戟が大きいから、シュワルツ氏の言ふやうな血管の變調を來たし、それが温暖の季節に至つて特殊の痒疹となるといふやうな事は決して皆無の事實とは云へない。而して、シュワルツ氏が馬毛の異常な脱落を力説してゐる點からも、皮膚に特別な影響のあることは疑ふべくもないし、假に多少共血の出たところへ使役によつて發汗する場合があつた事を想像して見ると、それは正しく血を汗した如くに見え、それらの事實が説話的に發達して恐らく汗血と云はれたものと考へられる。余は汗血といふ事を上のやうに解釋してほゞ過誤あるまいと思ふのである。

かく考へ進んで來て、なほ殘された問題は「貳師」の名稱である。この事に就いては既に「大宛國考」の内に、白鳥博士が詳説せられてゐるから、言語の知識の皆無な余は博士のその高説に據る外ないのである。依つて、讀

者經閱の勞を省かんがため、敢てこゝにその高説の一部を引用して置く。即ち博士は「大宛國の都城が貳師城なる名を負へるは汗血馬の産地たりしが故なるべし。Nisa, Nisaya と稱する處は Media 國にもありて善馬の産地として太古に著明なりき。その徴は Herodotus の第七卷第四十章に『此馬は Nisaeon と呼ばれ Media 國の廣野に産し體軀長大にして世の常のものにあらず』とある是なり。Nisea の原と稱せし處は今の何れに當るべきかを的確に知ること能はず。Strabon は之を Armenia の國にありと爲せども是れ固より誤りなり。或は之を Persia 國の Suidas にありといふものあれど多くの學者は之を Media 國の内に入りきといふに一致す。Alexander 大王が Opsis より Ectabatana に至りし時途中に於て此の原野を通過せりといふは、此の地は Behistan と Khorasan Abad との間を位する Ahamad 及び Alistar の原野なるべし。(RAWLINSON, Herodotus. II. pp. 39—40) Strabon は之を Media と Armenia とを多く馬を産し Persia 隆盛の時代には Armenia の Hippobotas としむ牧場には五萬の馬を牧畜せりといふ。此の國馬の産額決して Persia に劣らず、特に Nisea の善馬は此國にも産し Persia にて Mithra の神の祭祀を行ふときは Armenia の太守は常に二萬の駒を Persia 王に獻上せりといふ。Nisea の馬といふは今の Turkman 馬に類し快走するに適す。而して Nisa, Nisaya の名は Oxus 河の南北に互りて所々に見ゆれば必ずある意義を有する名稱なるべし。Strabon は Nisae を Hyrcania 國の一部分なりとも、又獨立せる一國なりともいふ。Ammianus Marcellinus は Nisea を Hyrcania 國といふ一都市なりといひ、Plinius は Parthia 國といふ Nisae と呼ぶ處ありといひ、Ptolemaeus は Margiana と

Nisalia と云ふ處あり、また Aria には Nisalia と呼ぶ民族ありと云ひ又 Hesychius 及び Sudas の字典を案ずるに Susiana と Bactria の間に Greek 語にて Nisos 或は Nisos と書ける地名ありと云ふ。更に Behistan に存する Darius 王の碑文には Media 國の地名として Nigava を擧げ、Vendidad の文中には Bakhadi と Mōnu との間 Marghas 河の上流域に Nigava と稱する地名を記せり。(Herr, Kulturpflanzen und Haustiere. pp. 31—34) 此の如く Nisa, Nisā, Nisava の名が西南 Media より Khorasan を經て東北 Fergana に至る地域に散在するは決して偶然の事にあらざるべし。想ふに此の名は元と Median 國の Nisea に發し、此の地善馬を以て著名なりしを以てその他馬の産地には此の名を冠するに至りしにあらざるなきか。⁽⁴⁷⁾と説かれてゐるが、貳師の由來はこの論證によつて全く疑ひなきに至つたものと云つてよからうから、以上でほど漢代に大宛から齎らされた西方馬に關する重要な問題は解釋せられたと思ふ。而して、太初四年 (B.C. 101) に「漢軍取其善馬數十匹中馬以下牝牡三千餘匹」とあり、恐らくこの多數の馬は漢に齎されて後、種馬ともせられたに相違ないから、翌春五六月の交に受胎したものもあつたと想像して、牝馬の妊娠期間を平均三百四十日とすると、その翌春即ち天漢二年 (B.C. 99) 四五月の頃には支那に於いて生じた西方馬種の駒が現はれ、それが六歳頃から乗用に供せられたとして、それは太始四年 (B.C. 93) 頃からのことであらうと察せられ、漢の畫象石に極めて多く現はされてゐるあの悍威ありげな馬は、さやうにして育成されたものであると推察せられる。

八 大宛汗血馬の由來に對する臆測

大宛の所謂汗血馬が漢代にあつて一般の馬と異り、優秀なものであつたから天馬とも關係づけられ珍重せられた事實の概略は、上に考察し來つたところによつてほど明瞭になつたであらう。而して、それが自然のままの原種でなく改良種であらうといふ事も疑ひないことである。それに就いて白鳥博士は「大宛國考」のうちに「漢書西域傳汗血馬の注に『孟康曰、言大宛國有高山、其上有馬不可得、因取五色母馬置其下、與集生駒、皆汗血、號曰天馬子』とあり、又唐書卷二百十一下の西域傳吐火羅の條に『北有頗黍山、其陽穴中有神馬、國人遊牧牝干側生駒輒汗血』とあり。是等の記事固より悉くは信ずべからざれど汗血馬の混合種なるは事實なるべし」と言はれてゐるが、余は博士の汗血馬を混合種とせらるゝ着想に深く敬服するものであるから、以下その混合即ち改良の由來について臆測を敢てし、以つて試みに世界の馬の歴史に於ける大宛の汗血馬の位置を明かにしてみよう。

大宛の汗血馬は今その血種の生ずる過程を顧みず、たゞ漢史の記載に基づいて見ても、既に紀元前二世紀に存在してゐたことは疑ひ無い。然るに、今日迄東方に於ける優秀な馬種はアラブ (Arab) が最も著名なものであるが、その良馬なることは四世紀の記録に漸く現はれるのであつて、現在のトルコマン馬にアラブの血種が加はつたのはずつと後世の事に屬する。而して、古代に於いて著名な種馬場はメディア地方であつたことは、ストラボ

ン及びヘロドトスの記述に依つてヴィクトル・ヘーン氏が説明した通りで、それは上に引いた白鳥博士の所説からも窺ひ知られるであらう。⁽⁴⁹⁾ 加之メディアの駿馬がその地に於ける累年の改良に成つたのは勿論であるが、その起源は、アムダリヤ (Amu Darya) とカスピ海 (Caspian) の間なる所謂トゥラン (Turan) 平原に發すること、及び今一步溯つてトゥランの馬はその東方アムダリヤ、シルダリヤ (Syr Darya) 上源方面を本源地とするものであらうとは、これまたヘーン氏が精緻なる論證を敢てし、極めて權威ある研究として識者の間に定評あるところであるから、最早余の如き末輩が贅言を費す要のないことである。

こゝに、なほ古の大宛の領域は如何なる地を占めてゐたか、而してその地が果して馬産に適する土地か否かを究めて置く必要がある。然るに、古の大宛の領域については既に白鳥博士の精細な研究があつて、その高説を要約すれば、『史記』『漢書』等の記載より解すれば、大宛は烏孫の西南に位し、烏孫の都城赤谷城が *Akesu* 西北に位する *Bedel* 峠と *Issik-kul* 湖との間に在る事確かであるから、此處より西南二千里の處に位する大宛の都城を *Fergana* の地に求めるが當然であるし、恐らく烏孫と大宛との境界換言すれば大宛の東界は今の *Fergana* 州と *Semirečensk* 州との境界を以つてこれに擬して亦大過ない。次に大宛の北界は如何といふに、北方及び西北方に於いて康居と隣接せること記録の示すところであり、その康居とは今の *Karamtau*, *Chokkaltau*, *Alatau* 等の諸山脈を以つて境界としたこと疑ひなく、既に二三泰西の東洋學者も推斷を試みた如くその疆域は *Pamir* の高地の部分を除ける今の *Fergana* に擬するが至極妥當である⁽⁵⁰⁾との意を詳説されてゐるから、余は今全然こ

の高説に據らうと思ふ。然も、此の土地は今を去ること二千餘年前既に業に優秀なる血種の産馬地として漢人の注意を惹いたことは、上に引いた『史記』『漢書』の記載によつて明瞭な事實であると共に、現在に於いてもなほ、相當の牧畜地域であるらしい。それはこの方面の探検旅行、研究者の報告によつて知られるのであるが、一例を挙げれば、ウジユファルヴィー氏 (UJFALVY) はその著書の内フェルガーナの條にその地理を説明し「南北共に山脈を以つて圍繞せられてゐるシルダリヤの上源地方のうち、河川流域の草原地帯が最も牧場に適し、牛羊を産し、特に馬については比較的低い草原地帯には概してカラベール (Karabair) 馬あり、やゝ高き地方にはキルギス (Kirghiz) 馬あり、アルガマク (Argamak) 馬は稀にして貴重であるし、この地方、別して驢種の群居する⁽⁵¹⁾と」を云つてゐるから、此の地方の地理は今なほ漢代の古の如く牧畜に適するところであり、相當の馬産地であることがわかる。

かくて漢代の所謂大宛の地、はゞ今の *Fergana* に當る地方が牧畜に適してゐ、その地に良駿を産し、然もそれが改良種なる事史料に據つて推定せられると共に、産馬上血種は短時日で固定せられるものでなく、非常な年所を要する事を併せ考へると、自然種即ち原種馬群の棲息地域として著名な蒙古高原より阿爾泰方面に至る一帯の曠野を東北方に有するシルダリヤ上源流域の草原が、南北に連なる山脈のために不斷に波及する馬群の移動の禍を遮りつゝ、嘗て自然馬種と關係深い突厥民族により、悠遠の古から靜かに良馬と良馬とを選んで優生的繁殖が行はれ、漢代即ち紀元前二世紀の頃に至り、既に或る程度の血種の固定を見るに至つてゐたのであらう。そし

て乾燥した大氣、草質よき飼糧の地的環境の影響と優生的淘汰との結果、胸は廣く首及び臀共によく發達し、體軀堂々として、脚は軽く且つ比較的皮下脂肪薄くして悍威に富み、骨格は前軀の起揚に適して收縮、屈撓に富み、歩樣豁達なる良馬を産するに至り、やがてそれがイラン人の手に據つて漸次諸地方に擴充せられたものであらうと想像せられる。かくの如くに考へて來ると、漢代に天馬の子と稱せられて珍重せられた大宛の汗血馬なる馬種は、世界に於ける馬種改良の史上に極めて特殊な位置を有するものと言はねばならず、幸にも漢代の史料によつてその事情の概要を明かにし得るのは實に興趣深き事と云つてよからう。

- (1) W. T. OLCOTT, Sun Lore of All Ages, p. 290.
- (2) H. A. GOEBER, The Myth of Greece and Rome, pp. 66—67.
- (3) J. G. FRAZER, The Worship of Nature, Vol. I, p. 462.
- (4) FRAZER, *op. cit.*, p. 531.
- (5) FRAZER, The Golden Bough, Magic Art, Vol. I, p. 315. The Worship of Nature, Vol. I, p. 476.
- (6) R. SMITH, Religion of Semites, pp. 293—294.
- (7) FRAZER, The Golden Bough, Magic Art, Vol. I, p. 315. The Worship of Nature, Vol. I, p. 484.
- (8) VICTOR HEHN, Kulturpflanzen und Haustiere, (1911) S. 42.
- (9) L. W. KING, Babylonian Religion and Mythology, (1899) pp. 31—32.
- (10) BRUNO MEISSNER, Babylonien und Assyrien, (Kulturgeschichte Bibliothek) (1925) ss. 19—20.

- (10) FRAZER, The Worship of Nature, pp. 555—556
- (11) OLCOTT, *op. cit.*, p. 147.
- (12) FRAZER, The Golden Bough, Part I, Vol. I, p. 316.
Oidfeld HOWER, The Horse in Magic and Myth, p. 114.
- (13) The History of Herodotus, translated by G. RAWLINSON, (The Library of Living Classics) 1st. Book, p. 80.
- (14) HEHN, *op. cit.*, S. 36.
- (15) FRAZER, The Worship of Nature, pp. 455—458. HOWER, *op. cit.*, p. 115.
- (16) Zend Avesta, Part II, (S. B. E. Vol. XXIII) translated by J. DANFESTER, (1883) pp. 85—86.
- (17) WILLIAMS JACKSON, Die Iranische Religion, (W. Geirsen und E. Kuhn, Grundriss der iranischen Philologie) ss. 636—642.
- (18) HOWER, *op. cit.*, p. 117.
- (19) A. A. MACDONELL, History of Sanscrit Literature, p. 78.
- (20) MACDONELL, *op. cit.*, p. 79.
- (21) MACDONELL, Vedic Mythology, (Grundriss der Indo-arischen Philologie und Altertumskunde) ss. 47—48.
- (22) Max Müller, Lectures on the Origin and Growth of Religion, pp. 267—268.
- (23) Angelo de Gubernatis, Mythologie Zoologique ou les Légendes des Animaux.

- (24) OLOORT, *op. cit.* p. 61.
- (25) W. Cox, *The Mythology of Aryan Nation*. p. 254.
- (26) HOWEY, *op. cit.* p. 117.
- (27) MILLER, *op. cit.* p. 267.
- (28) *The Ocean of Story*, being C. H. TAWNEY'S translation of SOMADEVA'S *Kathā-sarīt-Sāgara* (or *Ocean of Streams of Stories*) Vol. II, p. 150.
- (29) その中の「朝發軔於蒼梧兮、夕余至乎懸圃」は王逸に依ると「蒼梧楚所葬也」「懸圃神山在崑崙之山」など注されてゐるが、それでこの意味が分るであらうか。『文選』にある司馬長卿の上林賦に「左蒼梧右西極」といふ句があり、これに對する從來の注釋は、蒼梧は長安東南の郡名でその點から左といひ、西極は長安の西にあるから右といふ、などといふのであるが、これは後世の解釋で「楚辭」のは朝と蒼梧、夕と懸圃と相對になつて居り、上林賦も西極に對するところから蒼梧は東方の木徳と關係があり、懸圃は玄圃を原形とする説もあるから西方日没の境を意味し、日の出る東と、日の入る西を意味するものかとも考へられる。『後漢書』馬融傳の「棲鳳凰于高梧、宿麒麟于西園」の高梧なども西園と對してゐる點で參考されはすまいか。
- (30) 白鳥庫吉博士「尙書の高等批評——特に堯舜禹に就て」(『東亞研究』、第二卷第四號、明治四十五年四月一日)
- (31) O. HOWEY, *The Horse in Magic and Myth* を見ても馬がいろいろのものゝ關係づけられてゐることが知られる。支那にあつても日にのみ聯想せられたものでないことは『前漢書』禮樂志、郊祀歌に「璽之車結玄雲、駕飛龍羽旄、靈之下若風馬」などいふ句のあることから窺ひ知られる。
- (32) この事については、嘗て『東洋學報』第拾六卷三號に載せた拙稿「上代支那の日と月との説話について」のうちに

論じて置いた。讀者の参照を得ば幸である。

- (33) 拙稿「上代支那の日と月との説話について」参照。
- (34) HEHN, *op. cit.* ss. 25—26.
- (35) Julius von NEGERLIN, *Die volkstümliche Bedeutung der weissen Farbe*. (Zeitschrift für Ethnologie, 1901) ss. 53—85.
- (36) HEHN, *op. cit.* S. 20.
- (37) 白鳥庫吉博士「室韋考」第四回(『史學雜誌』第拾編第六號、大正八年六月)六〇七—六〇八頁。
- (38) J. S. GALE, *A Korean-English Dictionary*. (1897) Part II, *Chinese-English Dictionary* p. 940 中の條に「馬(馬) A horse」云々。
- (39) 禮樂志に元狩三年とあるのに本紀には二年とあつても、若し渥洼と余吾とが同じ方面にある河川ならば、この兩者の現在の音が Yüwu と Yuwa とで近似であることから推して、或は同じ河川かとも思はれ、さう考へられるならば一つの事實が年を一年誤つて記されたものかとも考へられぬでもない。併し、本紀元鼎四年にある渥洼水の注に「李嬰曰南陽新野有暴利長當武帝時遭刑、屯田敦煌界、數於此水旁見羣野馬中有奇異者」とあつて、これが西方のものなることを推知せられる一方に余吾水は應劭の注にも「在朝方北也」とあるし、『史記』の匈奴傳にも前漢書の匈奴傳にもその名が現はれてゐるからこの兩者は全く別の河川であり、同時に上の二つの記事が同一と見難いこと言ふまでもない。
- (40) 龍と馬とが關係づけられたことは「龍馬」といふやうな語のあることから察せられるが、この聯想の起原は拙稿「龍の由來について」(『東洋學報』第拾七卷第二號所載)に考へて見たやうに龍は甚だ速かなものともされてゐるので、それと馬の駿足とが結びついて生じた思想ではなからうか。試に臆測を記して讀者の是正を仰ぐ。

- (41) この注は「羣野馬中有奇異」といふことに注意するのではなく、その地理上の位置に注意したのである。
- (42) Berthold Laufer, Chinese Pottery of Han Dynasty. p. 161 その中国バクトリアから齎されたと言つてゐるのは『漢書』などの記載から見ても誤つてゐることは最早言ふまでもない。
- (43) Salomon Reinach, La représentation du Galop dans l'art ancien et modern. Revue Archéologique. (1901) pp. 83 et suiv.
- (44) Otto Burckard, Chinesische Kleinplastik. (Orbis Pictus, Weltkunst-bücherei. Band 12.)
Abb. 6a. 6b Pferdekopf, Ton Han Zeit. 7. Pferdekopf, Ton Han Zeit. 8a. Pferdekopf, grauer Ton Han Zeit.
- (45) 宮内省譯『ルンキー騎兵學校教官、ストロツター騎兵學校科長ノリス氏の馬術』五五頁。
- (46) Franz v. Schwarz, Turkestan, die Wiege der indogermanischen Völker. S. 70.
- (47) 白鳥博士「大宛國考」(『東洋學報』第六卷第一號、五四頁—五五頁)
- (48) 「大宛國考」五六頁。
- (49) これは HERN 氏が Kulturpflanzen und Haustiere に論じた主要な點であるから、これらのことの精細を知らうといふ篤志の士はその名著に就いて知悉せられたる。Media のこと Clement HUART, Ancient Persia and Iranian Civilization. (1927) p. 8 に簡単な説明がある。Turan のこと Wilhelm WUNDT, Elements of Folkpsychology. (trans. by E. Leroy SCHAU. 1921) p. 293 に觸れらる。兩者共に至極簡単な記述であるが参照に値する。
- (50) 「大宛國考」五頁—六頁。

(51) Ch. E. de URVILLE de Mezô-kövesd, Voyage en Asie centrale. Tome I, (Expédition scientifique française en Russie, en Sibérie et dans le Turkestan) Le Kohistan, Le Ferghanah, et Kouldja. pp. 50—51.

附記 (壹) 圖版第五ノ15は Artibus Asiae. MCMXXVII, No. II 所載 Jean LARRAUE, Au Tombeau de Houo Kiu-Ping. (pp. 85—93) の Fig. 3, Le Cheval Couché 27m. を複製したものであるが、同誌上にこの好資料を得るに至つたのは石田東洋文庫主任の懇導の賜物である。敢て記して感謝の意を表す。

(貳) 支那産馬に就いては、農學博士吉田新七郎著『支那ニ於ケル家畜ノ研究』第一篇「支那産馬族ノ研究」(參謀本部大正十五年九月調製)なる精緻な研究があり、その動物學的な記述は傾聴に値するもの多く、余の深く敬意を表するところであり、第七章「支那ニ於ケル馬史」(一二四—一九三頁)また極めて有益であるが、上代に關する記録を無批判に凡て史的事實として取扱はれてゐる點に對しては遺憾ながら贊同するを得ない。

(參) 此の拙稿が印刷に附されし頃ある際、白鳥博士が「東亞の光」第壹卷第四號誌上に「大宛國の汗血馬」なる題で汗血馬を論ぜられたことあるを知り、忙手閱讀したが、その中に「汗血馬と稱するは此馬が實際血液を發汗するが故なり(中略)又 Heinrich Moser 氏の目撃せる所に據れば Turkman 種の馬匹の中には往々血液を發汗するものあり。その故は馬の皮膚に長さ半ミリの程の細脈管存することに何牙利國産の馬にも此類の馬あること善く人の知る所なりと。」(三九頁)と云はれてゐるがそれは参考に値する所大である。

(昭和五年一月末日稿)

浦島の説話とその類例について

昭和六年二月「史苑」第五卷第五號

- 一 萬葉集の浦島説話とその問題
- 二 ハートランド氏の擧示したその類例
- 三 支那に存する類例——王質爛柯、劉阮天臺説話など
- 四 浦島説話と支那の類同説話との關係
- 五 説話解釋私考

一 萬葉集の浦島説話とその問題

かの『萬葉集』の卷第九の中に「詠水江浦島子」といふ一首があるのは人口に膾炙した事であり、且つそれが有名な浦島傳説の原形であることもよく人に知られた事である。併しその説話を如何に解釋すべきものであるかといふことに就いては、未だ適當な考察のあるのを聞かないから、茲に試に鄙見を述べて大方の叱正を乞はうと思ふのである。そこで念の爲めにその原文を擧げると次の如くである。

春日之霞時雨、墨吉之岸爾出居而、釣船之得乎良布見者、古之事會所念、水江之浦島兒之、堅

浦島の説話とその類例について

魚釣、鯛釣、及七日、家爾毛不來而、海界乎、過而榜行爾、海若、神之女爾、選爾、伊許藝遂、相誂良比、言成之賀婆、加吉結、常代爾至、海若、神之宮乃、内隔之、細有殿爾、携、二人入居而、老目不爲、死不爲而、永世爾、有家留物乎、世間之、愚人之、吾妹兒爾、告而語久、須臾者、家歸而、父母爾、事毛告良比、如明日吾者來爾登、言家禮婆、妹之答久、常世邊爾、復變來而、如今、將相跡奈良婆、此篋、開勿勤常、曾己良久爾、堅目師事乎、墨吉爾、還來而、家見跡、宅毛見金手、里見跡、里毛見金手、惟常、所許爾念久、從家出而、三歲之間爾、墻毛無、家滅目八跡、此篋乎、開而見手齒、如本來、家者將有登、玉篋、小披爾、白雲之、自箱出而、常世邊、棚引去者、立走、叫袖振、反側、足受利四管、頓、情消失奴、若有之、皮毛皺奴、黑有之、髮毛白斑奴、由奈由奈波、氣左倍絕而、後遂、壽死邪流、水江之、浦島子之、家地見

今試に此の説話を構成してある要素を考へてみると、(一)「海若神之宮乃、内隔之細有殿爾(海若神之女と)二人入居而、老目不爲、死不爲」といふ不老不死の世界、即ち仙境訪問の話と、(二)「墨吉爾還來而、家見跡、宅毛見金手、里見跡、里毛見金手、惟常、所許爾念久、從家出而三歲之間爾墻毛無、家滅目八跡」といふに至る仙境に於ける短時日が現實界にあつてはその有様を全然變化させる程の長い年月であつたといふ話、及び(三)「此篋開勿勤常」と約して歸つた者が「玉篋、小披爾白雲之自箱出而常世邊、棚引去者、……若有之、皮毛皺奴、黒有之髮毛白斑奴、由奈由奈波、氣左倍絶而、後遂、壽死邪流」といふ taboo の破棄によつて不幸を招來した、といふ三つの要素を中心として成り立つてゐるものと見て、強ち不當とすべきところは無いであらう。併し第一

に擧げた仙境訪問の話と第二の仙境に於ける時間の経過と現實界に於けるそれとの著るしい相違とは、こゝでは不可分の關係にあると信ずるから、この小篇に於いてはこの時間の問題と taboo の問題とを考察の對象とし度と思ふ。

二 ハートランド氏の擧示したその類例

先づ第一の説話に就いて思ひ當るのは、かの Edwin Sidney HARTLAND, *The Science of Fairy Tales. An Inquiry into Fairy Mythology.* (1891) の中に、第七章から第九章に涉り殆ど百頁を割いて精細に事例を擧げてある supernatural lapse of time の説話である。これはその類例が質に於いても量に於いても極めて豊富で、啓發されるところが、尠くないが、限られた此の紙上にその一々を述べる必要はないから、詳細を知らうとせられる好學の士には原著を閲讀せられん事を乞うてこゝにはその二三を摘記するに止める。

South Wales の Brocknoek-shire の説話に、昔或る男が家畜の番をしながら山に登つてその所在を失つた。家人は三週間に渡つて探しに搜して終に分らないので、その妻は死んだものと信じてゐたところ、或る日突然歸つて來た。彼の妻は何處にその三週日を過したのであるかを尋ねると、その男は「お前方は三時間のことを三週間といふのか」と云ひ、その語るところに據るとその間 Ilorfa で笛を吹いて遊んでゐると人形のやうな者が遠

方から圍んで来て、段々その輪を小さくして、恍惚となるばかりに彼等は歌ひ且つ舞つた。そして彼等はお菓子
のやうな物をくれて、その仲間に入れたが生涯にこれ程楽しい事は無かつたといふ。

また Pomerania の Eidena の地には僧院や社閣の遺跡が多く、其の下には世の常ならぬ部屋があると傳へら
れてゐるが、往昔二人の Capuchin 僧が羅馬からこの地を訪ひ少年従者と入口を見出して中に遁入つた。幾部屋
か過ぎて或る部屋に到ると、そこには澤山の人が座つて仕事をしてゐる。暫時二人の僧とその人達との間に不可
解な會話が取交はされて後従者はその僧と共に地上に出て来たが、それで三年の長い間留守にしたことがわかつ
た、といふ傳説もある。

なほ Bohemia の Blauk と名づける山下に大殿堂が存し、そこに Bohemia の聖帝 Wenzel が選ばれた騎
士團と共にその國土に大事が起つて彼等を必要とするまで眠つてゐるといふ傳説があり、或る時其の近所の鍛冶
屋が自家の牧場の草刈りをしてゐると、一人の見知らぬ男が来てくれと頼むので後に隨つて行くと、やが
て眠れる騎士團のゐる山下の殿堂に伴ひ來つた。驚いて見上げれば皆等しく威容堂々と武裝して馬上で首を馬首
の上に垂れて熟睡してゐる。然るに案内して來た男は何所からとも知れず裝蹄具を齎し來つて馬の蹄鐵を替へて
くれといふので、一頭づつ舊の蹄鐵を取り去つて新しい蹄鐵を打ち最後の馬を終つた時、ふと過つて騎士の脚
に觸れると、その騎士は飛び起きて「時が來たのか」と呼ぶので「否々まだである」といふと再び眠りに入つて
靜寂に歸つた。そこで古蹄鐵をもらつて家に歸つて見ると既に一年以上の時日家を空けてゐたことがわかり、そ

の鐵は皆金に變つてゐたといふ話もある。

かゝ事例は唯單に世の常ならぬ處に行つて、僅かの時日と思はれたものが非常に長い年月を過してゐたといふ
のであるが、かゝる説話の内にはその異常の場所で眠るといふ説話要素を有するものも尠くない。

かの Pithy の記録には、クリートの詩人 Epimenides が幼年の頃或る不可思議な洞窟に入つて一睡して、ほ
んの三四時間と思つて起きて見ると周囲の變化に驚かされ、その間實に四十七年間經過してゐたといふ傳説を傳
へてゐる、葡萄牙の説話では、或る貴族の子弟が、その國人がムール人の難を避けて移り住み今もその子孫がゐる
と傳へられる島を捜しに出て、その島に達し、非常な持成を受けて後一睡し目が覺めた時送られて Lisbon に歸
つて來ると知る人としては誰一人無く、彼の祖先以來の屋敷には他人が住んでゐたといふものがある。

然も是の如き説話は世の常ならぬ世界から現實界に歸つて來ると共に、或は急に年老い或は他界することとな
つてゐるものも尠くない。かの Washington Irving がその名著 Sketch Book に述べた Rip Van Winkle の
説話の如きもその類例であるが、丁抹の或る傳説では、昔或る人がさる乙女と結婚してその祝宴の當夜客人の歌
舞酣な時、その花嫁がふと部屋を出ると仙女達が宴樂してゐる山の方へ歩き出してしまつた。そして赤い柱のあ
る小山に近づくと、一群の中の一人が酒盃を指したからそれを飲むと舞に加はらせられ、その舞踊が終つて急い
で家に歸つた。見れば家も圓も變り果て、ありし宴席の賑々しさは靜寂に歸してゐ、驚いて問へど知る人は無く
漸く老姐が「あゝ貴女でしたか、百年前私の親父の兄弟の結婚祝の夜姿を消したといふのは」と云つたので、そ

の言葉を聞いてその婦人は倒れて死んだといふがある。⁽⁷⁾

また Ireland に傳へられてゐるものに Oisín といふ人が元氣な若者であつた時、或る日樹下に憩つて眠つてしまつた。ふと目を醒すと世の常とは思へぬ美人が彼を凝視してゐ、彼女こそ不老の國の女王であつたが、彼女は Oisín を戀しその國に伴ひ歸つた。その後日は過ぎて或る日 Oisín がかねて禁制された平石の上に立つて見ると、家郷がすつかり見えたので、歸心矢の如く、女王に歸郷を乞ふと女王は、彼が家を離れて未だ二十一日しか過ぎてゐないと思つてゐる間に六十三年が過ぎてゐる事を語つた。そこで兎も角僅か一日で歸來することを約して暇を得、途中で決して下馬するなと云はれて貸與された駒に乗ると程なく家の近くに達した。然るに、そこで鞍物袋を背に積んだ馬に會ひ、その一袋が落ちたのを載せてくれとの馬子の乞を許して下馬すれば、馬は消へ Oisín は盲目の弱々しい情ない老翁と化した⁽⁸⁾、といふ要素の複雑な發達した形の傳説がある。

想ふにかゝる事例は一、唯單に世の常ならぬ處を訪れたといふ事。二、其處では僅かの時間が人間界の長年月に當る事、此の中に睡眠といふ事の附加されたものもあるのも注意せられる(附記壹)。三、歸來して一の *catastrophe* に落ちる事、この場合に往々何等かの *taboo* を破るといふ事が原因となる、以上三つの説話要素の或る場合には一つ或は二つ三つによつて説話が構成されてゐる事を示してゐる。而してかゝる説話の意味を解釋したその各要素の關係、その發展の經過などを考察することは最も必要な事であるが、今は主として我が國の説話と支那の説話との關係を明かにしようとして、その類例として以上の説話を引用したのであるから、次に先づ支

那に存するその事例を一瞥してみよう。

三 支那に存する類例——王質爛柯、劉阮天臺說話など

支那に存する此の種の説話の中に就いて、最も著明なのは『述異記』上卷にある王質爛柯の話で、それは次の通りである。

信安郡石室山、晉時王質伐木、至見童子數人碁而歌、質因聽之、童子以一物與質、如棗核、質含之不覺饑、俄頃童子謂曰何不去、質起視斧柯盡爛、既歸無復時人、

この文面には別に世の常ならぬ場所とは記されてゐないが、それは全體の意味から容易に推量せられるし、その童子の碁して歌ふのを聽いてゐるだけの間に斧柯は盡く爛して、歸つて見れば「無復時人」といふのであるから非常な年月の経過してゐた事がわからう。これは前に述べたやうな説話の要素は備はつてはゐるが、その記述は極めて簡單である。然るにその説話がやゝ詳細であるのは『蒙求』卷中にある劉阮天臺の話である。

續齊諧記漢明帝時永平中、剡縣有劉晨阮肇、入天臺山採藥、迷失道路糧食乏盡、望山頭有一桃桃、共取桃食之如覺少健、下山得澗水、飲之並各澡洗、又見蔓菁菜葉從山復出、次又有一杯流出、中有胡麻飯屑、二人相謂曰去人不遠、因各入水水深四尺許行一里、又度一山出大溪、見二女子顏容絕妙、便喚劉阮姓名如有交舊、

歡悅問曰劉郎等來何晚、因邀過家廳館、服飾精華、東西各有床、帳帷幔七寶瓔珞、非世所有、左右侍直青衣端正都無男兒、須臾下胡麻飯山羊脯食之甚美、又設甘酒、有數千客、投三五桃子至女家云、來慶女壻、各出樂器歌調作樂、既向暮仙女各還去、劉阮就所邀女宿言語致美、又行夫婦之道、住十五日求還、女曰今來至皆是宿福所招、得與仙女交接流俗何可樂、遂住半年、天氣和適常如二月中、百鳥哀鳴、能不悲思求去甚切、女曰罪根未滅使君等如此、更喚諸仙女共作絃歌共送劉阮、云從此山東洞口去不遠、至大道、隨其言果得還家鄉、無相識、鄉里怪異乃驗七世子孫、傳聞上世翁入山不出、不知所在、今乃是既無親屬、栖宿欲還女家、尋山路不獲、至太康八年失二人所在、

がそれであるが、この記述に神仙思想の片影の認められることは今更いふまでもないから省略に従ふとして、劉阮が天臺に入ったのは後漢の明帝の永平年間、「至太康八年失二人所在」は家郷に還つてから餘り日子を経てゐないことと思はれるから、顔容絶妙な二女の世界にあつて「留十五日——遂住半年」の間は常人の世界の二百年に相當してゐて、正に仙界訪問と非常に年月の経過した話である。

また『博異志』には唐の神龍元年、房州竹山縣陰隱客莊後に井を穿ち二年にして一千餘尺に達してもなほ水が無かつた所、その工夫が井底の一石穴から仙境に出してしまつた話があるが、その仙境の有様を詳述した後に「汝來此雖頃刻已人間數十年」とあり、貞元七年に歸郷したとあるから八十六年の年月が経過してゐ、程なく所在が分らなくなつたとある。

かく「失二人所在」とか「莫知所在」とかあるのは、これを以つて catastrophe としたものと思像されるが、その意味は明確でないし、これらは taboo を破つて catastrophe に落ちたとする説話ではない。支那説話中でその要素を有するものはかの『搜神後記』にある袁相根碩の話である。

會稽剡縣民袁相根碩二人、獵經深山重嶺甚多、見一羣山羊六七頭、逐之經一石橋甚狹而峻、羊去根等亦隨渡……有山穴如門、豁然而過既入內甚平敞草木皆香、有一小屋、二女子在其中、年皆十五六容色甚美、著青衣一名瑩珠一名□□、見二人至忻然云早望汝來遂爲室家……二人思歸潛去、歸路二女追還、已知乃謂曰自可去乃以一腕囊與根等、語曰慎勿開也、於是乃歸、後出行家人開視其囊、囊如蓮花一重去一重復至、五蓋中有小青鳥飛去、根還知此、悵然而已、後根至於田中耕家、依常餉之見在田中不動、就視但有殼如蟬蛻也、

これには非常な年月を経過してゐたとする説話要素を缺いて、たゞ taboo を破つて catastrophe に落ちた事のみが存する。

四 浦島説話と支那の類同説話との關係

かくて今日私共の知り得る限りに於いては、支那説話の内に世の常ならぬ仙境を訪れて、それが非常な年月を経過してゐたといふ説話の要素と taboo を破つたものとの結び合はされてゐる、この種の説話の完備した形は見

出し得ないのであるが、その理由は如何に考ふべきであらうか。支那に於いては左様に發達しなかつたものとなれば極めて簡單であるが、古來支那にあつてはこの種のもの發達は可成りに著るしいものがあるやうに推考せられるから、さやうに斷じ去る事はやゝ無理ではないかと思ふ。然らば、さやうな兩要素の結合した形のもものがあつたに相違ないが、それが何等かの理由で記録に漏れたか、或はその文書が今日にまで傳はらなかつたのであらうと考へられ、私は恐らくは後者の場合で兩要素の結合した説話が存し、また記録せられてゐたであらうが、その文獻が今日に遺存せぬのであらうと想像するのである。

さて、次に考ふべき重大な問題は、この種の支那説話と萬葉の浦島の説話との關係であつて、大勢から見て支那文物の影響を受ける事の豊かな我國のことであるから、世の常ならぬ世界を訪れて短時日と思つたものが、非常の長年月であつたといふものと、歸來 *taboo* を破つたことによつて *catastrophe* に落ちたといふものとの兩要素の完備した支那説話の影響によつて、兩要素を具備する浦島の説話が生じ、山嶽と海岸との相違は兩國民の地理的環境の相違に由來するものとの説も立て得、現に先人の中にその説を主張してゐる者もあるのである。或はまた最近一部の人々によつて唱導されてゐるやうな更に廣く *Diffusion Theory* の如き見地よりこれを觀察するならば前に述べ來つたやうなその種の説話全部が或る根源的なものからの傳承であつて、支那のものとは云はず、日本のものと云はず凡てが同類の系統に屬するものと斷ずる説も爲し得る。⁽⁹⁾

私は今茲にそのやうな説を否定せんとする者ではないが、かゝる一種の成心を以つて事例の各々に對し、餘り

にも大膽なる斷案を下す前に、今少しく精細に各々の民族につき個々の説話の内容を考究して見ることが説話を種々の側面から考究し、進んでその結果を體系づける爲めには必要にして缺くべからざる研究方法と確信して疑はないのである。然かすることによつて本來個有した説話の要素と、外的影響によつて附加され進展された跡とを尋ね得るならば、それこそ今日の學界に聊か裨益し得るであらうと信ずると共に、それはまた私の欲し求めて止まぬところなのである。

そこで萬葉の浦島の説話を檢すると正に上に述べ來つた二つの説話要素を具備する上に、その中にはこれを一瞥して直ちに分明するやうに「海若」とか「老目不爲、死不爲」とか、支那の成語をそのまま用ゐてゐて、こゝに支那思想の影響の存することは明瞭である。併し、我國には全然かやうな説話が無く、凡てが支那思想の影響によつて成り立つたものであらうか。此の點は決して簡單に斷定し難いのであつて、我國には現に民間説話に由來すると思はれる『古事記』の日子穗穗手見命（火遠理命）の説話が存するのである。それは今更こゝに原文を引用して説明するまでもなく、よく人に知られてゐるものであるが、火照命と火遠理命との兄弟が海佐知毗古、山佐知毗古として佐知を易へた時、火遠理命は魚釣してその鉤を失ひ、火遠理命がその鉤を探し求めるために綿津見神之宮に至り、豊玉毗賣と婚せられたといふ筋の話であつて、この記述には無論多少の潤色は存するとしても概して素樸の趣を存してゐると考へられるので、この説話をも外國影響とせねばならぬ理由は存せぬのである。それ故私はこれを悠遠の古から我が民族が固有した説話に由來するものであると信ずるのである。然るに、この

説話には年月が非常に経過したといふ話が出てゐないが、これを他の諸民族の事例に照合して推考し、且つ浦島の説話そのものと對比して見ると、此の火遠理命の説話にもその原型にはその年月の事もあつたに相違ないやうに思はれるのである。

この場合臺灣の蕃族の間に傳へられてゐる説話を参考すると、その『蕃族調査報告』の内、阿眉蕃南勢社頭目の語つたものに次のやうなのがある。

昔マチエチエと云ふ者ありき。一日河に出で、漁せしに、足踏みはづして河に落ち、激流に押されて海に出でたり。大聲救を求むれども更に應ふる聲なく、唯怒濤の岸を嘯む音のみ。マチエチエは運命を天に任せて波のまにまに漂ひ行く、夕方になりて水天鬐鬣の際微に島らしきもの見ゆ、疲れたる手足に力を籠めて泳げども更に進むとも見えず、氣をとり直して思ふ様、急ぐは唯疲を増すのみ波に従ふより外なしと型の如く仰向となりて天を見詰めたるのみ。

暫くして人間の音す、驚きて頭を擧げて見れば、數多の人々岸に群りてさゝやけり。マチエチエは心に思ふ様假令人食ふ島なりとも、魚の餌となるより増しならんと、手足を動かして岸に着けば男は一人も居らず、皆婦人のみなり。マチエチエの傍に走り寄り「あな珍らしの男かな誰れの夫とや定めん」とて互に手を引き足を引き美しき宮殿にと伴ひ行きぬ。山海の珍珠を山の如く積みて下へも置かぬ慶應す。此島はパライサンといふ女人島なり。マチエチエ一時は喜びしが故郷戀しき思ひに耐へず、或日竊に海岸に出で、故郷の空を

打ち眺め、嗚呼我が妻は如何に嗚呼我が母は如何と案じ、怨めしや此海、此海なかりせば千萬里の端なりとも再び母に遇ひ妻にも遇へるものを、と暫し海を見詰め居る。折りしも一匹の鯨浮び出で「汝の怨は尤もなり、我が背に乗れよ故郷に伴はん」と。マチエチエは大に喜び神を拜して鯨の背に乗れば、大鯨紫瀾を蹴つて一走千里忽にして故郷の岸に着きぬ。數年の別れに故郷は全く變りて見るもの聞くもの皆新たなり。己が家に至りて見れば、一人として知るものなく、又親戚を尋ぬるも亦一人として知れるものなし。語を盡して昔を語りしに、漸くマチエチエの名を記憶に呼び起せしものあり。彼云ふ様「我々の祖父の時にマチエチエと云ふ者ありて一日河に出でしまゝにて歸り來らず」と。而してマチエチエの家は此家なりと指示しぬ。鯨はマチエチエと別るゝ時云ふ様「豚五頭酒五瓶檳榔五房を以て五日後に海岸に來りて我を祭れよ」と、マチエチエは約の如く五日後に海岸に出でて鯨を祭る。鯨は其時蕃人に造船の技術を教へたりと云ふ。

これを一讀すると、その文勢は蕃人の説話そのまゝを記述したのでなく、餘程記者の表現加筆がある事が察せられるが、然もこれを阿眉蕃奇密社の同類説話と對比するとは、その原型も推察し得るやう思はれると同時に、『萬葉集』の浦島説話にも年月の事が存する以上、私は火遠理命の説話にも本來はその要素を有したものに相違ないと思ふのである。然らば『古事記』には何故その要素が失はれたかが問題になるが、『古事記』の火遠理命の説話を委細に考慮すると、その終りの方は鶴草葺不合命の出生を説明する説話でこれは本來は別のものであつたのであるまいか。その本來別のものである要素が火遠理命の説話に結合した際に、この説話が固有した年月経

過の分子が省略されて脱落してしまつたものではあるまいか。

たゞ浦島傳説の taboo の破棄によつて catastrophe に落ちるといふ説話の要素に至つては、この taboo のものは古來存した原始宗教思想に由來するものであらうが、今支那の袁相根碩の説話に見る如くに説話要素として取入れられてゐるものは、民俗的な説話分子よりはやゝ知識的分子の加味されたものやう思はれるし、これは我が附近の民族の説話中にその例を求めることが困難であるのみならず、我國の古文獻上にその類例もしくは痕跡を認めることも不可能のやうに思はれるから、これこそ支那からの影響によるものと認むべきではあるまいか。即ち古來我が民族の間に存した火遠理命のやうな説話があつて、その原型には長い年月の経過したといふ要素が附加されてゐたものがあつたが、我が民族が漸く盛に支那文化と接觸しそれから受ける影響の大なるにつれ支那説話の内に劉阮天臺のやうな長い年月が経過したといふ説話と、袁相根碩の説話のやうに taboo の要素のある説話との結びついた説話の完備した形ものがあつて、それと觸れるに及んで恰もよし、我が民族の間に存した年月の経過といふ事に一致點があつたから、更に今一步進んで支那の taboo の分子を取入れ、それが「此箇開勿勤」といふ形となつて浦島説話の原型が結成したものではあるまいかと思ふのである。

五 説話解釋私考

終りに臨んで以上考察を試み來つた説話の中に就いて、所謂 supernatural lapse of time の説話と、かの taboo 説話とは、何に基づき、何に由來するものであるかは是非共考究を要する事であるが、私の遅々たる研究の歩みは、今なほ到底それに對し確信ある私案を爲し得ないのである。併し試みに臆説をなすならば（他の説話は概ね世の常ならぬ所は地上或は洋上の地であるが、浦島は「海若神之宮」換言すれば海底の宮に行つたので、これは海洋民族たる我が民族の遠い古に既に幼稚ながら左様の世界が考へられてゐたものではあるまいか）此種の説話は、海洋に於ける漂流とか山嶽に於いて道を迷つたとかいふ事實がその基礎を爲したものではあるまいか。今聊か想像を逞しうするならば、或は洋上に漂流し或は山に入つて道を失ひ、測らず未知の所に到達した際に起つたその地の人の優待から得た好印象が、やがて發達して今述べ來つたやうな説話にまで進化したのではあるまいか。而して人間の經驗界に該説話が意味するやうな時間の世界が存するとは考へられぬことであるから、これは恐らく空想的に考へられたことと思はれる。而して上述したやうな意味で、此の種の説話がその由來を漂流とか道を失つたとかいふ實際經驗の事實に繋いでゐるとするならば、年月の異常な経過といふ事も、全く思ひも及ばなかつた未知の世界に達して、或は至らざるなき款待を受け、或は婦女の持成しを得、極めて刺戟多い環境に處しい時日を送つたとすると、心理的に注意の中心が専ら刺戟に向けられてゐるから、その時間は實際よりも更に短かく考へられたらうといふ事は強ち無理な推察ではあるまい。然れども一度望郷の情湧然として起り、近親知己を思慕するの念止み難く、然も機會を得て歸郷し得たとするならば、人間の常として自己の變化よりも寧ろ

風物の變化、他人の年老いた事が切實に感ぜられるものであるから、茲に初めて事實よりも寧ろ過大に年月の経過を痛感するのであつて、このやうな心理的事實がかかる説話の起源に密接な關係を持つてゐ、一度それが説話の形を取つて語り傳へられると、説話當然の變異と發達とから層一層空想的分子を増して終に今見るやうな形にまでなつたのではあるまいか。仙人の長壽或は不老不死といふ事から、この現實界との驚くべき年月の相違といふ思想が轉化し來つたものかとも一應考慮せられるが、かゝる説話が支那のみに存するものならば左様な解釋も成り立つけれども、世界の諸民族の間に遍く存するのであるからさうは斷定し難い。

次に *Tadoo* の分子は如何なる意味を有するものであらう。これについては私は推量に過ぐるの弊があるけれども、この種の説話を精細に觀察すると、單純な民間説話とのみは考へられぬので餘程知識の進んだ後のものではないかと思ふ。何となれば、私はこれを世の常ならぬ世界で人間界に於ける長年月を過ごしたものが歸り來つて舊知既に亡く、或は現存の人々は二三世後の人であるとするならば、如何に説話上の存在とは云へ其の者がそのまま生命を保つといふ事は許されない事となり、そこに未開民族の間に廣く行はれてゐる *tadoo* といふ原始的宗教思想の一面が説話の分子として取入れられ、*Tadoo* を破ることによつて *catastrophe* に落ちるといふ事となつて、説話の發達が極まつたものではないかと考へるのである。

以上考察を試み來つたところは問題の性質上資料に乏しく説話進展の跡を一々明瞭に知る事が出來ず、爲めに往々かなりの獨斷を試み、且つ最後に述べた説話の解釋に至つては更にその甚だしきを自責する。元來この問題

は自信ある解決に達しなかつた爲めに深く篋底に藏して時機の到來を待つてゐたものであるが、それよりは寧ろ未熟なる私考を開陳し、識者の叱正を得て一日も速かに穩妥な解釋の方向に進みたいと思ひ、當「史苑」の委員に乞はるゝまゝに筆を取つたものである。故に切に大方の示教を得て卑考に修正を加へ穩妥な解釋に達する日を望んで筆を擱く。

- (1) E. S. HARTLAND, *The Science of Fairy Tales*, pp. 161—214.
 - (2) *op. cit.* pp. 166—167.
 - (3) *op. cit.* p. 170.
 - (4) *op. cit.* pp. 170—171.
 - (5) *op. cit.* pp. 183—184.
 - (6) *op. cit.* p. 181.
 - (7) *op. cit.* p. 185.
 - (8) *op. cit.* pp. 196—197.
 - (9) 中田千畝氏が『浦島と羽衣』の内に述べて居られる意見の如きがその一つである。(殊に前篇第七「民族の移動と説話の移動」の如き)
 - (10) 『蕃族調査報告書』阿眉蕃南勢社、第十三章口碑及童話、女護島パラيسانの話、話者歸化社頭目(八八—八九頁)
 - (11) 同上、阿眉蕃奇密社、第十三章口碑童話(七五—七六頁)
- 附記(壹) 註(5)(6)の例の如く、この説話の要素として往々「睡眠」といふことの存するのは、此の種の説話の由來

の一つが熟睡中ほんの僅かの時間と思はれたものが、相當多くの時間を経過してゐたといふ經驗的事實にあるのではないかと考へられ、嘗て私はこの解釋を採るべきものと考へたこともあつたが、今は聊か無理のやうに思ふので試みに附記するに止める。

(貳) J. A. MacCulloch 氏はその著 The Religion of Ancient Celts, pp. 385—386 の中で、この種の説話は Island of Woman 訪問の事實に由来し、その最後は歸來 erotic madness に陥つた事であると言つて居られるが、聊か詮索に過ぎた説と信じ、私は到底それに賛意を表し得ない。

(參) 『萬葉集』の浦島傳説に對しては鈴木拾五郎君が「早稻田文學」二五三號に精細な研究を發表して居られるから参照せられた。

(昭和六年一月二十日稿)

鳳凰の由來について

昭和六年三月「東洋學報」第拾九卷第壹號

- 一 古記録に現はれた鳳凰の性質
- 二 鳳凰の由來に關する從來の諸説の批判
- 三 その形態及びその由來に對する鄙見

一 古記録に現はれた鳳凰の性質

上代支那の説話の解明を試みようとする私にとつては、所謂四靈、即ち龍、龜、麟、鳳なるものは重要な意義ある、併しながら極めて至難な問題であつた。そして、徐ろに微力をその考察に致してゐる内、おぼろげながら鄙見が纏つて來たのでその都度「龍の由來について」⁽¹⁾をものし、ついで「麒麟について」⁽²⁾の考察を陳じた私は茲に試みに鳳凰に對しても未熟ながら所信を述べて見ようと思ふ。而して、此の小篇の企圖するところは主として鳳凰の由來が如何なるものであるかを明かにしようとするのであつて、前の二篇の姉妹篇を爲すのである。なほ、いふまでもない事ながら鄙見の隨所に見出される考察の不備は、今後研究を進め得る度毎に補正すること

を期すると共に、特に大方の示教を得て完璧を期したく思ふのである。

先づ最初に支那上代の諸記録に鳳凰が如何なるものとせられてゐるかを考へてみると、それは概ね祥瑞の一つとして取扱はれてゐ、それが鳳凰の最も著るしい性質とせられてゐる。

併し、『詩經』の大雅、生民篇に

鳳皇于飛、翾翾其羽、亦集爰止、藹藹王多吉士、維君子使、媚于天子、

鳳皇于飛、翾翾其羽、亦傳于天、藹藹王多吉人、維君子命、媚于庶人、

鳳皇鳴矣、于彼高岡、梧桐生矣、于彼朝陽、萋萋萋萋、雝雝喈喈、

とある如き、或は『書經』の益稷にある「蕭韶九成、鳳皇來儀」の如き、更に『左傳』莊公二十二年の條に「春陳人殺其大子御寇、陳公子完與顛孫奔齊」とある後に「初懿氏卜妻敬仲、其妻占之曰吉、是謂鳳皇于飛、和鳴鏘鏘、有媯之後將育于姜五世、其昌竝于正卿」とある如き鳳凰は明瞭に祥瑞とは云ひがたいのであつて、たゞ普通ならぬ立派な鳥といふ程の意味に過ぎない。故にこれらは鳳凰が單に普通にならぬ立派な鳥、珍しく美しい鳥とせられて明確なる祥瑞に至る前の階程を示すものと考ふべきであらう。然るに、戰國の末から漢代に至るにつれ祥瑞の思想は漸く結成するに至つたので、漢代の記録になると、鳳凰は明瞭に祥瑞とせられてゐる。即ち『淮南子』の覽冥訓には「昔者黃帝治天下而力牧太山稽輔之……鳳皇翔於庭、麒麟游於郊」とか、「鳳皇之翔至德也、雷霆不

作、風雨不興、云々」とかとあるし、『史記』の五帝本紀に「四海之内咸戴帝舜之功、于是禹乃與九招之樂、致異物、鳳皇來翔、天下明德皆自虞帝始」と言つてあり、『新序』の雜事篇には「堯舜之誠、感於萬國、動於天地、(中略)鳳麟翔舞下、及微物咸得其所」とある。また『新語』の明誠には「周公躬行禮義、郊祀后稷、……臻麟鳳、草木綠化而應」ともある。而してその性質上、緯書にはかゝる記述が極めて豊富であつて、例へば、『尚書中候』には「黃帝時天氣休通五行期化、鳳凰巢阿閣護於樹」、「周公歸政于成王、太平制禮鸞鳳見」と言つてあり、『春秋緯』などにも、「黃帝坐于扈閣、鳳皇銜書致帝前、其中得五始之文焉」とある。やゝ時代の降つた『述異記』卷上の中にも「堯爲仁君、一日十瑞宮中芻化爲禾、鳳凰止於庭」などといふ句が見出される。

なほ正史の本紀の中にも此の種の記事の豊かに存するのはいふまでもないことであるが、茲には煩瑣に陥るのを避けて、『漢書』の中の二三の事例を舉示して置くに止める。即ち、『漢書』の昭帝本紀始元三年の條に「冬十月鳳皇集東海、遣使者祠其處」、宣帝本紀本始元年の條に「夏五月鳳皇集膠東千乘赦天下、賜吏二千石」、四年五月の條に「鳳皇集北海」、地節二年の條に「夏四月鳳皇集魯郡……大赦天下」、元康元年の條に「三月詔曰迺者鳳皇集泰山、陳留甘露降(下略)」、その他神爵二年正月の條、四年春二月及び冬十一月の條、五鳳三年三月辛丑の條、甘露三年春二月の條等にも祥瑞の記述として鳳凰のことが現はれてゐる。更に後世の記録に至つては殆ど枚擧に遑がないばかりであるが、念の爲め『後漢書』その他に於ける顯著な事例の所在を挙げれば、『後漢書』光武本紀建武十七年冬十月、章帝本紀元和二年、安帝本紀延光三年春二月、同冬十月、桓帝本紀建和元年十一月、靈

帝本紀光四年秋七月⁽¹¹⁾などがあり、『三國志』の隨處に、また『晉書』⁽¹²⁾以下にも相當豊富にその記事を見出だすのであつて、一々こゝに記載するの煩に堪へぬばかりである。かゝる例證によつて鳳凰なるものが古から瑞鳥とされ、祥瑞とされてゐたといふ事は明瞭であつて疑ふ餘地はないであらう。

かくて祥瑞は概ね仁君の聖政に當つて現はれるものであるから、その聯想から鳳凰は仁鳥とせられた場合もあつたやうに思はれ、轉じて仁君は生成を愛で、殺伐を惡むことを本質とせられてゐるところから、此の鳥にもその屬性が附加されるに至つたやうである。その思想的展開の過程は次の如き記録によつて推考し得るのである。即ち、『易林』にある「鳳凰在左、麒麟處右、仁聖相遇」とあることから鳳凰が仁鳥とせられることであつたことが推知せられ、『汲冢周書王會解』の「鳳鳥者載仁抱義披信」とあるのからも思ひ當たるところがあるので、仁性を有する鳥とせられた事もあるといふ事がほゞ推定せられる。且つ、『荀子』哀公篇に「其政好生而惡殺焉、是以鳳在列樹」とあるのは、『尙書大傳』にある「舜好生惡殺、鳳皇巢其樹」と同様な思想であり、『淮南子』の本經訓や『孔子家語』などには「覆巢毀卵鳳皇不翔」とあつてやはり殺伐を惡む思想が表はされてゐる。然るに『帝王世紀』に見えるとして傳へられてゐるところは「有大鳥……其狀如鶴備五色」とある、恐らく鳳を意味するものと推定される鳥について「不食生蟲、不履生草」といふ屬性が擧げてある。いふ迄もなく、これらの推定は今日に遺存する極めて僅小な断片的な史料より推量するのであるから、思はぬ過誤に陥つてゐる場合もあるであらうが、私は種々の方面、殊に麒麟の場合と併せ考へて以上の考察は許され得ると信するのである。

若し、瑞鳥とせられた鳳が上に述べ來つた如くに漸次發達してその屬性を豊かにして行つたとするならば、やこれと類似した羽族は存するものの、かく豊富にして氣高い性質を附與せられたものは他に對比すべきものがないのであるから、それが羽族の長であるとする思想に發達するのは當然であり、更に鳳凰に關して多く傳へられてゐる「群鳥從之」といふ事は、羽族の長と考へられたところから展開し來つたものに相違ないと思ふ。その事實は次のやうな史料から推考した結果なのである。即ち『大戴禮』の易本命には明かに「有羽之蟲三百六十、而鳳皇爲之長」と記されて居り、『禽經』には「鳥之屬三百六十、鳳爲之長」と言つてあり、やゝ形を異にしては『埤雅』に「鳳神鳥也、俗呼鳥王、夫文几鳥爲鳳、鳳摠衆鳥者也」とある。かく鳥の王者と考へられるに至ると、帝王が百僚を統率するやうにまた衆鳥を從へるとせられるに至るので、『說文』には「群鳥從以萬數」と言はれて居り、『漢書』昭帝本紀「地節二年夏四月、鳳凰集魯郡、群鳥從之」、「神爵二年春二月詔曰：鳳皇：甘露降集京師、群鳥從以萬數」、甘露三年春二月詔の如きは「鳳皇集新蔡、群鳥四面行列、皆鳳皇立以萬數」とある。『後漢書』には靈帝本紀に「光和四年秋七月河南言、鳳皇見新城、群鳥從之」とあるが、この種の事例は『宋書』や『周書』⁽¹³⁾などにも現はれてゐる。

なほ鳳凰に關して種々の記録に散見するところを綜合すると、第一にこれが梧桐竹實と關係づけられてゐること、第二に高く飛昇するものとせられてゐること、第三に種々の鳥獸の形態が附加されてゐることなどが注意されるが、第三の形態に就いての事は後にその條で述べることとして、こゝには上の二點の論證を試みようと思ふ。

前に掲げた『詩經』の生民篇の句に「鳳凰鳴矣、于彼高岡、梧桐生矣、于彼朝陽」とあつて、古から既に鳳凰が梧桐と關係づけられてゐたことを示してゐ、その箋には「鳳凰之性非梧桐不棲、非竹實不食」とある。『說苑』の辨物篇の内には「於是鳳乃遂集東園、食帝竹實、棲帝梧桐」とあるし、やゝ後世のものではあるが『魏書』の彭城王勰傳に「鳳皇非梧桐不栖、非竹實不食」などとあつて、鳳凰が梧桐竹實と結びつけられた事は明瞭な事實である。なほ『莊子』の秋水篇にある鸞雛は古來「鸞鳳之屬」と注されてゐるから念のためにこゝに擧げると「莊子往見之曰、南方有鳥、其名鸞雛、子知之乎、夫鸞雛發南海而飛北海、非梧桐不止、非練實不食、非醴泉不飲（下略）」とあつて、やはり梧桐竹實（練實）のことが現はれてゐる。このやうな後世の記述は、『詩經』に記されたところを單に傳承したものに過ぎないであらうと考へられるけれども、然もその由來を推知しようとするに至つては中困難なことである。たゞ想像を試みるならば、梧桐の極めて生成の著るしい性質が瑞鳥たる鳳と結びつけられ易いものであり、また普通に出來ない珍しいものである竹實が、稀に現はれるものと考へられたこの鳥に關係づけられたものではあるまいかと考へられる。次に『楚辭』の九辨に「鳳愈飄翔而高舉」とあるのや、『淮南子』の説林訓に「鳳凰高翔千仞之上、故莫之能致」とあることであつて、同様の思想は『戰國策』の中に「宋玉對王問曰、鳳凰上擊九千里云々」とあるが、この高く飛昇するといふ屬性は、飛昇を本性とする羽族の代表的なものであるとせられたところから發達し來つた思想であらう。

更にこゝに西王母と鳳との關係を一瞥して見ると、『拾遺記』卷三に周穆王三十六年に鳳凰之燈を用ゐた事の

あるところに「西王母乘翠鳳之輦而來」とあり、卷十に「山西有照石」とある後に「昭王與西王母常遊居此臺上、常有衆鸞鼓舞」などとある。また『漢武內傳』には「西王母曰仙之上藥、有九色鳳腦、次有蒙山白鳳之脯」とある。これはその性質が極めて複雑に發達した西王母のことであるから、陽鳥である鳳が結びつけられたのであらうと考へて何等の不審もないであらうが、然もなほ、西王母は鳥と關係づけられる性質があるやうに思はれる。といふのは『山海經』の海内北經には、三青鳥が西王母に使役されるものとせられて居り、司馬相如の「大人賦」には「吾乃親西王母、嶠然白首、戴勝而穴處、有三足鳥爲之使」などとあるのがそれである。勿論かやうな事の根柢に、仙人は飛揚するものであるとの觀念から、鳥と結びつける思想の存したことはいふまでもないのである。かやうな事に基づく聯想が鳳の西王母と關係づけられるに至つた理由であらうといふことは強ち意味のない想像ではないであらう。

二 鳳凰の由來に關する從來の諸説の批判

上に聊か考察を試み來つた所に據つて、鳳凰が瑞鳥とせられ、ついでまた仁鳥と考へられたところから、生を好み殺を惡むといふやうな性質が附加せられ、その特殊な鳥は終に羽族の長として衆鳥を従はしむるに至り、轉じては梧桐竹實と關係づけられ、高く飛昇するといふことにもなつた事實がほど知られるに至つた。

こゝに於いて當然考究を要するのは、かゝる鳳凰とは何に由来するものであるか、何と考へられてゐたかといふ重要な問題であるが、それには先づ此の事に就いて従来如何なる説が存するかを考へてみねばならない。そこで説の當否は暫く措いて、かゝる問題に對して大膽な意見を述べる泰西の東洋學者の間に提示されてゐる説はなつかとらふと、J. Lager 氏は『書經』の英譯の内に前に引いたところを

“When the nine parts of the service according to emperor's arrangements have all been performed, the male and female phoenix come with their measured gambollings into the court.”

と譯してゐるから、鳳凰を phoenix と認めたのである。E. CHAVANNES 氏もまたその名著佛語譯の『史記』“Les mémoires historiques de Se-Ma Ts'ien”の内に五帝本紀にある鳳皇來翔の條を⁽¹⁷⁾

“Alors Yu mit en honneur la musique de neuf reprises, il fit accourir les êtres étranges; le phénix mâle et le phénix femelle vinrent en volant.”

と前と同様に譯してゐるに過ぎない。最近のものでは章鴻釗氏が『三靈解』に於いて音の類似を説いて「西方古有神鳥曰腓尼克斯⁽¹⁸⁾」とこれと同様の説を爲してゐる。これらは鳳凰を phoenix とした例である。然るに A. FORKE 氏が Mitteilungen des Seminars für orientalische Sprachen. 1904 誌上⁽¹⁹⁾に於いて Mr Wang und die Königin vor Saba の内⁽²⁰⁾に鳳の古字は鳳⁽²¹⁾であつて、riesen Vogel を意味し、これは Phönix と關係があると共に Strauss (駝鳥)にも由来があるに相違ないと論じられるのである。これは前のもと同く Phönix と

いふことも注意すべきであるが、駝鳥といふことも一應考慮すべき問題となる。次に私は H. A. GILES 氏が Adversaria Sinica の中にもした “Who was Si Wang Mu” なる論説に説く所のものを擧げたいと思ふ。即ち氏は A. NEWTON 教授の説いた如くに、鳳は peacock 殊に印度本地に産する Pavo Cristatus を見たことのある或る藝術家が作爲したもので、本來は實在の鳥類がいつしか種々の屬性を増して行つたものであらうとの意見を續述⁽²¹⁾して居られる。

於是、これら諸説に對する私考を聊か述べるに當つて、先づ鳳凰を西方の神鳥 phoenix に比定することは果して當を得たものであるか否かを考へて見ねばならぬ。それを考へるためには、古代西方の傳説に現はれたこの鳥の性質を考へて見ねばならないから、それを概括すると phoenix は五百年間生きてゐて、自ら身を焚いて死し、その體から一羽の若い phoenix が生れ出て成長するので Tacitus によると「ポラス、フェビウス (Paulus Fabius) の世に phoenix といふ名で知られてゐた神鳥が幾世紀も姿を見せなかつた後に埃及を訪れた。此の鳥が飛揚すると、一群れの種々な鳥が付き添ひ、それは皆物珍らしさに引きつけられ、かゝる美麗な鳥の出現に驚いて見とれてゐるのであつた⁽²²⁾」とある、といふので、これは西方に神鳥があつてそれは phoenix といふものであつた、支那にも神聖視された鳥があつて鳳凰と名づけられてゐた。そこで恐らく鳳が西方の影響によつて現はれたのであらうといふ程度の極めて漠然たる推測であつて、これだけの理由で直ちにこの兩者は關係ありと決定してしまふ事は出来ない。私はたゞ phoenix に関して説かれてゐるその性質の中に就いて、「この神鳥が飛ぶ

時には一群の種々な鳥が付き添ふ」と云はれてゐる點が鳳について「群鳥從之」などとあるのと著るしい類似があると思ふ。即ち前に掲げた『説文』や『漢書』にあるのが顯著なその事例である。故に單に鳳凰のみについて西方影響の有無を断じようと試みるならば、此の點は明かに西方からの影響として本來有した性質であらうと推断し勝であらう。併し、支那に於いてはかやうな表現をするのは必ずしも鳳凰に限らない事を併せ考へねばなるまい。即ちこれと同様の事は龍の場合にもまた麒麟の場合にも存するのであつてその一例を示すならば、『南史』梁本紀の「承聖三年、梁江陵城壕中有龍騰、出煥爛五色躍入雲、六。七。小龍相隨。」の如き、『舊唐書』五行志の「元和七年十一月、龍州武安川會田中嘉禾生、有麟食之、復麟之來一鹿引之、群鹿隨之。」の如き記述がその顯著な例で、これは衆蟲の王、衆獸の長とせられた事から現はれて來る當然な結果で明瞭に支那の思想とすべきであるから、鳳の場合もこれらの事例と等しいので、他に西方影響と認むべき根本的な理由が無い以上これを支那の思想としてよからうと思ふのである。私はかく考へて鳳凰の由來が Phoenix にあるとする説には賛成し難いのである。なほ、前に FORKE 氏が大鳥といふことに注意して鳳凰の由來に駝鳥の影響の分子があると論ぜられたことを述べて置いたが、それについては殊更考慮を拂ふ要もあるまいと思ふからその事はこゝには省略に従ふ。

かくてこゝには非 H. A. Giles 氏が、鳳凰を peacock に比定せられた説に對して鄙見を述べべきこととなつたが、私の考究の結果もそれと其の軌を一にして、peacock は鳳凰の由來に重要な分子を爲してゐるに相違ないことと断ぜられるのである。併しその結論に達する過程は Giles 氏の所説とは全くその趣を異にするのであるか

ら、次にその問題の考定に必要な鳳凰の形態について一應考究を試み、然る後にその事に論及することとしよう。

三 その形態及びその由來に對する鄙見

於是、前に後述することとした形態に關する記事を聊か調べてみると、『説文』の鳳の條にはその形態として、「鸞前鹿後、蛇頸魚尾、龍文龜背、燕頰鷄喙」といふ事が述べてあり、『山海經』の南山經には「有鳥焉其狀如鷄、五采而文、名曰鳳凰、首文曰德、翼文曰義、背文曰禮、膺文曰仁、腹文曰信」とあり、海內經には「鳳鳥首文曰德、翼文曰順、膺文曰仁、背文曰義」とあつて前者の具體的に種々な動物の形體を擧げたのに對し、後者は抽象的な觀念を結びつけてゐる。そのやうな思想は緯書の『論語緯摘喪聖』には「鳳有文象、一曰頭象天、二曰目象日、三曰背象月、四曰翼象風、五曰足象地、六曰尾象緯」などと極端に現はされてゐる。かゝる記事はいふ迄もなく種々な思想で潤色されたものであつて、決して original な形體を示すものであるまいとは容易に推量せられるところである。そこで私は進んで他に鳳凰の原形を推知せしめるに足るやうな記事は無からうかと注意したのであつたが、かゝる問題は其の性質上、その委細を上代の文獻に徵することは至難であり、且つ檢索し得るものは概ね鳳凰の屬性が既に或る程度まで發達した後に出來た記録であるため、所要の史料は極めて乏しいのであるが、然もなほ考察を試みた結果、鳳凰は大鳥であつて羽毛が五采で美しいとせられてゐたことが推知せられたの

である。

かの『後漢書』光武本紀の建武十七年冬十月の條には「有鳳皇見於潁川中郟縣」とあるが、『東漢觀記』卷一に依ると、此の時に「鳳凰五、高八尺九寸、毛羽五采、集潁川、群鳥從之」と云つてある。また同じく『後漢書』の桓帝本紀建和元年十一月の條に「濟陰言有五色大鳥見于已」とあるが、かゝる記述はそれが鳳凰であるか否か明瞭にし難い。然るに『三國志』吳志の孫亮傳には「建興二年十一月有大鳥五、見於春申、明年改元五鳳」とあり、五鳳と改元されてゐるのを見るとその大鳥は鳳と考へられたものに相違なく、『晉書』の五行志にはこれを「建興二年十一月、有大鳥五見於春申、吳人以爲鳳皇、明年改元五鳳」と述べてある。また『宋書』符瑞志、宋の文帝の條に「元嘉十四年三月丙申大鳥二集秣陵民王頴園中李樹上、大如孔雀、頭足小高、毛羽鮮明、文采五色……揚州刺史彭城王義康以聞、改鳥所集永昌里曰鳳凰里」とある。また『唐書』の張薦傳に「夢紫文大鳥五色成文止其廷、大父曰吾聞五色赤文鳳也」などあるのも以上述べたものの類例とせられよう。これ等の事實から、鳳凰に大鳥が聯想されてゐたことは殆ど明瞭な事實となつたが、それと共に毛羽五采とか五色とか、文采とかと云つて美麗な鳥であることが説かれてゐる。而してその點に着眼すると、『説文』に「鳳、神鳥五色備」とあるのが注意せられると共に、『山海經』の南山經に「有鳥焉、其狀如雞、五采而文、名曰鳳凰」とあり、大荒西經に「北狄之國……有五彩鳥三、名一曰皇鳥、一曰鸞鳥、一曰鳳鳥」とあるのなどが考慮に上つて来る。また黃憲の『外史』卷五上林に「有五色鳥集于上林、秦王喜而問曰、寡人享西土之祿、未有功德於敝邑之百姓、而致珍禽、寡人

以爲鳳也」とあるのや、『三國志』吳志に「大元元年有鳥集苑中、似鷹高足長尾羽五色、咸以爲鳳凰」とあるものなども無論かゝる記事にありがちな或る部分の潤色や誇張はあらうが、五色に美麗な鳥が鳳と考へられてゐたといふ點は概ね一致してゐると信ずる。かゝる資料に基いて私は鳳凰は大鳥であつて羽毛が五采で美麗なものとせられてゐたらうと推察を敢てしたのである。

かくて、更に考察を進め、文字の検討を試み、その得た結果を綜合してこれを遺物に照し、その間に矛盾の生ずることなく、多くの一致點が見出し得たならば、先づこの推考は當を得たものと考へてよからうと思ふが、私の考察はこれらの點に就いて大體一致するやう思はれるから、以下順次それらの諸點を明かにしてみよう。

以上考察を試み來つたところに據つて、既に或は鳳といひ、或は鳳皇といひ、或は鳳凰に作られる場合のあつた事は自ら明かになつたが、『爾雅』の釋鳥を見ると「鸞鳳其雌皇」とあつて雄と雌とが區別されたやうに記してあり、張華の『禽經』などにも明瞭に「鳳雄鳳雌」と云つてある。故に西人は嘗て鳳凰を Phoenix male and female と譯したのであらう。要するに皇或は鳳は鳳に附隨するものに過ぎず恐らくその原形は鳳であつたに相違ない。そこで鳳の文字を考へてみるのに、『説文』には鳳の古文として「(23) 鳳古文鳳象形」また「(24) 鳳古文鳳」とあり、就中その縁は鸞で、これは大鳥である。『莊子』に「大不知其幾千里」と云はれたのも本來これが大鳥とせられてゐたところに由來する空想であらうかと思はれる。かく考へて來ると、本來この文字は大鳥に聯關するところがあると共に、鳳は鐘鼎古文では鳳雛に作られてゐる。かの高田忠周氏の著作『漢字詳解』漢字系譜講

義を見ると「按ずるに朋は長尾禽なり、元と當に⁽²⁴⁾鳳に作る」とあつて羽や尾に注意された事も明かである。即ち文字考察の結果、鳳の文字と密接なる關係ある鵬が既に大鳥を示し、⁽²⁵⁾鳳參で羽翼が注意されてゐる以上、鳳もまた同様であると考へられ、文字考察の結果も羽毛の美麗といふ點が記録から得られる結果のやうに明かではないが大鳥なる點、羽毛に注意された點に於いて極めて自然に合致すると云つてよからう。

併し既述の諸點のみを以つて満足するのは聊か早計に失する憾があるから、更に進んで一應遺物に如何に現はされてゐるかを考究する必要がある。元來鳳と云へばたゞちに Fabulous な鳥を思ひ出すのであつて、後漢のものと推定されるかの鳳碑⁽²⁶⁾(圖版第七ノ19)の鳳の如き形態をその代表的なものと云つてよからうと思ふ。なほ形態に於いて殆ど全く鳳碑のものと相等しい四川省渠縣所在の沈府君神道闕(圖版第七ノ20)の如きを如何に考ふべきかについては、鳳と朱鳥との關係に關する問題となつて遽に決し難いであらうが、大村西崖氏の如きは「四川渠縣に漢謁者北七司馬左都侯新豐令交趾都尉沈府君神道闕あり、兩闕共に上に朱鳥を刻し、右闕は下に龜蛇を刻し、左闕は下に一獸首を刻す」と朱鳥として居られ、Oswald Sirex 氏はその圖録に Le phénix (fons)⁽²⁷⁾と認定して居られる。私は鳳と朱鳥との關係についての問題は遠からず論考を試みようと思つてゐる四神の考察に譲るとして、兎も角沈府君神道闕上部の鳥は鳳の問題に有力な參考となるものと信じ、今その形態の Fabulous なるに注意して置く。併し、此の種の形態は概して想像的分子を豊かに附加された後のものと考へられ、古記録の記載が既に原形が何であつたか分明し難いほどに發達した後の形に過ぎないのと同様である。然るに CHAVANNES 氏

が Mission Archéologique dans la Chine Septentrionale の No. 165 2 phénix として掲げた鳳凰刻石(圖版第七ノ21)には明瞭に「鳳皇」と記してあるし、かの漢の山陽麟鳳碑(圖版第四ノ11)の鳥の下には「天有奇鳥、名曰鳳皇(下略)」とあつて、共に漢代の人々が鳳凰を如何なる形態のものとしてゐたかを知る貴重な資料である。前者はその手法概して幼稚であつて精細にその形態を窺ふには足らぬが、頭上に冠羽があり尾羽甚だ長いことが注意せられるし、後者はその手法や、精妙に涉り、一見所謂孔雀(Peacock, Pavo Cristatus)を思はしめ、兩者を綜括して、それが所謂孔雀を畫いたものであらうとは何人にも首肯せらるゝところである。かく考察を試みると、この二種の遺物から私は鳳凰の由來の尠くとも重要な分子は所謂孔雀に負つたものではあるまいかと思爲せられ、然も上に考察し來つた鳳なるものが大鳥なることと、羽翼の美麗なることに特に注意されてゐるといふ事に何等の牴觸する所のないのみならず、却つて逆に所謂孔雀にその重要な由來があつたればこそ、大鳥なること、羽翼の美しいことが特に注意されたのであつたかとも考へられる。

こゝに私は一轉して、支那の古記録に現はれてゐる孔雀が Peacock であるか否かといふ事を一應考究して置きたいと思ふ。即ち、『漢書』卷九十五、西南夷傳を見ると「謹北面因使者獻白璧一雙翠鳥千(中略)孔雀二雙」とあるし、卷九十六、西域傳罽賓國の條には「出封牛水牛象大狗沐猴孔爵」とあつて、これに對して王先謙は「御覽引魏文帝與朝臣詔曰、前于闐王所上孔雀、尾萬、枝文采五色、罽賓進于闐、故亦有之、今回疆有孔雀」と注してゐて、Peacock と思はれる。併し雀は『說文』に依ると、雀は「鳥之短尾總名也」とあり、役世の

如く雀を意味するものでなく、單に鳥であるのみならず、朱鳥を(28)一に朱雀とも云ひ、古の文獻に往々青鳥黃雀などいふやうな用例のあるのを見てただちにその然るを覺り得るのである。なほ孔は孔道などいふ場合の孔と同じく大を意味する事を併せ考へると、孔雀は大鳥と同義とも考へられ、『漢書』西域傳、烏弋山離國の條にある「有大鳥卵如甕」の大鳥や、或は西域傳卷末の論贊にある「鉅象師子猛犬大雀之羣食於外園」の大雀などと特に區別すべからざるものやうに思はれ、記録の上のみからでは所謂孔雀を以つて Peacock とは斷じ難いのである。然らば、上代の支那人は Peacock を知らなかつたかといふと決してさうではなく畫象石に明瞭にその圖があつて、Peacock は相當知悉されてゐたものと推察される。かの孝堂山の畫象に見る樓屋上の一對(29)の如き、(圖版第八ノ22) 武梁祠の同様な圖樣(30)の如き、Adolf Fischer 氏が伯林に齎したといふ畫象の屋上のもまた同様であるし、秦室廟闕畫象(31)(圖版第八ノ23) のものは寫實の妙を現はし、皆星玉を持つてゐて何れも Peacock そのものに疑ひはない。そのみならず四神鏡の朱鳥には、全く Peacock の形を彷彿たらしめるものがあり、羅振玉氏が『古明器圖錄』に掲げた漢鏡四側、玄武の對側の朱鳥(圖版第八ノ24)の如きも明らかに Peacock であつて、漢代に所謂孔雀がよく知られてゐたことは寸毫も怪しむ餘地はない。元來此の Peacock (Pavo Cristatus) の産地は、印度本土及び崑崙地方を主とし、Pavo Muticus と稱する種族は印度支那地方及び瓜哇方面に産し、その性質は概して怯怕性に富み、よく馳走するけれども容易に飛ばず、小群を爲して生棲するものであり、何時の頃からかは不明であるが、飼鳥としても養はれてゐる。而して、印度支那地方の如きは支那に隣接する地域ではあ

り、古代の支那人が、Peacock を知つてゐたらうといふ事はほど明瞭となつた。かく考へて來て初めて後世の事實と照合して古に孔雀と稱せられたのは Peacock であつたらうといふことも推知せられると共に、鳳凰には後世種々の屬性が附加され、様々な潤色を経てゐるけれども、その根源的な由來と爲つたものは孔雀の大鳥にして他の鳥類に比すべきもの無きばかりにその羽翼の美麗であつたといふ事にあつたと推定せられる。

これを要するに私は以上の論考を経た結果 Girard 氏の鳳凰の由來を Peacock にあるとした説に贊意を表するのであるが、孔雀は何人の眼にもその羽翼の美麗なことが認められ、稀に見る立派な鳥であるから、それが古に普通ならぬ立派な鳥として終に祥瑞とせられるに至り、祥瑞は仁君の代に現はれるものであるから、それから轉じて仁鳥ともなり、生成を愛する屬性も附加せられ、ついでかゝる特殊な鳥は羽族の長と考へられて群鳥を従へるといふ事にまで發達し、層一層複雑な性質となるに至つて、古文獻に往々にして見る鳳凰の完備した性質形態が現はれるに至つたものであらうと私は信ずるのである。

- (1) 「東洋學報」第拾七卷第二號、二八二—二九八頁參照。
- (2) 「支那の古文獻に現はる麒麟について」(立教大學史學會編「史苑」第三卷第四號) 二八九—三一三頁。
- (3) 『前漢書』卷八、神爵二年……正月乙丑鳳凰甘露降集京師、
- (4) 同上、神爵四年春二月詔曰逋者鳳凰甘露降集京師嘉瑞並見、冬十月鳳皇十一集社陵、
- (5) 同上、五鳳三年三月辛丑鸞鳳集長樂宮東闕、
- (6) 同上、甘露三年春二月詔曰逋者鳳皇集新蔡、

- (7) 『後漢書』卷一下、建武十七年冬十月有五鳳皇見於潁川之鄆縣、
- (8) 『後漢書』卷三、元和二年二月鳳皇集肥城、
- (9) 『後漢書』卷五、延光三年春二月戊子濟南上言鳳皇集臺縣丞霍牧舍樹上、冬十月壬午新豐上言鳳皇集西界亭、
- (10) 『後漢書』卷七、建和元年十一月濟陰言有五色大鳥見于己氏、
- (11) 『後漢書』卷八、光和四年秋七月河南言鳳皇見新城、羣鳥隨之、
- (12) 『三國志』「魏志」卷二、「文帝本紀」延康元年八月石邑縣言鳳皇集、「吳志」卷二、黃武五年秋七月蒼梧言鳳皇見、黃龍元年夏四月夏口武昌並有黃龍鳳皇見、「吳志」卷三、建衡三年西苑言鳳皇集改明年元鳳皇、
- (13) 『晉書』卷三、「武帝本紀」泰始元年十二月、是月鳳皇六青龍二白龍二麒麟各一見于郡國、二年十二月、是歲鳳皇六青龍十黃龍九麒麟各一見於郡國、五年五月辛卯朔鳳皇見於趙國曲、など皆その例である。
- (14) 註(3)(6)(11)参照。
- (15) 『宋書』卷二八、符瑞志、「宋武帝永初元年七月戊戌鳳皇見會稽山陰」、「周書」卷五、武帝本紀天和二年秋七月辛丑梁州言上鳳皇集於楓樹羣鳥列侍以萬數、
- (16) 拙稿「上代支那の日と月との説話について」(『東洋學報』第拾六卷第三號)参照。
- (17) James Leeger, Chinese Classics, Vol. III, The She Soo-king, p. 88.
- (18) Eduard CHAVANNES, Les Mémoires Historiques de Se-Ma Ts'ien, Tome I, p. 90.
- (19) 章鴻釗『三畫解』二十三枚裡。
- (20) Mitteilungen des Seminars für orientalische Sprachen, Jahrgang VII 1904, ss. 133—136.
- (21) H. A. Giles, Adversaria Sinica, pp. 9—10.

- (22) Thomas BURRICH, Age of Fables, (Everyman's Lib.) p. 319.
- (23) 段玉裁『説文解字注』第四篇上參照。
- (24) 高田忠周著『漢字詳解』三四〇頁、漢字系譜講義。
- (25) 大村西崖著『支那美術史雕塑篇』四五頁。(第百一圖)
「拓本早崎天眞君藏に風碑(高五尺一寸三分、潤二尺五寸三分)あり、麟碑と對せしものか、鳳形甚だ佳なり、所在を詳かにせず、刻文漫漶甚だしと雖も記末に乙巳春の字見えたり。惟ふに和帝元興元年ならむ」とある。
- (26) 『支那美術史雕塑篇』六三頁。大村西崖氏の所説は以上のやうであるが、これを碑身の上部にあるから、朱鳥であると簡単に云ひ切れないので、必ずしも玄武とのみ相對してゐるのではないから余は寧ろ鳳として大過ないのではないかと思ふ。
- (27) OSVAID SIREN, Histoire des arts anciens de la Chine. III. La Sculpture de l'époque Han à l'époque Ming. Pl. 11, 13.
- (28) 會津八一氏は私の考へに對して『文選』西京賦に「怪獸陸梁大雀跋踈。」兩都賦に「捷金爵。魏都賦に雲雀隄。以上雀又は爵はいづれも sparrow にあらず、bird なるべし。尙ほ年號の金爵などいふのも參照を要す。そも、生きたる鳳凰が群飛して宮殿又は花林に集りたりや否やは知り易からざるも、とにかく宮殿建築の屋上に人工の大鳥を裝飾として掲ぐる風が行はれ、ある場合にはその起源の説明のために鳳凰飛來の傳説を生じたこともあるべし。このことは早稻田大學の講義にても述べしところであり、又拙稿「法隆寺食堂天蓋考」中にも述べおきしところなり」と敬示せられた。

(29) E. CHAVANNES, Mission Archéologique, III. Chambrette du Hiao Tang Chan, Pl. XXIV, N°. 45, Partie

occidentale de la Paroi du fond.

大村西崖著『支那美術史雕塑篇』附圖第百十圖。

(36) E. CHAVANNES, *op. cit.* IV. Wou leang t'sen. PL. XL N° 68, Pilier de l'ouest face sud du contrefort. *op. cit.* V. Monuments divers de l'époque des Han.

(37) CHAVANNES, *op. cit.* PL. XCI. N° 170, Bas-reliefs rapportés à Berlin par Prof. M. Adolf FISCHER.

(38) CHAVANNES, *op. cit.* I. Les piliers de Teng-fong hien. A. Pilier du T'ai-Che. PL. VII. N° 11, Bas-relief (oiseau.)

『支那美術史雕塑篇』附圖第百五圖、秦室廟闕畫象。

(昭和六年一月八日稿)

上代支那の洪水説話について

昭和六年十二月「東洋學報」第拾九卷第參號

① 上代支那の洪水説話

二 世界諸民族の洪水説話

附録 前漢より唐宋に至る洪水年表

一 上代支那の洪水説話

上代支那の典籍を繙く者は、誰しも古の聖天子なる堯舜禹の世にその全領域に互る大洪水のあつたことが傳へられてゐるのを知悉してゐるのであつて、學者にしてこれに對して關心を有ち、注意を拂ひ、その考察の結果を發表せられたものも尠くないのである。その一二の例を擧げるならば、やゝ溯つては高木敏雄氏の「支那洪水神話の英雄⁽¹⁾」があり、或はまた小川琢治博士の「支那上古の天地開闢及び洪水傳説⁽²⁾」などがあり、玄珠氏の「禹的神話⁽³⁾」の如き、H. MASPERO 教授の *Les légendes dites du déluge-1, Légende de Yu* の如きもまた此の間に寄與するところ尠からざるものであり、就中 H. MASPERO 教授の所説には肯綮にあたるものが尠くない⁽⁵⁾。

上代支那の洪水説話について

二六七

これ等學者の所説には何れも學ぶべき點が多いのであるが、然もなほ、これを支那古代史上の一つの問題として、或は説話研究上の觀點より考察しようとするならば、問題は以上のやうな論考によつて決して盡きてゐる譯ではなく、私は寧ろなほ一層の總括的研究の必要があると信じたので、微力を聊かその考究に傾け、未熟ながら今ここに此の小篇を爲して學界の叱正を仰がんとするのである。

さて、支那上代の所傳の中について洪水を考へるに當つて何人も注意を拂ふのは、いふまでもなく『尙書』の記載であつて、その主要な部分は次のところであらう。即ち、

帝曰、咨四岳、湯々洪水方割、蕩々懷山襄陵、浩々滔天、下民其咨、有能俾乂、兪曰於鯀哉、帝曰吁咄哉、方命圯族、岳曰異哉、試可乃已、帝曰往欽哉、九載績用弗成、(堯典)

帝曰、來禹、汝亦昌言、禹拜曰、都帝予何言、予思日孜孜、皐陶曰、吁如何、禹曰、洪水滔天、浩々懷山襄陵、下民昏墊、予乘四載、隨山刊木、暨益奏庶鮮食、予決九川、距四海、濬畎澮距川、暨稷播奏庶艱食鮮食、懋遷有無化居、烝民乃粒、萬邦作乂、皐陶曰、兪、師汝昌言、(益稷)

であつて、これは帝堯の世より大洪水があり、それが禹の懸命なる努力によつて治まり九州よく整ひ、萬民安穩なる生活に入るの前提をなすに至つたことをいふのである。この記述は記録の性質上一般に互つて然るが如く、『史記』になると一層詳細に記されてゐて、

禹乃遂與益后稷奉帝命、命諸侯百姓、與人徒、以傳土、行山表木、定高山大川、禹傷先人父

功之不_レ成受_レ誅、乃勞_レ身焦_レ思、居_レ外十三年、過_レ家門不_レ敢入、薄_レ衣食致_レ孝于鬼神、卑_レ宮室致_レ費於溝洫、陸行乘_レ車、水行乘_レ船、泥行乘_レ橇、山行乘_レ櫟、左_レ準繩、右_レ規矩、載_レ四時、以開_レ九州、通_レ九道、陂_レ九澤、度_レ九山、令_レ益子_レ庶稻可_レ種、卑_レ濕、令_レ后稷子_レ衆庶難_レ得之食、食少調_レ有_レ餘相給、以均_レ諸侯、とある。かやうな記述はこれ等文獻の一般的性質、換言すれば、中心の意圖が政治道德の思想に存する事から推論するまでもなく、上の記載を讀過しても直ちに知られる如く、これは大洪水を治めたといふことに材を取つて禹の徳を稱へんと期してゐるので、かやうな記録から漢民族の遠い上代傳説の中に洪水に関するものの存したことは推定せられるが、然もこれを以つて漢民族洪水説話の原型を窺知することは不可能である。然も他の場合に於けると同じく記録は後世成立したものが多く、それが爲め説話の原形は或は記録を精細に検討して原形と想はれるものの把握を試みるか、或は諸民族の一般的事例に照して論理的に逆推を試みるかの道に據るに非ずんば到底これを知り難いのである。私の小智を以つてしてその何れの方法をも完全に近く適用し難いけれども、たゞや豊富な後世の記録に現はれたところを利用して一二の所見を開陳して、後の透徹せる解釋を待つこととしよう。

かの『淮南子』覽冥訓に「往古之時、四極廢、九州裂、天不兼覆、地不周載、火熾炎而不滅、水浩洋而不息、猛獸食_レ顛民、鸞鳥擾_レ老弱、於是女媧、鍊五色石以補蒼天、斷鼈足以立四極、殺黑龍以濟冀州、積蘆灰以止淫水、蒼天補、四極正、淫水涸冀州平」といふ混沌とした世界が漸次に整頓される説話がある。想ふにこの説話は、現在の整頓された世界以前に混沌の状態があることをいふのであるが、今一步溯つて、その混沌の状態が何故に現は

れたかといふことを説くものもあるのである。即ちその混沌の原因を説いたものは『淮南子』天文訓の「昔者共工與顛頊爭爲帝、怒而觸不周之山、天柱折、地維絕、天傾西北、故日月星辰移焉、地不滿東南、故水潦滲埃歸焉」のやうなものがその例である。而して上に擧げた混沌が整へられた覽冥訓の説話と、その混沌の原因を説いた天文訓のものは相互に獨立した説話になつてゐるが、それは結合し得べきもので、現に王充『論衡』談天篇には「共工與顛頊爭爲天子、不勝怒而觸不周之山、使天柱折地維絕、女媧銷煉五色石以補蒼天、斷鼈足以立四極」となつてゐる。たゞかやうな説話相互の関係については輕々しく論斷し難いので、本來『論衡』のやうな説話が原でそれから分離して二つの説話が説かれたかのやうにも考へられるが、さう考へるのは寧ろ未開人の心理に徹せぬ考へ方で、世界諸民族の間には混沌から天地が開闢される説話も存するし、然も混沌の整頓といふ點に中心が置かれてゐるので、私は知識の進むにつれ上に列記した順序のやうに説話が發展して行つたであらうと信ずる。なほ、この説話全體は色々の分子の合成である事も容易に考へられ、共工と顛頊の争に因づく混沌の説話に「水潦」といひ「水浩洋而不息」といひ、ついで「積蘆灰以止淫水」とあるところは、上代漢民族の有つてゐた洪水説話がこゝにその片鱗を現はしてゐるのであらうと思ふ。然も表現は兎も角としてこの説話の由來は古いものに相違ない。かう考へると洪水説話の原形は、必ずしも堯、或は禹などの古帝王と關係を持つてゐたものとのみは考へられぬので、それらとは別に洪水説話は存在したものであらう。なほ『淮南子』覽冥訓の説話には「殺黑龍濟冀州、積蘆灰以止淫水」などあつて、黒龍は龍に五行の色に於いて北方にあたる黑色を配し、然もそれが北方

なる冀州に當つてあつたり、陽氣の表徴ともいふべき蘆を取り來つて、陰なる水を制するなどいふところに、五行思想や陰陽思想の潤色を経てゐる事明かであるが、その説話の中心は決してさう新しい代のもではなく、古からの傳承を傳へてゐると思はれるので、私は上に説いたやうに考へたのである。併し古帝王の聖徳ある君として、民衆生活の安泰に勉めるといふ事績の内容が發達して行つた場合に、かねてより存在した洪水説話は、その洪水が治められて天下が整へられるといふ形に於いて、古帝王に關する説話の中に重要な位置を占めるに至つたのであらうといふ推考は強ち顧慮の價値なきものではあるまい。材料を取扱ひつゝかゝる結論に達した私は、次のやうな史料をその推考を促すものと信ずるのである。

即ち前に擧げた『尙書』堯典の記載にあつて、洪水は堯の世に起つた事とされてゐるのは、顯著な事實であり、『史記』も無論それを継ぎ、古記録には多く堯が鯀に命じて水を治めようとした事が述べてあるのである。漢の趙曄の撰するところといふ『吳越春秋』吳太伯傳には「堯遭洪水、人民泛濫遂高而居、堯聘棄、使教民山居、隨地造區、妍營種之術、三年餘行人無飢乏之色、乃拜棄爲農師」とあり、越王無餘外傳にもまた「帝堯之時、遭洪水滔々、天下沉漬、九州闕塞、四瀆壅閉、帝乃憂中國之不康、悼黎元之罹咎、乃命四嶽乃舉賢良、將任治水」などあつて、洪水は堯の世に起つて、終に禹の時にまで及んだのである。その故にこの間舜もまたこれに關係を有するのが當然であるが、記録の上で洪水に關聯したところでは舜は決して重要な役割を演じて居らない。併し、論理的に言へば當然舜の世も洪水に賑まされた筈で、『淮南子』本經訓にある「舜之時、共工振滔洪水以薄空桑、

龍門未開、呂梁未發、江淮通流、四海溟滓、民皆上丘陵、赴樹木、舜乃使禹疏三江、五湖、開伊闕、導滎澗、通滄陸流、注東海、鴻水漏、九州乾、萬民皆寧其性、是以稱堯舜以爲聖」などは洪水は舜の世に起り、これを治めたことも舜の業績と見做されてゐて、舜が最も重要な役割を演じてゐるのである。これらは、後に或る論及を試みるために論理的な推考を敢てしたに過ぎないが、古代支那の洪水と云へば、直ちに禹が聯想される程この場合禹が重要視されてゐるので、衆知の事實を縷述するの煩は私の深く慮るところであるが、敢て茲に所要の史料を引用して考究の明確を期したいと思ふ。

前に引いた『尙書』や『史記』の記述は、殊更いふ要のない程に著明なことであるが、數多い文獻の内『列子』の楊朱篇には「鯀治水土、績用不就、殛諸羽山、禹纂業事讐、惟荒土功、子產不字、過門不入、身體偏枯、手足胼胝、及受舜禪、卑宮室、美絨冕、戚々然以至於死、此天人之憂苦者也」とあり、『山海經』の海内經には「洪水滔天、鯀竊帝之息壤以堙洪水、不待帝命、帝令祝融殺鯀於羽郊、鯀復生禹、帝乃命禹卒布土以定九州」と言つてあり、『淮南子』齊俗訓には「禹遭洪水之患、陂塘之事、故朝死而暮葬、此皆、聖人之所以應時耦變、見形而施宜者也」とあり、桓寬の『鹽鐵論』相刺篇には「文學曰禹燧洪水、身親其勞、澤行路宿、過門不入、當此之時、簞墮不掇、冠挂不顧而暇耕乎」なども言つてある。「楚辭」の天問に「伯禹腹鮪、夫何以變化、纂就前緒、遂成考功、何續初繼業而厥謀不同」とあるが、これはその前文の鮪の事を言つたところに續いた文であつて、そのことについてには後に考へる機會があらう。

以上は、禹に關する殆ど枚擧に達ない程の記載の中からその一斑を選び録したに過ぎないが、これを以つてしてもその全貌が察知せられる如く、これらの記述相互間には、横に多少の變異は認められるものの、縦に説話の歴史的發展を窺ひ得る何ものも見出し難いのであつて、私はこゝにまた、既に今を去る二十餘年前に白鳥博士が「尙書の高等批評——特に堯舜禹に就て」と題して高説を發表せられ、堯の事業は即ち天に關する分子より成り舜の事蹟は人事に關するものを外にして求むべからず、「禹に至つては刻苦勉勵大洪水を治して禹域を定めたる者これ地に關する事蹟也。禹の事業の特性は地に關する點なり、之等の點より推さば此傳説作者は天地人三才の思想を背景にして之を創作せるものなる可く(中略)禹の治水にしても洪水は黄土の沈澱によりて起る黄河の特性にして河畔住民の禍福に關する事極めて大なるもの也。よく之を治するは仁君と云ふを得可し、然るに書經は支那のあらゆる河川が堯の時以來氾濫し居りしに禹一代に之れを治したりと傳ふ、かくの如きも事實として肯定し得らるべきか。」と喝破せられた卓見を想起するを禁じ得ないのであつて、この『尙書』に現はれるやうな思想が漸くその形を整へるに當つて、古來漢民族の間に傳承され來つた洪水に關する物語が、國民的聖王たる禹と結合するに至つたものであらうと信するのである。換言すれば思想上洪水説話と禹とが結びつき、その結果禹の治水といふ事が現はれ、ついで『史記』に謂はれてあるやうに「勞身焦思……過家門不敢入」とか『列子』の所謂「身體偏枯、手足胼胝」とかの觀念が現はれ、あらゆる辛苦を敢てして治水に努めた爲めに、國民の生活が安泰なるを得るに至つたといふのである。かく考へて來ると、今日遺存する上代の文獻は古來傳承され來つた洪水

に關する説話が、或る機會に政治道德的思想と結合したものであらうと想像される。

聊か詮索に過ぎるが試みに一言しようなら、後世政治道德思想として現はれた休祥災異の思想からいふならば、洪水は確かに一種の災異である。然るに堯舜禹は、支那民族の儀表たる理想的聖天子であつて、その治世に多くの瑞徴が現はれたことが説かれてゐるやうな觀念から云へば、堯の世以來洪水が天下萬民を惱ますといふやうな事はあり得べからざることといひ得よう。然るにそれが現はれてゐるところに此記録の時間的な古さと、思想的な素朴さとが窺はれ、且つ私が別して力説して置きたいと思ふのは、最初黄河の縁邊に蔓衍したこの民族が、如何に黄河の氾濫にその生活を脅され艱まされたかといふ事實に由來する洪水の説話は、無視せんとするも到底得べからざる程に人心にその支配力を有したが故に、『尙書』などに其冒頭の堯の世からこれが現はされたのであらう。なほ茲に一言を費して置きたいと思ふのは、その洪水の範圍地域であつて、事新しく論らふまでもなく漢民族の世界觀にあつては自國は中國であり、四周の地域は凡て化外の蠻夷或狄の地で自國中心の觀念に貫かれてゐるから再域にあつたとされた洪水は、論理的に世界の洪水とも云ひ得ようけれども、併し古の記録に現はれた洪水は『尙書』の禹貢に窺ひ知られる如く、治水の結果九州が整頓されたので、それを以つて世界全土に渉る洪水とするのは無理な推論で、その洪水は正に支那全土に氾濫したといふ意味に外ならないのである。これは後に或る考究を試みるであらうが極めて重要なことなのである。

さて、上に私は洪水の分子は、由來の遙かな民間説話ともいふべきものから發達して、あのやうな形になつた

ものであらうこの推考を試みたのであるが、既に白鳥博士⁽⁷⁾が提唱されたやうに、堯舜禹は、事實は年代的な繼承であるけれども、豊かに同時代的(Contemporary)な意味を持つてゐるといふ事、またはその世系、今假に禹を例に取るならば一二の相異なる所傳⁽⁸⁾はあるが『史記』に據ると「夏禹曰文命、禹之父曰鯀、鯀之父曰帝顓頊、顓頊之父曰昌意、昌意之父曰黃帝、禹者黃帝之玄孫而帝顓頊之孫也」とあり、かやうな世系が、その虚構を論ずるまでもなく、後人の假托なることは一般に認められる所で、今更論ずる要はないから今暫くこれを措くとして、然も看過し難きは、多くの記録が一致して禹の父としてゐる鯀とは如何なる人物であるかといふ問題である。これは殆ど解決し難く思はれるばかりの難問で、苟くも一應慎重な考慮を拂つて見ねばならぬ。

そこで『尙書』堯典の洪水の條に「下民其咨、有能俾乂、兪曰於鯀哉、帝曰吁咈哉、方命圯族、岳曰異哉、試可乃已、帝曰往欽哉、九載績用弗成」とある「九載績用弗成」は疑問を挾む餘地無しとするも、その前段に何等の記載もなく忽焉として「帝曰吁咈哉、方命圯族」とあるのは、後人に種々の説はあるが概ね附會の説で、その眞意を解するに苦しむと共に、『尙書』のこの記載は、或る全體をなす物語の一部分のみが現はれてゐるのではないかといふことを思はしめる。然るに、舜典には共工の流、驩兜の放、三苗の竄と共に、「殛鯀于羽山」とあつて四罪一となつてゐる、他の三が極めて特殊なものであるだけに、そこに疑ひが深くなるを覺える。『史記』は『尙書』のよりもやゝかゝる點を詳述してゐるが、それとても要領を得ず、たゞ羽山に殛せられたといふ事については「鯀之治水無狀、乃殛鯀於羽山以死」と説明の數言を加へてゐるに過ぎない。併しこの説明は必ずしも問題の核心に觸

れたものではない。然るに『左傳』昭公七年の條を見ると「鄭子產聘于晉、晉侯有疾……今夢黃熊入于寢門、其何厲鬼也、對曰……昔堯殛鯀于羽山、其神化爲黃熊以入于羽淵、實爲夏郊、三代祀之晉爲盟主云々」とあり、『國語』の晉語にも殆どこれと同じことがある。『國語』には、この外魯語に「鮫洪水而殛死、禹能以德修鯀之功」とあり、周語に「其在有虞、有密伯鯀、播其淫心、稱遂共工之過、堯用殛之于羽山、其後伯禹念前之非度（下略）」以つて禹が成功することがあるが、共に解釋の端緒すら得難い困難な記事である。また『楚辭』の天問には「不任汨鴻、師何以尙之、僉曰何憂何不課而行之、鳴龜曳衡、鮫何聽焉、順欲成功、帝何刑焉、永遏在羽山、夫何三年不施」とあり、就中その「鳴龜曳衡、鮫何聽焉」に對して王逸は「言鮫治水績用不成、堯乃放殺之羽山、飛鳥水蟲曳衡而食之鮫何能復不聽乎」と注してゐるが、朱子はその集注に「鳴龜事無所見、舊說謂鮫死爲鳴龜所食、鮫何以聽而不爭乎、特以意言之耳、詳其文勢與下文應龍相類似、謂鮫聽鳴龜曳衡之計而敗其事」と云つてゐる。『楚辭』は一般に王逸の注に據るべきもの多く、朱注は寧ろ取るべからずと思爲されるもの尠くないが、その全體の意味はなほ明確となり難いとは云へ、この朱子の注は省みるに足るもので、私はこゝに速き上古に存した説話の斷片が現はれ、これを總じてこれらの物語の背後には神話や説話の分子が潜在するやうに思はれる。そして洪水説話の中心は治水といふことにあり、こゝに至つて満足が得られるので、鯀の失敗を禹が成功したといふところにこれらの説話の中心の意味があるのである。

なほ上に擧げた『左傳』や『國語』にある「今夢黃熊（能は熊と同じであるとされて居り、『説文』に既に熊屬

とある）入于寢門、其何厲鬼也」といふ夢についての事に子産の答に「昔堯殛鯀于羽山、其神化爲黃熊以入于羽淵、實爲夏郊、三代祀之」（『左傳』）「昔者鮫違帝命、殛之於羽山、化爲黃熊以入于羽淵、實爲夏郊、三代舉之」（『國語』晉語）とあるが、これが夢に關係ある説話である點、熊をや、廣義に取ると、思ひ當たるのは『詩經』の小雅にある「吉夢維何、維熊維羆、維虺維蛇、大人占之、維熊維羆、男子之祥、維虺維蛇、女子之祥」であつて、鯀を禹の先としたところから、上の夢を解く爲に強ひて「其神化爲黃熊」とし、後に推考を試みるやうに、鯀が魚であるとせられたところから「以入于羽淵」といふやうに水と關係あるものにせられたのでは無からうか。それが任昉の『述異記』になると「堯使鯀治水、不勝其任、遂誅鯀于羽山、化爲黃熊入于羽泉……黃熊即黃熊也、陸居曰熊、水居曰能」といふやうに發展して窮餘の説明が加へられるに至つたものかとも考へる。以上は甚だ未熟な考へであるが試みに臆測を述べて識者の叱正を待つこととする。また、晉の王嘉の『拾遺記』夏禹の條には「堯命夏鯀治水、九載無績、鯀自沉於羽淵、化爲玄魚、時揚鬚振鱗橫修波之上、見者謂爲河精、羽淵與河海通源也、海民於羽山之中、修立鯀廟、四時以致祭祀、常見玄魚與蛟龍跳躍而出、觀者而畏矣」と聊か詳しい説明がある。併し以上列擧したやうな記述を以つて鯀が如何なるものであるかを推斷するのは容易な業でないから、其間に何等かの暗示を得んがために今暫く鯀の文字を考へて見ると、鯀はまた鮫に作られてゐる。『説文』によると「鯀鯀魚也从魚系聲」とあり、鮫の字については古來の注などにも特に注意すべき説を知らないが、曩に崔適氏はその著『史記探源』夏禹の條に「集解諡法曰、受禪成功曰禹、案此言謬矣、禹之本義爲蟲名、猶鯀之本義爲魚

夔龍朱虎熊羆之本義爲毛蟲甲蟲之名也、受禪成功乃禹之勳業、豈禹之字義乎、若禹是謚、則鯀亦謚也、又將曰、方命圯族曰鯀乎」と云つてゐるが鯀の本義が魚であることに注意したのは因襲的な思想から見ると餘りに奇怪な解釋とも見へるが、一般に上代の記録の中には民間説話の要素などが種々の形で織り込まれてゐる事を思ふと決して擴くべきものではなく、私は寧ろこゝに解釋の端緒が見出されるのではないかと思ふのである。魚が水と離るべからざる關係にある事は今更いふまでもないから、恐らくそれに由來してであらう。後に二三の例を擧げる世界諸民族の洪水説話に於いても、魚が往々重要な役割を演じ、最も顯著な一例を示すならば印度に於ける Satapatha Brahmana の洪水説話の Gusha⁽¹⁰⁾ の如きは顯著な例で、上代支那の洪水説話の原形にも鯀と稱する魚が何等かの役割を持つてゐたのではあるまいかと考へられる。而して、其原形に近いものではないかと想像される説話は『拾遺記』にもあるが、『拾遺記』がかなり後世の新しいものであること、及び、その全體の記述が架空に屬するものが多いことなどには疑問の點が多く、爲めに輕々の論斷は警むべきであるけれども、もし後の世の記載にも民間説話として傳承された由來の古いものが記録せられる場合の尠からぬことが承認せられるならば、かの「鯀自沉於羽淵、化爲玄魚、時揚鬚振鱗、橫修波之上、見者謂爲河精、……常見玄魚與蛟龍跳躍而出」とあるのは、その由つて來る所の遠い説話ではないかと考へられ、鯀は何等かの形に於いて支那の洪水説話中の一要素であつた魚で、「化爲玄魚」といふのはたゞ本來の形をそのままに現はしたものでないかと思ふ。鯀即ち鯀の文字から「化爲玄魚」といふ説が出て來たと考へるよりも、説話を内容から見ても、かく考へて大過なしと信ずる。

私は更に上の考へを一步進めて、禹と鯀との關係に臆測を加へたいと思ふが、史的考察は史料の表はすところを忠實に解くを正道とし、苟くも推考を以つて史料を左右すべからずといふやうな嚴重な態度から云はば、或る判斷によつて、史料が表はす以上の解釋を試みる私の企圖は、説話の解釋に當つては止むを得ぬ方法であつても、聊か歩を邪道に踏み入れる感無きを得ないから、私は大方の叱正を得ば決して私見を固執する者でなく、寧ろより妥當なる解釋の速かに現はれんことを望んで止まぬのである。

『楚辭』の前段の續きに「河海應龍何靈何歷」とあるのに王逸は「禹治洪水時、有神龍、以尾畫地、導水所注、當決者因而治之也」と注し、『拾遺記』には「禹盡力溝洫、導川夷岳、黃龍曳尾於前、玄龜負青泥於後、玄龜河精之使者也」とある。想ふに神龍が「以尾畫地」たり、黃龍が「曳尾於前」などしたとあるが、鯀が洪水説話と關係ある魚であつたことが許されるなら、恰も『拾遺記』のいふ如く河精の如きものとして、治水に當つた説話が存在してゐたのではあるまいか。果して然りとせば「玄龜河精之使者」とあるのも思ひ當るところがあらう。然るに起源を異にし、政治道德的意味を豊かに持つ堯舜禹の屬性が結成されるに當り、偶々禹と洪水とが結びつき、ついでそれが固定し發達すると洪水説話に本有した魚の形の鯀は影を潜むるの餘儀なきこととなり、然もこれを無視するには餘りに強い傳承であつた爲、禹の父といふ形を取り、子たる禹が成功者としてその屬性を豊かにするに反して、父たる鯀は失敗者として「九載績用弗成」と云はれ、終に羽山に殛されるといふ事までに憫むべき方向に説話の展開を見、上に屢々引用したやうな形となつたのではあるまいか。かくて鯀が其屬性を變ずるに伴

つて帝王に關係の淺からぬ龍が、神龍とか應龍とかいふ形で古帝王たる禹の話に現はれ、その治水にある役割を持つに至つたものであらう。

なほ禹の治水の結果等については、人口に膾炙したことであるから、こゝには省略に従ふとして、以上上代支那洪水説話に關する二三の問題につき一應の解釋を試みたから、こゝに轉じてこれと世界の諸民族の洪水説話との比較を敢てして、漢民族の説話の本質を明かにする一助としたいと思ふ。

二 世界諸民族の洪水説話

最近 Folklore とか Legend とか Mythology とかの研究が勃興したにつれて、諸民族の説話も徴を穿ち細に入つて、検索が行き届き、洪水説話の記述なども決して寥々たるものではない。併し、それを當面の對象とした比較的廣汎に互る研究といはば、私の知る限りでは J. G. FRAZER 氏の勞作 Folklore in the Old Testament. Vol. I (1919) の Chap. IV, The Great Flood と Dr. Johannes Brem 氏の Die Sintflut in Sage und Wissenschaft (1925) の二つの著書を推賞したいと思ふ。後者に對しては後に所見の一端を開陳すべき機會があるから、今は前者につきその構想の概要を略説し、然る後その内容の要點を記述しよう。FRAZER 氏の論考は十九の節より成り、(1)序言、(2)バビロニア、(3)ヘブライ、(4)古代ギリシア、(5)歐洲諸民族、(6)ヘル

シア、(7)古代インド、(8)近代インド、(9)東方亞細亞、(10)インディアン諸島、(11)オーストラリア、(12)ニュー・グイニア、メラネシア、(13)ポリネシア、ミクロネシア、(14)南アメリカ、(15)中部アメリカ、メキシコ、(16)北アメリカ、(17)アフリカ、等各民族の洪水説話及び(18)洪水説話の地理的分布、(19)洪水説話起源論考がその内容を爲すものであり、各民族夫々に説話の變異をも出来る限り忠實に述べられてある。而して FRAZER 氏の所説にも必ずしも疑問を挟むべき餘地無しとしないが、かく廣汎に且つ精緻に考察してあるのは實に稀に見るところであるから、古今諸民族の洪水説話の内から、支那のそれを考究するに參考となると思しきものを摘記し、然る後 FRAZER 氏がこれに對し如何なる解釋を爲したかに及びたいと思ふ。なほ一説話が變異して種々の形で傳へられてゐるものは、最も根原的なものと思はれる説話を引用することとした。

さてバビロニアの洪水説話を知るには、最近遺跡の學術的發掘事業の進展に伴ひ、年代的に種々相異なる tablets が發見された中に Ashurbanipal H の Library より史料は重要視せらるべきもの尠くないが、FRAZER 氏の詳説する所に據れば、概ね断片的なものに過ぎず、説話の全體は知り難く、後世の所謂 Gilgamesh Epic はよく全體として一の説話を爲す。が、それよりも更に重要なものは、西曆紀元前三世紀前半に此の國の事を記述した Berossus の希臘記録であつて、その中に「バビロニアの tenth king Xisthrus—これは著者のギリシア譯の名にして Ashurbanipal Library より断簡にはバビロニア名 Atrakasis—の世に大洪水起るに先立ち、神 Cronus (原形は Ea であらう) が夢の告げにより大洪水が起つて、やがて人畜を破滅さすを曰ふ。依つて大船を造り、

家内知友と必需品を載せ、大洪水が起るや船出し、時日過ぎて一度び鳥を放ち遣りて空しく歸り来るを見、再度鳥を遣るに跛に土を附けて歸り着き、三度び目には歸り來らざるにより水面に陸の生じたるを察知し、漸く船を陸、それは後に山頂となりしところに著け、妻子等を陸に上げ、ついで大地を拜し、祭壇を設けた(下略)」とあり、これは洪水といふ事實から觀ればユーフラテスの氾濫がバビロニア人の思想を刺戟してゐた名残をとどめ、説話の内容から察すればヘブライのものの影響が豊かであるらしい。⁽¹³⁾

さてヘブライの洪水説話は『舊約聖書』の創世記によつて人々に親しまれてゐるかのノアの傳説で、こゝに縷説する要はないが、たゞ考察を試みるに必要なその要點だけを摘記して置きたい。

「エホバ人の惡の地に大なると其心の思念の却て圖維る所の恒に惟惡きのみなるを見たまへり。是に於てエホバ地の上に人を造りしことを悔いて心に憂へたまへり。……されどノアは義人にして其世の完全者なりき、ノア神と偕に歩めり。(中略)神ノアに言ひたまひけるは諸ての人の末期わが前に近づけり。其は彼等のために暴虐世にみつればなり。視よ彼等を世とともに剪滅さん。汝松木をもて汝のために方舟^{コフ}を造り、方舟の中に房を作り、瀝青をもて其内外を塗るべし、(中略)又方舟の戸は其傍に設くべし。下牀と二階と三階とに之を作るべし。視よ我洪水を地に起して凡て生命の氣息ある者を天下より剪滅し絶ん、地にをる者は皆死ぬべし。汝は汝の子等と汝の妻および汝の子等の妻とともに其方舟に入るべし。又諸の生物總て肉ある者をば汝各々其二を方舟に擧へいりて汝とともに其生命を保たしむべし。(中略)ノア、エホバの凡て己に命じたまひし如くなせり。地に洪水あり

ける時ノア六百歳なりき。ノア其子等と其妻および其子等の妻と俱に洪水を避て方舟にいりぬ。(中略)かくて七日の後洪水地に臨めり、ノアの齡の六百歳の二月即ち其月の十七日に當り、此日に大淵の源皆潰れ、天の戸開けて雨四十日四十夜地に注げり、此日にノアとノアの子セム、ハム、ヤベテおよびノアの妻と其子等三人の妻諸俱に方舟に入りぬ。彼等および諸の獸其類に従ひ諸の家畜其類に従ひ、都て地に匍ふ昆蟲其類に従ひ諸の禽皆其類に従ひて入りぬ。即ち生命の氣息ある諸の肉なる者二宛ノアに來りて方舟に入りぬ。(中略)洪水四十日地にありき水瀾浸りて大に地に増し方舟は水の面に漂へり。水甚大に地に瀾漫りければ天下の高山皆おほはれたり、凡そ地に動く肉なる者鳥家畜獸地に匍ふ諸の昆蟲および人皆死に、斯地の表面にある萬有を盡く拭ひ去りたまへり。唯ノアおよび彼とともに方舟にありし者のみ存れり。水百五十日のあひだ地にはびこりぬ。

神ノア及び彼とともに方舟にある諸の生物と諸ての家畜を眷念したまひて神乃ち風を地の上に吹しめたまひければ水減りたり。亦淵の源と天の戸閉塞りて天より雨止ぬ。是に於て水次第に地より退き百五十日を経てのち水減り方舟は七月に至り其月の十七日アララテの山に止りぬ。」

「かくて先づ鴉を、ついで鴿を二度放ちて陸の乾ける有様を観察し六百一年の二月の二十七日に至りて神の御舌のまにノア方舟を出で、やがて神の祝福を得て増殖する」といふのがこの説話の筋である。⁽¹⁴⁾この説話は一種の罪障觀や、世界終焉の思想や、神の恩寵に依る再生等の諸觀が結合してかゝる形の物語となつたものであらう。

希臘の洪水説話は著名な Mythographer たる Apollodorus の記述が完備した形に Prometheus の息 Deu-

calion は Puthia の近隣に君臨し Pyrrha と婚した。然るに Zeus が Bronze Age の人を破滅せしめんとした時 Prometheus の御告により Deucalion は箱舟を造り、その中に彼の妻を始め一切の必需品を入れた。時に Zeus は天より大雨を降り注ぎ、ギリシアの大部を洗ひ去り、高山に群る僅小の人々のみ助かつて他は凡て死滅し世界は覆没した。併し箱舟の中にある Deucalion は大海の面に浮うかこと九日 Parnassus に著き、雨の止むを待ち陸に上りて Zeus の神を祭祀した。やがて Zeus の命により Hermes が石により男女を作り、人世に増殖する」といふ説話⁽¹⁵⁾が述べてあるが、これは Frazer 氏の考説に従へば、ギリシアにも或る形の洪水説話のあつた所へ、後世猶太或は巴比倫よりの影響を受けてかゝる形に結成されたものであらうといふ。

以上舉示した説話は、概ね直接に間接に舊約に現はれた如き洪水説話の影響を豊かに受けてゐるもので、これは明かにその説話の傳播せるものと認むべきである。

次にベルシアに存するものは、Angel Tistar の説話に關聯し、連日大雨して水滔々として地を蔽ひ萬物多く死滅した事があつたが、其毒物流れて今に及び海水を鹽分にしてゐるのであるとあるが、これは Frazer 氏も既に注意した如く洪水説話と海水の鹹味の説明説話との結びついたものである⁽¹⁶⁾。また印度に於いては、洪水説話は Satapatha Brahmana に初めて現はれて、曰いふ。「Manu が水もて其手を清めんとした時魚ありその手の中に入つた。魚の云ふやう『御身我を飼養したまへ、然らば我汝を救はん』と『何より我を救ふにや』と尋ねれば『やがて大水ありて、凡ての生きとし生ける者を運び流すべし、其時我れ汝を救ふべし』と。『然らば我れ如何に汝

を飼養すべき』、魚の曰ふには『我れ幼くして形小なる間は危難多し。願くば初め我を壺の内に養ひ、やゝ長ぜば穴を堀りて、その中に飼ひたまへ。更に長ずるに及び初めて海原に放ちたまへ。時既に我危害を避くるの力を備へ得ればなり。』この言葉に従つて心を懸けてこれを養ひ海に放てば、やがて魚の中の最大に長じて Chasita となつた。この魚嚮に海に放たるゝ際『これこれの年大水あるべければ豫め舟を用意し置き、洪水起ればその舟に乗り移り我の來るを待ち救はれよ』といふ。凡て魚の言に従つて舟を造つて置くと正に大水が出たから、舟に入つた。然るに果せる哉、魚波間に現れ出で、舟の綱をその角に結び北の山を指し只管に泳ぎ行きていふには『舳網を木に結びてこの山上にあれば水網を切ることあらじ。水の減ずるにつれ、汝山を降れ』と。また凡てその言に従ふ。大水は凡てを溺死せしめたが、やがて水減じて Manu のみこゝに安く居た⁽¹⁷⁾といふのであつて、この説話要素は魚といひ高山といひ一般説話の心理に附合し、また北山をいふなど印度の地理を反映した興味入深きものがある。なほ此外に Frazer 氏は Mahabharata にある説話を擧げてゐるが、それは明かにこの Satapatha Brahmana の説話が一層發達したもので、大海に押し流されて困窮の極にある時、かの魚大角に舳網を結んで Himavat の最高峯に達し、今その峯を Naubandhana (The Binding of the Ship) と名づける⁽¹⁸⁾などといふところに説話の進展した形を示してゐ、これはまた Pitras の中にも繰返されるところである。

以上の事例は、世界史上に於いて漢民族と共に古代の文化民族とせらるゝ者の説話を述べたのであるが、ヘブライの説話及びそれに直接間接に關係ありと思爲される説話は、罪障に伴ふ世界終末觀と神の慈恵による更生が

説かれてある點に注意を惹く特徴があるので、これを聖天子の治水をいふ支那民族の洪水説話と比較すれば、洪水をいふ所には一致點を有するもの、説話の表現するところは根本的に相違してゐることを認めねばならぬ。その點は印度の説話も神の啓示を力説してゐて、支那の説話との相違は明瞭である。

是に於いて、私はなほ進んでかゝる説話の起源についての説を考へるため、既に HARRIS 氏が或は旅行者探検家の記述に據り、或は學術的調査者の報告に基づき、詳説して居られる歐羅巴大陸、亞弗利加大陸、亞米利加大陸或は大洋洲の諸島、インディアン諸島の未開民族の間に存する種々な形に於ける洪水説話も、それがかやうな研究、特に説話の心理的解釋を試みる上に絶好の資料であるのはいふまでもないことであるから、一應略説すべきやに考へるが、考説が煩瑣に陥る弊無しとしないから、今は省略に従ふこととし、特に亞細亞の諸民族、就中支那大陸周邊の民族の間に存する洪水説話を一瞥して置きたいと思ふ。

中部印度 *Bhilis* 族の間に存する説話には、太古に信心の念篤き或る人が、その衣を川に濯いでゐると魚現はれて、やがて大水の來るべきを警告し、逃れんと思ふならば豫め大なる箱を用意し置きて、水のまに／＼浮ぶべきであるとつけ加へたので、其人は言のまゝに箱を用意し彼の妹と鶏とを共に閉し入れた。程なく洪水起りて凡てが水に吞まれた。程經て、*Rahia* は使者を遣はし水の有様を視察せしめた。其使者洪水の水面を見る時に鶏鳴を聞き、それに促がされて終に箱を見出したので、其由を報告に及ぶと、*Rahia* その箱を取りて己れの許に齎さしめ、調べみればこの人は魚の豫告により助かつたものであつた。而してこの人 *Rahia* の許しを得て、その妹と

婚し世界の人の原始となり、*Bhilis* 族は正にその後裔である⁽¹⁵⁾といふ。この説話に對し *FRAZER* 氏は恐らくは西方の影響を受けたものであらうと云つてゐるが、さもあるべきである。同じく中部印度 *Rajpur District* の *Dra-vidian* の小部族 *Kamars* 族は「往昔神男女を作り一男一女を産んだ時、神は己れを怒らせた豺を溺れしめん爲め、世界中に洪水を起した。年老いた夫婦は、大水の來るを知つて、その一男一女を水治まるまでの食料を入れた *a hollow piece of wood* に閉ざし入れ押し流すに、水來りて二十年、萬物皆溺死した。時に神二羽の鳥を作り豺の生死を視せしめたが、たゞかの木が水上に浮ぶのみで他の凡ては溺死してゐた。神水を治めかの木の中より二兒を出し、その二人が婚して子を産むごとに異なる階級の祖とした」といふ説話を傳承してゐるが、*FRAZER* 氏は此説話中に古來の分子を認めつゝ、「二鳥といふは舊約聖書の鴉と鳩に當り、近世に至り宣教者より受けた影響であらう⁽¹⁶⁾」と云つて居られる。

その他 *Assam* 方面の諸族中には、太古に人が神に對する敬信を怠つた爲め、神は洪水を起し凡てを破滅させようとしたが、たゞ一對の夫婦を *Singabhum hill* の上に助け上げ、これが今日の人々の起源を爲すといふ説話や、水の神が *Ngai-i* といふ者と戀に落ちたがある時女が逃げ去つたのでそれを怒り、終に *Phun-tu-buk* 嶽の頂上で全人類を大水に溺死せしめようとして刻々に水を地上に増した。人々はこれに苦しんで、終に *Ngai-i* を捕へて大水の中に投じたので漸く水は減じ安穩なるを得たといふ説話の存する事が報せられてゐる⁽¹⁷⁾。なほ *Malay* 半島 *Benua-Jakun* の一例を挙げれば、地は初め固からず水の深淵を蔽ふ單なる皮であつた。昔神 *Pirman* が

此皮を破つたので、世は大水に溺滅された。たゞ Pirman は一對の夫婦を作り、それをすつかり蔽つた木の舟に入れ押し流したので、水のまに／＼大水の中に浮び暮した後、漸く乾ける大地に降り立ち、やがてそれが原人となつて今の世の人々が現はれたといふ説話が傳へられてゐる。⁽²²⁾更に Pirina 地方の Karens 族及び Chingpaws 族の例を見ると、往古地表に大洪水の起つた時たゞ兄弟二人が筏に乗り出して生命は助かつたが、やがて水は天までとゞき止むなく天空から下降してゐる一本の橡果樹のあるのを見出し、それに飛びついて生命を保つたといふもの、開闢の時の大洪水に際し兄 Pawpaw Nan-ohang とその妹 Chang-ko は大なる舟にてその身を救ひ、雨風の中に日を過しやがて伴ひ來つた雞と楊枝魚の各九匹を一日に各一匹づつ派して、その鳴き聲と岩を打つ音とを聞き、最後の日に陸の安きを知つて地に上つたといふ説話があり、支那南部の Lolo 族の説話中にも洪水説話と思しきものがある。

轉じて亞細亞北部の民族を見ると、Kamohadales は、往古世界は洪水に蔽はれ、人々は筏にその身を救はんとして水に浮んだが、押し流されて大海原に出ることを憂へ、碇代りに大石を結んで下に降したがなほ流されて水面を彷徨ひ、やがて水減じた時、その人々を載せた筏は高き山頂に止まつてゐたといふ説話を持ち、蒙古族の間には、往昔大地は大洪水に浸されたが、沙漠は正にその痕跡であるといふ説話⁽²⁴⁾を持つてゐる。更に眼を東に放つて朝鮮を見ると、今日も民間の説話としてそれがあるやうであつて孫晉泰氏の調査の結果を見ると、「仙女が天降つて或る桂の大樹の精に感じて一男を産み、その子が七つ八つの頃その母は昇天した。或る時連日雨降りつゞ

け、風さへ加はり洪水滔々として桂の大木に及んだ。その時桂の樹はその子に向つて「自分は今暴風雨の爲め倒れようが、もし倒れたら、お前は直ぐ背に乗れ、さうしたら助かるだらう」と云つた。やがて暴風と共に大水がやつて来て大樹を倒し、子は樹なる父の教の通り大木に乗つて幾日も幾日も波のまに／＼流れた。水の面で蟻や蚊共を助け終にこの木は流れ流れて一つの島に辿り着いた。それは白頭山のやうに高い山の最高峰で、程なくその山の近くの、とある老婆に助けられ、雨が止んで洪水も引き世の中に人といふ者は一人も残らず水のために絶滅し、こゝに残つた人こそ今の人間の祖先である。」といふ説話及び「昔、大洪水の出たことがあつた。長い間の大雨と津浪のため、この世界は總て海になつてしまひ、生物は勿論のこと、人間といふ人間も全く絶滅してしまつた。その中たゞ二人の兄妹が生き残つて高い山の上に漂着した。大きい樹に乗つてゐたのである。洪水が引いて世界はもとの通りになつたが、人間が一人も遺つてゐないので、彼の兄妹が結婚をしないと人間の種は絶へてしまはなければならなかつた。けれども兄妹で結婚をする譯にはゆかんで、二人は遂ひに老いばれて髪の毛が脱け始めた。その時一匹の虎がどこからか一人の男を連れて來たので、妹はその男と結婚して子を産み、遂ひに今日の人類の祖先となつたともいはれてゐる」⁽²⁶⁾といふ種々の説話がある。嘗て白鳥博士は東洋協會調査部の講演會に於いて「日鮮交通の古傳説について」と題する講題を掲げ、素戔鳴尊の神話を解釋せられた際、八咫遠呂智と櫛名田比賣（即ち奇稻田姫）の説話を肥の河の洪水が、稻田に氾濫する説話とせられたが、もしこの解釋が一般に容認せらるゝならば、我民族もまた上古から洪水説話を持つてゐたと云へよう。

以上その概要を述べた諸民族の説話の例は、殆ど凡て FRAZER 氏の舉示せられたものであるが、豊富な事例蒐集、その驚く可き業績に對して私は常にこれを謳歌し、讚辭を惜しまぬ一人である。併し、一層學術的に嚴正な取扱ひ方から云ふならば、同一事例を集むるに當り或は材を古代民族の古記録に採り、又は後代文化民族の比較的新なる記録に取り、或は未開民族の例の如きも時に民俗研究者宣教師の記載に據り、或は旅行者探検家の旅行記に取り、其熱心と努力と、またかゝる蒐集が現在學界の程度を以つてしては止むを得ざるものなる事も是認するけれども、古代文化民族或は古代の未開民族と、世界全般の文化が著るしく躍進して、その影響が不知不識各地に傳播せる今日の未開民族との諸例を、その間に何等の檢索をも加ふる事無く、一樣に取扱ふのは聊か非學術的であるとの非難を免れないであらう。然も私は更に同一の過誤を繰返し、試みに朝鮮の説話は現在に行はるる民間説話を採り、我國の例は上代の記録よりこれを察したのであつて、非學術的なる謗はまたこれを甘受せねばならぬが、かゝる作業を敢てするのは、これを以てして、洪水の説話が如何に世界の諸地方に普遍してゐるかを明かにせんと勉めたので、その點につきては讀者の諒とせられん事を切望する。

なほこゝに言及しようと思ふのは Johannes RIEM 教授の Die Sinfut in Sage und Wissenschaft の著述で、インド、ゲルマン、西部アジア、マライ、アウストラリア、南洋諸島、アフリカ、北アメリカ、中部アメリカ、南アメリカ各地につきその例を擧げ、更に RIEM 教授はかゝる事象を解釋して、地質年代に於いて地球の經過した或る時期に地表が水に蔽はれた事實を引證し、洪水説話にはこの事實が反映してゐるのであるとの主張に

與してゐる。(26) けれども地質年代に於いてかゝる現象の時期を經過したとするも、それが僅々數千年の民族説話に現はれてゐるとは輕々に斷すべきものでなく、かゝる地質年代上の時期と、諸民族の説話の事實とは截別して考ふべきであつて私はこの所説に組するを肯じない。然らば上に縷説したやうな事實に對し FRAZER 氏は如何なる解釋を與へたかといふ事を考察せねばならぬ。が、そこに舉示された多數の事例はこれを虚心に讀過する時、看過すべからざる傾向は未開民族の事例までが餘りに舊約の説話に近似であるのに驚かされることである。これは私の見るところでは、説話の採集者は宣教師もしくは舊約の説話に親しみある歐洲人であつたところから、不知不識素朴な説話に表現上の潤色を加へられたのではないかと思ふ。併し、これらの點を是認するもなほ FRAZER 氏の解釋はこれを参考し、信頼を拂ふに足るものと確信するが故に、私は次にそれが紹介を敢てし支那説話の解釋の一助としようと思ふのである。

FRAZER 氏は世界古今諸民族間に存する洪水説話の例を委細に記述されて後、其地理的分布の状態を概観され、かゝる説話を一元的に觀察すべからざるを暗示されたが、私は今この説話が何に由来するかを明確ならしめんが爲めに、相似の事實を紹介して FRAZER 氏がその解釋に達する過程を説明したので、私の企圖の要點はそこにあるのであるから、地理的分布の概観は要すれば讀者が原著につき閱讀されん事を望んで、たゞちに同氏のその起源に對して提示された説を述べれば、FRAZER 氏は、従來行はるゝその見解、即ち或る論者は地表が洪水に蔽はれ凡ての者が絶滅したといふ事を現實に生起した事實として、陸地殊に奥深き沙漠や山嶺より化石の發見せられ

ることを以つてそれを説明しようとしたり、また他の論者はこの説話を、日、月及び星の説話であるとの所見を開陳したが、これらは何れも承認し難き所以につき我等を首肯せしめ、ついで、かゝる事實は斷じて實際の出来ことではないと明言されてゐる。何となれば近世に著しく進歩した地質學の教ふる所に従へば、如何なる點より觀察するも人類が地表に現はれて後には、かゝる現象が地球上に起り得ぬことを立證してゐるからである。然らばかゝる洪水説話は、空想的説話といふ莢殻中に、真理の核が入つてゐるもの、即ち或る地方に實際に起つた洪水の記憶に基づき、それが時と共に空想的分子を附加して擴大し、終に世界中の災厄といふ形にまで發達したのである。實に諸民族の間で、その各自が體驗した恐るべき洪水の記憶を子孫に語り傳へるのは當然で、然も歴史時代に恐るべき洪水のあつたのは明瞭な事實であるから、そこにこの由來は存するのである。而して、その原因は津浪、降雨その他による増水であり、それを證する實例は海洋に面する諸民族の間にも求められ、またペロニア及びヘブライの説話もティグリス、ユーフラテスがアルメニアの山々の雪解及び年々の降雨による氾濫に由來する事も疑ふ餘地無き事實である。

これを要するに「世界諸民族の洪水説話は津浪、大雨その他による増水氾濫の事實が發展したので、換言すれば事實の所傳といふ體の上に *Myth* の厚き衣によつて裝はれたので、その起源は如何に古く見ても、數千年の昔を出でぬものであらう」と論ぜられた。⁽²⁸⁾此の所論は一々肯綮に當り、信憑に値すると確信する私は *universal deluge* すらこれを以つて解いて太過ないのであるから、前に述べた如き漢民族の洪水説話は、正にその民族の

經驗した特に黄河の氾濫に由來するものと信じて疑はないのである。

私は曩に漢民族洪水説話の展開につき鄙見を開陳し、ついでその由來を確實に究めるために世界諸民族の洪水説話を繙説して参考とし、以つてその説話の由來は漢民族が黄河を中心としてその生活を進展した古代よりの、黄河の洪水、氾濫の事實にあることを述べた。換言すれば、一般に洪水説話は洪水の事實に由來があり、中には漢民族のその説話は、黄河の流域に屢々起つて民人を苦めた洪水の事實に由來することはほど明瞭な事實として不可なからう。が、一步進んでその推考が一々史料に就いて考察を試みた結果かといふと、それは必ずしもさうではないのであるから、これを古來の記録について一應討究を試みることも、嚴格に考へると必要なことでもあり、また徒事ではないであらう。かく考へて、史料の蒐集を試みた結果が、この小考の末尾に附した附録であつて、これによつて以上の推考は一層確實になつたと云つてよからう。

元來洪水は降雨に伴ふ増水、氷雪の急激なる融解により、水流の自然作用によりて形成せられた水路がその水量を排流するを得ざる場合、もしくは防水堤の破損、地震による水路の激變、波濤に伴ふ海水の浸入等に基づくこと地理學の立證するところであるが、之を附録に擧げた支那の古記録について大體の觀察を試みると、その原因としては、或は連雨霖雨といひ、或は暴雨大雨といひ、或は單に雨と記るして降雨を原因とするもの、三百餘の洪水の事例中にあつて實に六十餘の例を算するに過ぎず、他は海溢或は濤水としてその原因を擧げたるもの二十數例、山水と稱するもの九例、地震によるもの四、五例、計百餘の例を除いてはその記述粗慢で原因を明かに

するに足るものが無いのである。併し、この考察によつても支那洪水の大部分が、降雨に伴ふ増水をその原因とするものである事だけは推知せられよう。

次に記録に現はれたところは、一小部分の出水より、部落を浸し、都邑を襲ひ、耕田を流す大洪水に至るまで、其被害の程度を顧るところなく苟くも水とし云はば之を記録に上してあるが、その點は今暫くこれを措いて、洪水は江淮河漢等の大河川につき何れが多いかといふに、附録に示す記述中、渭水に關するもの十、洛水に關するもの十六、黄河に關するもの實に百二十八、黄河系百五十四例に上るに對し、漢水七例、揚子江八十二例、計揚子江系八十九例、その他淮水二十八例、閩江一例（不明のもの實に五十七例）にして、黄河の氾濫が、古來如何に漢民族を悩ましたかを具體的に知り得ると共に、揚子江よりの被害また尠からぬを思はしめるのである。

更に、記録に現はれたところで、大水が年の何月に多いかの概數を調べると、三百四十二例中單に秋とあるもの二十八例、夏十五例、春冬各二例、正月四例、二月十一例、三月九例、四月十三例、五月四十八例、六月六十例、七月五十二例、八月三十四例、九月二十五例、十月八例、十一月二例、十二月七例、單に是歲とあるもの二十二例の結果を得、五六七の三ヶ月が遙かに全年の半數を越えてゐる。以上の數字は大體の概數を示したに過ぎぬ、がそれでも洪水現象の考察には參考に値すると思ふ。言ふまでもなく、洪水は漢民族の、或は王朝の重大事となる場合も尠くないから、こゝにその被害につき、また被害地に對して貢租を免じたり、特に給賜せられたことなどもあるが、これは別に考ふべき問題として敢て省略に従つた。

なほ上に述べ來つた洪水の事實について Prof. Co-ching Chu の *Climatic Pulsations during Historic Times in China* と題する論考が既に公にされてゐる⁽²³⁾、唐以後歷朝洪水の度數表や一世紀割の洪水省別表なども出てゐる、作製の史料たる『古今圖書集成』の取扱ひ方、省別等に疑問の點も無いではないが、後者の内六百五十八例中、河南の百七十三、直隸の百六十四、江蘇の百五十一、山東の百十八、安徽の百五十五、浙江の百〇四の數字など注意を惹くものがある。また、洪水の被害が如何に大なるかについて、亞米利加地理協會の *Special Publication* である W. H. Mallory, *China: Land of Famine* に近時の事例が續説して裨益を得るところ蓋し些少でない⁽²⁴⁾のである。

これを要するに、歴史時代に於ける洪水の惨害は極めて多く、中には黄河より受けるところ至大で、或はその浸害に民人を苦しめ、飢饉の大なる原因となり、或は時に王朝衰亡の遠因、革命の由因ともなつたことは大體明瞭となつたが、この確實な史實より逆推して、黄河の縁邊にその農業生活を展開した原始漢民族が、如何にその浸害に悩まされたかは全然疑ふ餘地なき事實としてよからう。然らば、その事實が、深くこの民族の腦裡を刺戟する問題であり、且つ、その治水が如何に重大な問題であつたかを思ふならば、極めて幼稚な説話の形に於いて、原始漢民族の間に洪水の恐るべき事が語り繼がれ、やがてそれが帝王の治水説話として知識ある人々の間に重要視せられ、禹の功業として上代記録に主要なる位置を占めるに至つたことも推知せられよう。

(1) 高木敏雄氏『比較神話學』第四章洪水神話、第一節、支那洪水神話の英雄(二二一—三二六頁)、第二節、洪水神話
上代支那の洪水説話について

の比較(二二七—二三五頁)

- (2) 「藝文」第四年第一號(大正二年一月號)所載。
- (3) 玄珠氏『中國神話研究ABC』下、第七章七八頁以下参照。
- (4) Henri Maspero, *Légendes Mythologiques dans le Chou king*. (*Journal Asiatique*, Janvier-Mars, 1924) pp. 47—51.

(5) 以上は淺見な私の見聞中のもの重要な一二を挙げたに過ぎないが、この外にも單にその事實だけを述べたものは多い。が多少共解釋に論及してゐないものはこゝに挙げる要はないと信じて省略した。

(6) 白鳥庫吉博士「尙書の高等批評—特に堯舜禹について」(『東亞研究』第貳卷第四號、明治四十五年四月一日號所載)

(7) 白鳥博士「支那古代について」(『史學雜誌』第四拾壹編第一號)一二七—一三〇頁、彙報欄、及び白鳥博士「支那古代史の批判」(野原學士記)(同誌同編第八號一一—一三頁、内國史界欄——東洋學講座)参照。

(8) 禹の世系として『山海經』海內經には「黃帝生駘明、駘明生白馬、白馬是爲鯀、鯀復生禹」とあり、緯書『通甲開山圖』などには「古有大禹、女媧十九代孫、帝三百六十歲入九。山仙飛去後三千六百歲云々」といふ空想化したものがある。

(9) 段玉裁の注には「禹父之字古多作鯀、作鯀禮記及釋文作鯀、黃韻曰禹父鯀、尙書本作鯀按鯀乃鯀誤」とある。なほ『説文』に「鯀魚也、从魚衆聲」とあつてやはり魚である。なほ魚について思ひ當るのは『莊子』逍遙遊の「北冥有魚、其名爲鯀、鯀之大不知其幾千里也」であつて鯀、鯀、の現在音は共に $\text{K}^{\text{h}}\text{u}$ で同一であるから何等か關係があるものかとも一應考慮したが、何等根據となるべき點は見出されないので、關係づけるのは無理かと思ふ。

- (10) J. G. Frazer, *Folklore in the Old Testament*. Vol. 1, pp. 183—184.
- (11) Frazer, *op. cit.* Chap. IV, *The Great Flood*. pp. 104—361.
- (12) 上の書は Richard Andrew, *Die Flutsagen*. (1891) pp. 182 に據るところが多いので、此の書の一讀を欲したが、中々に得難い書で見出すことが出来なかつた。(本稿を草し終つて後、版元より手許に届き忙手一閱したが、それによつて補正を遂げる餘裕がないから、それは別の機会に譲ることとする)
- (13) Frazer, *op. cit.* pp. 107—125.
- (14) Frazer, *op. cit.* pp. 125—146. にも論ぜられたところがあるがこの引用は『舊約聖書』創世紀、第六章に據つた。
- (15) Frazer, *op. cit.* pp. 146—149, 153—155.
- (16) Frazer, *op. cit.* pp. 179—182.
- (17) Frazer, *op. cit.* pp. 183—184.
- (18) Frazer, *op. cit.* pp. 185—187.
- (19) Frazer, *op. cit.* p. 193.
- (20) Frazer, *op. cit.* p. 195.
- (21) Frazer, *op. cit.* pp. 198—199.
- (22) Frazer, *op. cit.* p. 211.
- (23) Frazer, *op. cit.* p. 208.
- (24) Frazer, *op. cit.* p. 216.
- (25) 孫音泰氏『朝鮮民譚集』二四—二九頁。

- (26) Johannes RIEW, Die Sintflut in Sage und Wissenschaft. (1925) ss. 177—178.
 - (27) FRAZER, *op. cit.* pp. 332—338. § 18. The Geographical Diffusion of Flood Stories.
 - (28) FRAZER, *op. cit.* pp. 338—361. § 19. The Origin of Stories of a Great Flood. 卷ノヤ○ pp. 359—361 参照。
 - (29) The Geographical Review. Vol. No. pp. 274—282.
 - (30) W. H. MILROY, China: Land of Famine. Chap. 11, Natural Causes of Famine. pp. 45—58.
- 追記 先頃東洋文庫の石田主任の御厚意により、「史學年報」第二期の願讀剛氏「洪水之傳説及治水等之傳説」(六一—六七頁)に、かなり豊富に史料の輯録してあるのを知り、啓發せられるところ尠くなかつた。この種の問題に心を傾けられる士は、その史料をも参照せられ、私のこの未熟な考察を修正せられんことを切望して置く。

附録 前漢より唐末に至る洪水年表

- 一 本表は最初試みに『古今圖書集成』庶徵典水災部に據つて作つたが、その記事を正史に當つて見ると、或は本紀の記事を取つて他のものはこれを捨て、或は五行志其他を取つて本紀を捨て、且つその字句の如きも勝手に取捨してあるの
で、本表は一々原典に就いて正確に作つた。
- 一 上代の文書に現はれた大水の記事には、災異思想に基づき作爲されたものがあるやに思はれるが、その檢出は困難であるから、本表には苟くも洪水に關する記事は凡てこれを載録することとした。
- 一 日の干支は特に必要ある場合の外これを省略した。
- 一 出典は()を用ゐ、同一の事實が他の場所に現はれたものを挙げるには「」を用ゐ、其出典また()に據つた。なほ記述が全然同一にして載録の必要無しと認められた場合には、たゞその所在を()を以て示した。卷數は初見の時のみにこれを擧げ、以後は省略に従つた。

帝王名	前漢	高后	文帝	武帝	元帝	成帝	陽期	河平
生起ノ年	三	四	八	一二	後三	元光	元鼎	元封
西曆	185 B.C.	184	180	168	161	138	132	115
月	夏	秋	夏	十二月	秋	春	夏	四月
摘要	江水漢水溢、流民四千餘家〔前漢書本紀〕〔漢中南郡大水〔同書卷二七五行志〕〕	河南大水〔五行志〕	漢水南郡水、復出流六千餘家、南陽沔水流萬餘家〔五行志〕	河決東郡〔本紀卷二九、溝洫志〕	大雨晝夜不絕三十五日、藍田山水出流九百餘家、壞民室八千餘、所殺三百餘人〔五行志〕	河水溢于平原、大饑人相食〔本紀〕	河水決濮陽地郡十六〔溝洫志〕	大水、關東饑死者目千數〔本紀〕
摘要	關東大水流民〔本紀〕	遺光祿大夫博士等土人行擊颶河之郡水所毀復、其爲水所流壓死〔本紀〕	關東大水流民〔本紀〕	關東大水流民〔本紀〕	關東大水流民〔本紀〕	關東大水流民〔本紀〕	關東大水流民〔本紀〕	關東大水流民〔本紀〕

帝王名	哀帝	王莽	後漢	光武帝	明帝	和帝	安帝	熹帝	永初
生起ノ年	鴻嘉	始建	建武	永元	永平	永元	延平	永初	永初
西曆	7. 17	11 A.D.	28	31	32	34	35	54	55
月	秋	秋	六月	秋	五月	五月	秋	五月	六月
摘要	渤海清河河溢〔本紀〕	詔曰：河南潁水郡水出流殺人民敗壞廬舍〔本紀〕	河決魏郡	東郡以北傷水〔後漢書卷二五、五行志〕	連雨水〔本紀〕〔六月戊辰雒水盛溢至津城門、帝自行水弘農都尉治折爲水所漂殺民溺、傷稼壞廬舍〔五行志〕〕	是歲大水〔本紀〕〔建武八年間郡國七大水〔五行志〕〕	大水〔本紀〕	大水〔本紀〕	京師及郡國七大水〔本紀〕
摘要	郡國十四雨水〔本紀〕	郡國九大水〔本紀〕〔元年七月郡國大水傷稼〔五行志〕〕	京師大水：冬十月五州雨水〔本紀〕〔京師大雨南山水流至東郊壞入廬舍〔五行志〕〕	舞陽大水〔本紀〕〔潁川大水〔五行志〕〕	郡國三十七雨水〔本紀〕〔延平元年五月郡國三十七大水、傷稼〔五行志〕〕	六州大水、冬十月四州大水〔本紀〕	是歲郡國四十一雨水、或山水暴出〔本紀〕〔是年郡國四十一水出漂沒民人〔五行志〕〕	京師及郡國四十大水〔本紀〕〔二年大水〔五行志〕〕	京師及郡國四十大水〔本紀〕〔二年大水〔五行志〕〕

上代支那の洪水説話について

晉武帝		秦始		威寧		大康		
四	五	七	元	二	四	二	四	
268	269	271	275	276	277	281	283	
九月	二月	六月	九月	七月	六月	七月	七月	
青徐兗豫四州大水、伊洛溢合於河(晉書卷三、本紀)〔青州徐兗豫四州大水(晉書五行志)〕	青徐兗三州水(本紀)	大雨霖伊洛河溢流居人四千餘家殺三百餘人(本紀)〔大雨霖河洛伊沁皆溢殺二百餘人(五行志)〕	徐州大水(本紀、晉書五行志)	河南魏郡大水殺百餘人：閏月荆州五郡水流四千餘家(本紀)	〔河南魏郡大水殺百餘人：閏月荆州五郡水流四千餘家(五行志)〕	益梁八郡水殺三百餘人沒邸閣別倉(本紀)〔益梁二州郡國八郡水殺二百餘人(五行志)〕	荆州大水(五行志)	兗豫徐青荆益梁七州大水傷秋稼(本紀)〔始平郡大水青徐兗豫荆益梁七州又大水(五行志)〕
荆揚郡國二十皆大水(本紀)〔司冀兗豫荆揚郡國二十大水傷秋稼屋室有死者(五行志)〕	江夏泰山水、流屠人三百家(本紀)〔泰山江夏大水泰山流三百家殺六十餘人江夏亦殺人(五行志)〕	兗州大水：是歲河南及荆州揚州大水(本紀)〔十二月河南及荆州揚州大水(五行志)〕	郡國五大水(本紀)〔郡國四大水、是月南安等五郡大水(五行志)〕	郡國十大水、壞百姓廬舍(本紀、五行志)	郡國八大水(本紀、五行志)	齊國大水(本紀)	郡國八大水(本紀、五行志)	

惠帝		懷帝		元帝		明帝		成帝	
二	四	五	六	八	元	元	元	元	元
292	294	295	296	298	301	302	310	320	326
五月	五月	五月	五月	五月	五月	五月	五月	五月	五月
有水災(五行志)	蜀郡山移淮南壽春洪水出、山崩地陷壞城府及百姓廬舍(本紀)	是歲荆揚兗豫青徐六州大水(本紀)〔五月潁川淮南大水六月城陽東莞大水殺人荆揚徐兗豫五州大水(五行志)〕	荆揚二州大水(本紀、五行志)	荆豫揚徐冀等五州大水(同上)	南陽東海大水(五行志)	兗豫徐冀等四州大水(本紀卷四、五行志)	大水(本紀卷五)〔江東大水(五行志)〕	大水(本紀卷六、五行志)	大水(同上)
荆州及丹陽宣城吳興壽春大水(五行志)	京師大水(本紀)〔丹陽宣城吳興壽春大水(五行志)〕	大水(本紀卷七、五行志)	京師大水(本紀)〔京都大水(五行志)〕	會稽吳興宣城丹陽大水(本紀、五行志)	大水(本紀、五行志)	長沙武陵大水(同上)			

上代支那の洪水説話について

陳	北魏	太宗	世祖	高宗	顯宗	高祖			
永定二	天賜三	泰常三	延和元	和平五	皇興二	太和元			
558	406	418	432	464	468	477	478	533	520
八月	八月	三月	六月	七月	二月	十一月	十二月	五月	七月
丹徒蘭陵二縣界遺山側一因濤水涌生沙漲周旋千餘頃(陳書卷二)	霖雨、大震山谷水溢(魏書卷一二、靈徵志)	北巡自參合跋東過蟠羊山大雨暴水流輻重數百乘殺百餘人(魏書卷二本紀)(北史卷二)以范陽去年水復其租稅(魏書本紀)(以動海范陽郡去年水復其租稅(北史卷一))	京師水溢、壞民廬舍數百家(靈徵志)	平州大水(同上)	詔以州鎮十四去年蟲水(魏書卷五本紀)(北史卷二)	以州鎮二十七水旱(魏書卷六本紀)(北史卷二)	是歲州鎮十一水旱、丐民田租；相州民餓死二千八百四十五人(本紀卷七)(北史卷三)詔以州郡八水旱蝗民飢(本紀)(北史卷三)	是歲州鎮二十餘水旱民飢(同上)(北史卷三)	建康大水(隋書五行志)

世宗	肅宗								
景明元	永平三	延昌元	熙平二						
500	510	512	513	516					
七月	六月	九月	八月	七月	六月	五月	四月	三月	二月
青齊南青徐兗豫東豫司州之潁川汲郡大水、平隰一丈五尺、民舍全者十口五(同上)	青齊州大雨霖海水溢出於青州樂陵之隔沃縣流漂一百五十二人(同上)	鐘離大州(本紀)	州縣二十大水(靈徵志)	以頻水旱百姓飢餓(本紀)(北史卷四)	州郡十一大水(本紀)(北史卷四)	夏京師及四方大水(靈徵志)	壽春大水是夏州郡十三大水(本紀、靈徵志)(北史卷四)	淮堰破蕭衍城戍村落十餘萬口皆漂入於海(本紀卷九)(北史卷四)	徐州大水(靈徵志)

隋文帝		後主		北齊武帝		孝靜帝		
開皇	武平	天統	武平	興和	元象	太昌	孝昌	二
一八	六	四	三	三	二	四	元	三
598	586	584	575	567	565	564	569	539
七月	二月	正月	八月	三月	十二月	六月	十月	九月
杞宋陳毫曹戴穎等州水(北史本紀)(河南八州大水(隋書五行志))		齊州水(隋書卷一本紀)		兗趙魏三州大水(隋書卷二二、五行志)		冀瀛滄三州大水(同上)		
河南諸州水(隋書本紀)		山南荆浙七州水(北史本紀)		是歲山東大水、飢死者不可勝計(北史卷八本紀)(六月庚子大雨晝夜不息、至甲辰山東大水、人多餓死(隋書五行志))		幽冀瀛滄光五州饑(北史卷四)		
紀宋陳毫曹戴穎等州水(北史本紀)(河南八州大水(隋書五行志))		冀定趙幽瀛六州大水(同上)(山東諸州大水(隋書卷二二、五行志))		是秋山東大水人饑僵尸滿道(同上)		京師大水(靈徵志)		
						京師大水數水汎溢壞三百餘家(同上)		
						是夏山東大水(本紀卷一二)		
						定冀瀛滄四州大水(靈徵志)		
						滄州大水(靈徵志)		

唐太宗		高宗	
貞觀	永徽	貞觀	永徽
三	二	三	二
630	650	630	650
秋	五月	秋	五月
河南北諸州大水(隋書本紀)(河南河北諸州大水(隋書五行志))	河南大水、漂沒三十餘郡(隋書五行志)	大雨水、漂沒三十餘郡、民相賣爲奴婢(隋書本紀)	大雨水、漂沒三十餘郡、民相賣爲奴婢(隋書本紀)
河南諸州水(隋書本紀)	許戴集三州水(同上)	貝蕪鄆泗沂徐濠蘇隴九州水(新唐書卷三六、五行志)	許戴集三州水(同上)
山東河南三十州大水(舊唐書卷三本紀)(八月山東河南州四十大水(新唐書五行志))	山東河南淮南大水(舊唐書、本紀)(七月山東江淮大水(新唐書、五行志))	山東及淮海旁州二十八大水(新唐書五行志)	山東及淮海旁州二十八大水(新唐書五行志)
關東及淮海旁州二十八大水(新唐書五行志)	大雨水穀洛溢(新唐書卷二本紀)(大雨雨穀水溢、入洛陽官深四尺、壞左掖門毀宮守十九所、洛水溢、漂六百家(舊唐書本紀、五行志))	大雨水穀洛溢(新唐書卷二本紀)(大雨雨穀水溢、入洛陽官深四尺、壞左掖門毀宮守十九所、洛水溢、漂六百家(舊唐書本紀、五行志))	大雨水穀洛溢(新唐書卷二本紀)(大雨雨穀水溢、入洛陽官深四尺、壞左掖門毀宮守十九所、洛水溢、漂六百家(舊唐書本紀、五行志))
徐戴二州大水(新唐書、五行志)	穀襄豫荆徐梓忠縣宋毫十州大水(同上)	徐戴二州大水(新唐書、五行志)	穀襄豫荆徐梓忠縣宋毫十州大水(同上)
沁易二州水、害稼(同上)	泉州海溢(新唐書本紀)(八月河北大水泉州海溢、隴州水(新唐書、五行志))	沁易二州水、害稼(同上)	泉州海溢(新唐書本紀)(八月河北大水泉州海溢、隴州水(新唐書、五行志))
瀘越徐交瀘等州水(新唐書、五行志)	新豐渭南大雨零口出水暴出、漂廬舍、官飲饒常等州大雨水、溺死者數百人、秋齊定等十六州水(同上)(是歲齊定等十六州水(舊唐書卷四本紀))	瀘越徐交瀘等州水(新唐書、五行志)	新豐渭南大雨零口出水暴出、漂廬舍、官飲饒常等州大雨水、溺死者數百人、秋齊定等十六州水(同上)(是歲齊定等十六州水(舊唐書卷四本紀))
汴定濮毫等州水(新唐書、五行志)		汴定濮毫等州水(新唐書、五行志)	

上代支那の洪水説話について

四	五	六	四	二	二	元	二	元	二	元	二	元	四
673	671	670	669	665	659	656	655	654	653				
七月	八月	五月	六月	六月	七月	九月	七月	九月	六月				

杭甬果忠等州水(同上)

河北大水(新唐書、本紀)(五月大雨、麟遊縣山水衝萬年宮元武門、入襄殿、衛士有溺死者、六月、漳沱溢、損三千餘家、(新唐書五行志)五月、大雨水漲暴溢、漂溺麟遊縣居人及當番衛士、死者三千餘人、六月恒州大雨、漳沱河泛溢、溺五千餘家、蒲州汾陰縣暴雨、漂溺居人、浸壞廬舍、河北諸州水(舊唐書卷四本紀)六月恒州大雨、自二日至七日漳沱河水泛溢、損五千三百家(舊唐書卷三七、五行志)

洛水溢、十月齊州黃河溢(新唐書、本紀)(六月商州大水、秋冀沂密兗滑汴鄆等州水、害稼、洛州大水、毀天津橋、十月齊州河溢(新唐書五行志)(舊唐書本紀)

宣州涇縣山水、暴出平地四丈、溺死者二千餘人(新唐書、五行志)

括州海溢(新唐書、本紀)(括州暴風雨、海水溢、壞安固永嘉二縣(新唐書、五行志)括州海水泛溢、壞安固永嘉二縣、損四千餘家(舊唐書本紀)

連州山水暴出、漂七百餘家(同上)

鄧州大水、壞居人廬舍(同上)(鄧州大水壞城邑(舊唐書本紀)

括州大風雨、海溢、壞永嘉安固二縣、溺死者九千七十人、冀州大雨水、平地深一丈、壞民居萬家(新唐書、五行志)(六月括州大風雨、海水泛溢、永嘉安固二縣城郭漂百姓宅六千八百四十三區、溺殺人九千七十、牛五百頭、損田苗四千一百五十頃、冀州大水漂居人廬舍數千家、七月冀州都督府奏自六月十三日夜降雨至二十日水深五尺、其夜暴水深一丈已上、壞屋一萬四千三百九十區、害田四千四百九十六頃(舊唐書卷五、本紀、同五行志)

大雨山水溢、溺死五千餘人(新唐書、五行志)(五月十四日連日澍雨、山水溢、溺死五千餘人(舊唐書、五行志)

徐州山水、漂百餘家(新唐書、五行志)

婺州大雨、山水暴漲、溺死者五千餘人(同上)(秋七月、婺州暴雨、水泛溢、漂溺居民六百家(舊唐書、卷五本紀)

儀鳳	永隆	開耀	永淳	睿宗	中宗
元	元	元	元	元	元
676	680	681	682	684	692
八月	九月	八月	五月	七月	五月

青州海溢(新唐書、本紀)(上元三年八月、青州大風、海溢、漂居人五千餘家、齊淄七州大水(新唐書、五行志)青齊等州海泛溢、又大雨、漂溺居人五千家(舊唐書、本紀)

河南河北大水、溺死者甚衆(新唐書、五行志)(舊唐書本紀)

志)河南河北大水(新唐書、本紀)(八月河南河北大水、壞民居十萬餘家(新唐書、五行志)河南河北大水、許遺水處往江淮已南就食(舊唐書本紀)

洛水溢(同上)(五月東都連日澍雨、乙卯洛水、壞天津橋及中橋、漂居民千餘家(新唐書、五行志)

京師大雨水、平地深數尺、秋山東大雨水、大饑(新唐書、五行志)(六月十二日連日大雨至二十三日、洛水大漲、漂損河南立德弘敬洛陽景行等坊二百餘家、壞天津橋中橋、斷人行累日、先是頃降大雨、沃若懸流、至是而泛溢衝突焉、西京平地水深四尺已上、麥一東止得一二升米一斗二升、布一端止得一百文、國中饑饉、蒲同等州沒徙家口並逐糧餒相仍加以疾疫、自陝至陝死者不可勝數(舊唐書、五行志)

(已巳)河溢壞河陽橋、八月恆州漳沱河及山水暴溢、害稼(新唐書、五行志)(本紀)七月己巳、河水溢、壞河陽城、水面高於城內五尺、北至監坎、居人廬舍漂沒、皆盡南北並壞」とある。相互對照して真相を明かにするに足る。

温州大水、漂千餘家、括州溪水暴漲、溺死者百餘人(新唐書、五行志)(十月温州大水、漂流四千餘家(舊唐書、五行志)

洛水溢、七月又溢、八月河溢、壞河陽城(新唐書、卷四、本紀)(秋七月大雨、洛水汎溢、居人五千餘家(舊唐書卷六、本紀)

河溢棗州(新唐書、本紀)(五月棗州河溢壞居民二千餘家、是歲河陽州十一水(新唐書、五行志)

徐州大水、害稼(同上)

上代支那の洪水説話について

順宗	憲宗	元和	元	二	三	四	五	六	七	八	九	一	二
一八	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元
802	805	806	807	808	809	811	812	814	816	817	818	819	820
春	夏	秋	夏	六月	七月	十月	十月	正月	六月	六月	五月	六月	六月
申光蔡等州大水(同上)	朗州之熊武五溪溢、秋武陵龍陽二縣江水溢、漂萬餘家、京畿長安等九縣山水害稼(同上)	荆南及壽州徐等州大水(同上)	蔡州大雨水平地深數尺(同上)	渭南暴水、壞廬舍二百餘戶、溺死六百人(舊唐書卷一四、本紀)	渭南暴水出、漂民居二百餘家(新唐書、五行志)	鄆坊中水(同上)	振武河溢、毀東受降城(新唐書、本紀)(五月懷撫度吉信五州暴水、度州尤甚、平地有深至四丈者)(新唐書、五行志)(舊唐書本紀卷一五、本紀及五行志)	渭水(益新唐書、本紀)(五月陳州許州大雨、大隗山抽水流出、溺死者千餘人六月度寅、大風毀屋揚瓦、人多感死者、京師大水、城南深丈餘、入明德門、猶漸車輻、辛卯渭水漲絕濟、時所在百川發溢、多不由故道、滄州水潦浸鹽水等四縣(新唐書、五行志)(舊唐書本紀及五行志)	淮南及岳安宣江撫等州大水、害稼(新唐書、五行志)(秋淮南宣州大水(舊唐書、五行志)	六月、密州海溢(八月甲午渭水溢(新唐書、本紀)(五月京畿大雨、水昭應尤甚、衛州山水害稼、深三丈毀州郭溺死百餘人六月、密州大風雨海溢毀城郭德州浮梁樂平二縣暴雨、水漂沒四千餘家、潤常朝陳許五州及京畿水害稼(新唐書、五行志)(京師大雨、橋(新唐書、五行志)(舊唐書本紀及五行志)	京師大雨水含元殿一柱傾、市中水深三尺、毀民居二千餘家、河南河北大水、洛邢尤甚、平地二丈、河中江陵關澤澤晉陽蘇臺越州水害稼(新唐書、五行志)(京師大雨、含元殿一柱傾、市中水深三尺、壞坊民二千家(舊唐書、本紀及五行志)		

穆宗	敬宗	文宗	三	四	五	六		
長慶	寶曆	太和	元	元	元	元		
二	元	元	元	元	元	元		
822	825	828	829	830	831	832		
七月	秋	夏	夏	夏	六月	六月		
淮水溢(新唐書、本紀)	洪吉信滄等州水(新唐書、五行志)	河南陳許蔡等州大水、好時山水漂民居三百餘家、處州大雨水、平地深八尺、壞城邑桑田大半(新唐書、五行志)(秋七月好時縣山水、漂溺居人三百家、陳許蔡等水(舊唐書卷一六本紀及五行志)	是夏漢水溢(新唐書卷八、本紀)(夏蘇湖二州大雨、水湖決溢、睦州及壽州之霍山山水暴出、鄆曹濮三州雨、水壞州城民居田稼略盡、襄均復鄆四州漢水溢、決、秋河南及陳許二州水害稼(新唐書、五行志)(舊唐書卷一八、本紀)	鄆坊二州暴水、兗海華三州及京畿奉天等六縣水害稼(新唐書、本紀)(舊唐書、本紀)(河溢棧州城越州海溢(新唐書、本紀)(夏京畿及陳滑二州水害稼、河陽水平地五尺、河決壞棧州城、越州大風海溢、河南鄆曹濮青淄濟德兗海等州並大水(新唐書、五行志)六月陳州水害秋稼、八月壬戌京畿奉天等十七縣水(舊唐書本紀)	同官縣暴水漂沒二百餘家、宋毫徐等州大水害稼(新唐書、五行志)(舊唐書、五行志)	是夏舒州江溢(新唐書、本紀)(夏江水溢、沒舒州太湖宿松望江三縣民田數百戶、鄆坊水漂三縣家、浙西浙東宣歙江西鄆坊山南東道淮南京畿河南荆襄岳湖南大水、鄆皆害稼(新唐書、五行志)八月丙辰、鄆州水溺居民三百餘家、九月戊寅、舒州太湖宿松望江三縣水溺居民六百八十戶、已丑淮南水溺居民三百餘家、九月戊寅、舒州太湖水深八尺壞郡郭居民大半(舊唐書、五行志)	梓州玄武江溢(新唐書、本紀)(六月元武江漲高二丈、溢入梓州羅城淮南浙東浙西荆襄岳鄂東川大水害稼(新唐書、五行志)	蘇湖二州大水、六月徐州大水、壞民居九百餘家(新唐書、五行志)(二月戊寅蘇湖二州水、賑米二十二萬石(舊唐書本紀)徐州自六月九日大雨、十一日壞民舍九百家(舊唐書、五行志)

武宗	宣宗	懿宗	開成	七	八	元	三	四	五	元	七
會昌	大中	咸通	元	七	八	元	三	四	五	元	七
元	二	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元
841	858	860	836	838	840	841	839	838	840	836	833
七月	八月	夏	七月	夏	七月	七月	秋	夏	七月	秋	秋
鎮州及江南水(新唐書、五行志)	河南大水自七月雨不止至釋服後方霽(舊唐書、本紀)	東都大水(同上)	漢水溢(新唐書、本紀)	魏博鎮兗鄆滑汴宋舒壽和潤等州水害稼徐泗等州水深五丈漂沒數萬家(新唐書、五行志)	魏博鎮兗鄆滑汴宋舒壽和潤等州水害稼徐泗等州水深五丈漂沒數萬家(新唐書、五行志)	魏博鎮兗鄆滑汴宋舒壽和潤等州水害稼徐泗等州水深五丈漂沒數萬家(新唐書、五行志)	魏博鎮兗鄆滑汴宋舒壽和潤等州水害稼徐泗等州水深五丈漂沒數萬家(新唐書、五行志)	魏博鎮兗鄆滑汴宋舒壽和潤等州水害稼徐泗等州水深五丈漂沒數萬家(新唐書、五行志)	魏博鎮兗鄆滑汴宋舒壽和潤等州水害稼徐泗等州水深五丈漂沒數萬家(新唐書、五行志)	魏博鎮兗鄆滑汴宋舒壽和潤等州水害稼徐泗等州水深五丈漂沒數萬家(新唐書、五行志)	魏博鎮兗鄆滑汴宋舒壽和潤等州水害稼徐泗等州水深五丈漂沒數萬家(新唐書、五行志)

昭宗	僖宗	光化	乾符	一	四	七	六	三	六	三	三
三	六	三	三	四	七	六	六	三	六	三	三
900	879	876	873	866	865	865	865	865	865	865	865
七月	二月	八月	夏	六月	九月	七月	七月	七月	七月	七月	七月
浙江溢(新唐書卷一〇、本紀)	京師地震、藍田山裂出水(新唐書卷九、本紀)	關東大水(同上)	關東河南大水(同上)	江淮大水、秋河南大水害稼(同上)	東都大水漂壞十二坊、溺死者甚衆(新唐書、五行志)	東都許汝徐泗等州大水、傷稼(同上)	東都許汝徐泗等州大水、傷稼(同上)	東都許汝徐泗等州大水、傷稼(同上)	東都許汝徐泗等州大水、傷稼(同上)	東都許汝徐泗等州大水、傷稼(同上)	東都許汝徐泗等州大水、傷稼(同上)

(昭和六年十月五日稿)

上代支那の洪水説話について

上代支那の「巨鼈負山」説話の由來について

昭和八年八月市村博士古稀記念「東洋史論叢」

上代漢民族の間に存したと想はれ、「鼈戴山抃」といふ形で既に『楚辭』の天問篇に現はれてゐる「巨鼈負山」の説話に就いては、嘗て藤田博士が「支那に傳ふる二三の Myth について」⁽¹⁾なる論文の中にそれに對する考察を公にせられた。そこに論ぜられたところの要旨は、支那上代のかゝる説話は、恐らく印度の Mahabharata や Puranas に傳へられてゐる、攪海の説話の龜王 Kurma がその背上に山を載せてゐるといふものの影響によつて生じたものであらうと推考せられ、その終りに「たゞこの myth が印度から支那に傳はつたとすると、その間に幾多の變化を蒙つたらうし、又た印度に於ても現に傳ふるものは Brahminism の影響に依り、頗るその原に變化を及ぼしたらしいから、屈原の見聞したるものが、Mahabharata の所傳と全然同様であつたか否かは、固より不明であるが、しかもこの兩者の間に或る共通の點あることは略ぼ疑なからうと想ふ」と述べられて、の諸例と共に印度よりの影響によつて生じた支那説話と觀られたのであつた。私は博士のこの高説より尠からざ

上代支那の「巨鼈負山」説話の由來について

る刺戟と誘掖を受けたのであつたが、その後聊か説話の研究を進めるにつれて暫く影響の關係から離れて、「巨鼈負山」といふ説話を漢民族独自の思想發達の上より考察するの妥當なるを信するに至つたので、こゝに未熟ながら論考を試みて識者の叱正を仰がうとするのである。

先づ、支那に存するこの説話の問題は暫くこれを措いて、印度の説話については既に TYLOR 氏が一八七八年に公にせられた著書の内にこれを論じ、一に大地を支ふる大龜、二に洪水の原因として大龜はその負ふ大地の重さに堪へかねて大海に沈み行く場合の存するを云ひ、三に大地そのものを大洋に浮ぶ龜とするに至る印度に於ける説話の展開と變異とを論じ、且つ近世、北アメリカに赴いた宣教師の報ずるところに依つて、北アメリカ土民の間にも、ほど印度のこの三階梯に相當する説話發達の存することを説明し、最後に假令それらの記述には既に印度思想その他の事例を知つてゐた歐洲人の既得の知識を以つてした修飾があるにしても、その間に行はれた混合なり修飾なりは、その根柢に北アメリカ土民の間に幼稚なる World Tortoise の説話が存してゐたからこそ爲されたものに相違ないと論ぜられてゐる。⁽²⁾ 私はこの論述を讀むに及んで、America Indians の間に大地を負ふ龜の説話の存するのは大に注意すべき事であると信じて、更に涉獵を進めたところその事に就いては、多くの學者によつて既に業に述べられてゐるのを知り得た。即ち BRINTON 氏は單に大龜が大地を支へるといふ事を述べられたに過ぎないが、DÄHNARDT 氏はこの種の説話の中に就き大龜が大海に浮かんてゐる點を詳説せられてゐる。⁽³⁾ また FISKE 氏は America Indians 諸部族の間にかゝる説話の存することは嚮に TYLOR 氏の指摘された通り

であるがと前提して、彼等の間にあつては龜は地の symbol であり、且つ人類の母とも言はれ、大地が創造されつゝあつた際、天帝はその妃と争ひこれを天より落したところ、彼女は幸ひにも龜の背上に落ち、その手により龜の背を中心として大地の創造が促されて行つたが、彼女が産んだ人間の始祖は糶を捕へようとして大地を深く掘つた爲め終に龜甲に達し、その苦痛に堪へかねて大地を負ふ龜は海中に沈み行き、それにつれて洪水が起つたといふ説話を示してゐる。⁽⁵⁾ また TYLOR 氏は別の著書の中に同じく America Indians の間に地震は大地を負ふ大龜が動くので起るとする説話の存することを述べて居られ、⁽⁶⁾ COX 氏また同様の説明を試みてゐる。⁽⁷⁾ 而してこの地震の説明説話が大地を負ふ龜の思想より展開したものである事は言ふまでもない。かやうな事例は上に述べたやうな諸例に止まらず、CONRADY 氏も『楚辭』天問篇の獨逸語譯註の中に Delaware 族の間に die Schildkröte als Träger der Erde の説話が存することを指摘せられ、⁽⁸⁾ FRAZER 氏は totemism の解明に當つて、その部族が海龜を totem とするのはその由來大地を負ふ龜の思想にあることを説かれてゐる。⁽⁹⁾ 以上の諸學者の中に就いて、支那及び印度と北アメリカ土民の三者に論及されたのは CONRADY 氏たゞ獨りであつて、氏は上に掲げた譯註に於いて北アメリカ土民の間にもその説話が存しはするけれども、支那の説話は印度のものの影響によつて生じたのであらうと言つて居られるに過ぎない。

併し、私はかくも近似な説話が America Indians の間に存することを知り得た以上は、たゞ單に支那と印度との關係のみを斷ずるにとゞまらず、一應この類似の由つて來る所以の考究に勉むべきではないかと思ふ。然る

に、現在のこの方面の研究の程度を以つては、かゝる類似相互の關係を明かにすることは殆ど不可能ともいふべき極めて困難の業に屬するのであるから、私はその間の連絡の究明に力を盡すに先立つて、一應支那独自の思想展開の上からこの説話の検討を試みるとともに、各個の説話に含まれてゐる心理に解釋を加へて見るのは徒爾でないと思ふし、且つ龜が大地を負ふといふやうな説話は思想發達の跡を辿ることによつてのみ明かとなる可成り無理な思想と思ふので、試みに今日に遺存する聊かの史料に考察を加へて思想の發達を述べて見ようとするのである。

元來龜なる爬蟲類の動物は甲を持つことが極めて奇異の感を懷かせるものなるのみならず、その甲中に頭尾及び四肢を收入した時には恰も無生物の如き外觀を呈するのに、それから徐ろに頭尾四肢を出だして運動を起すが故に、未開民族にとつては極めて不思議の存在と思惟されたに相違なく、それが龜及び龜甲につき種々の觀念を生ずる遠き由來を爲したことは贅言を要せぬところであらう。⁽¹⁰⁾ その中に就き、龜が物を擔ふといふ觀念については後に聊か論ずる事とし、こゝにはたゞその一例として FRENCH 氏の説くところのものを擧げると、龜に關する種々の形の説話を持つてゐる America Indians の諸部族の間では、龜甲は足または膝裏の丈夫なることを望む magic の資料として盛に用ゐられてゐる。⁽¹¹⁾ 恐らくその本來の意味は龜甲の固さに據る homeopathic magic にあることを推考せしめ、かやうな事實がやがて龜甲に何等かの意味を附與する遠き因由を爲したであらうと思像せられる。

翻つて考へて見ると、上代支那にあつては龜甲は所謂龜卜なる重要な divination の極めて神聖な資料とせられたものであるから、私は遠い古代に龜そのものを神聖視する思想が存したが故に divination の資料として採り用ゐられるに至つたか、或は然らずして何等かの動機から divination の資料とせられたが故にやがて神聖視されるに至つたか、この二つの場合を想像し得ると考へるのであるが、私は、龜が神聖視され、もしくは靈物視されるに至つたのは前者の場合に屬するものと考へるのである。が、かの知識ある人々の合理觀によつて書き遺されたのが一般である上代支那の文獻に、かゝる民俗的意味をそのままに現はす事實を得、或はその思想開展の跡を辿ることは至難の業なのである。而して、その龜卜のまた靈物たるの由來に關する問題はこの限られた紙上に論考を盡し難いから、それは他日に譲つて、こゝには「巨鼈負山」といふやうな説話の最も根原的な形と思はれる龜甲が物を擔ふといふことに聯想されてゐる事實から説明を進めたいと思ふ。換言すれば、種々の説話の上に龜甲が物を擔ふといふ形を取つて現はれて來る事は、「巨鼈負山」説話を解釋するのに看過すべからざる事實と信ぜられるから、先づその事を考へ、順次他の問題に入らうとするのである。

即ち America Indians の Huron 族の間に傳へられてゐる創造説話の中には、大龜が世界の創造に重い役割を持つ神女の貴重な荷物を背負ふといふものがあり、⁽¹²⁾ また南アフリカの諸部族の説話には龜の甲に蠟を積み重ねるといふもの⁽¹³⁾の存することが傳へられて居るし、或ひはまた同地方の部族のうちに飢饉の際食物を探す命を帯びて出された龜が背一杯に荷を擔つて歸り來る説話⁽¹⁴⁾が存してゐるから、これらの事例を以つて龜甲が物を擔ふとい

上代支那の「巨鼈負山」説話の由來について

ふ觀念を生ずる一般的心理の存することを推定して大過ないと信ずる。併し、甚だ遺憾なことには今日に遺存する支那説話の中には、それによつて原形の逆推を敢てすることは必ずしも不可能ではないが、所傳そのまゝが龜甲の物を負ふといふ思想の階梯を現はしたものは見出し得ないのである。

然らば、支那の古文献の中にこの民族が龜甲を如何に考へたかを示す、換言すれば、「巨鼈負山」説話の原始的な形と想像されるものは無いかといふと、所謂『河圖洛書』といふ緯書の中などに散見する「洛汭之水靈龜負書」とある龜が書を負つて出るといふのは、その根柢に龜が物を負ふといふ思想の存したことを推察せしめるに足るし、かの『拾遺記』卷二の「禹盡力溝洫、導川夷岳、黃龍曳尾於前、元龜負青泥於後」などともあるのも極めて零碎な記述に過ぎないし、後世の潤色の甚だ豊かな記録の一部分ではあるが、やはりその基礎に龜甲の實際の形に由来する龜の物を負ふといふ思想を窺ひ知るに足ると思ふ。

次に考ふべきは人を負ふ例であつて、かの『晉書』卷八十一、毛寶傳には

寶在武昌、軍人有於市買得一白龜長四五寸、養之漸大、放渚江中、郟城之敗、養龜人被鎧持刀、自投於水中、如覺墮一石上、視之乃先所養白龜、長五六尺、送至東岸、遂得免焉、

とある。この記述は『搜神後記』卷十によると更に委曲を盡してゐて、

晉咸康中、豫州刺史毛寶戍郟城、有二軍人、於武昌市見人賣一白龜子、長四五寸、潔白可愛、便買取持歸、著甕中養之、七日漸大、近欲尺許、其人憐之、持至江邊、放江水中、視其去、後郟城遭石季

龍攻陷、毛寶棄豫州、赴江者莫不沉溺、於時所養龜人被鎧持刀亦同自投、既入水中、覺如墮一石上、水裁至腰、須臾游出中流、視之乃是先所放白龜、甲六七尺、既抵東岸、出頭視此人、徐游而去、中江猶回首視此人而沒、

とある。この例は龜が物を負ひ戴くといふ事から轉じて人を載せた場合である。

聊か考察の主題から岐路に入る観があるが、この説話は龜が人を負ふといふ思想の外に明かに龜が感謝を知り、恩に報ゆるものであるといふ事を示さうとする意圖の存するのを看過することは出来ぬ。私の淺見なる、それに關する多くの類例は見出し難いが、『晉書』卷七十八、孔愉傳に

(孔愉) 時年已五十矣、以下討華軼功、封餘不亭侯、愉嘗行經餘不亭、見籠龜於路者、愉買而放之溪中、龜中流左顧者數四、及是鑄侯印、而印龜左顧、三鑄如初、印工以告、愉乃悟、遂佩焉

とあるが、これは恐らく『搜神記』卷二十に

孔愉字敬康、會稽山陰人、元帝時、以下討華軼功、封侯、愉少時嘗經行餘不亭、見籠龜于路者、愉買之、放於餘不溪中、龜中流左顧者數過、及後以功封餘不亭侯、鑄印而龜鈕左顧、三鑄如初、印工以聞、愉乃悟其爲龜之報道、取佩焉、果遷尙書左僕射、贈車騎將軍、

とあるやうな説話を節略したものであらうが、それは兎も角として、これは言外に龜が恩を謝するものであるとの事實を現はしてゐる。近い世の記述であり、且つ海龜についての事ではあるが、『古今圖書集成』禽蟲典(第百

五十一卷)に『廣東通志』にあるとして、

海龜、應首騰吻、大者方徑丈餘、春夏之交、遊卵於沙際、島犇遇而捕之、輒垂淚歎氣、如人遭困厄、然或喻之曰、汝再垂淚歎氣、當解汝縛、龜便應聲、潛然鳴若哀牛、島犇昇至海濱釋之、龜比入水、引頸三躍、若感謝然、

といふ話を引用してゐるが、古い時代のものと同様な思想と思はれる。併し、試みにこゝに一言を費して置きたいと思ふことは、かゝる民間的な傳承や土俗の由來に關して聊か考究に努めて見たのであるが、何等確實な證左を得ないから、かゝる民間的傳承は暫くこれを措いて、上に引用した事例の示す思想は、或は龜卜の資料として龜を神聖視する知識階級の人々の思想が轉じてこれを靈物とする思想が熟すると、その事から更に感謝を知り恩に報ゆるものであるとするに至る思想の展開も概ね自然に考へられるから、上のやうなものは或る知識が説話化された場合の一例と見るのが妥當ではなからうか。もしこの考へに大過なしとすれば、龜類たる鼈を「河伯從事」(『古今註』)と云ひ、「元龜河精之使者」(『拾遺記』)と言はれ、また『搜神記』卷十一に「齊景公渡江沅之河、龍衝左驂沒之、衆皆驚傷、古冶子於是拔劍從之、邪行五里、逆行三里、至砥柱之下、殺之、乃龍也、左手持龍頭、右手披左驂、燕躍鶴踊而出、仰天大呼、水道逆流三百步、觀者皆以爲河伯也」とあるのも龜類たる龍を河伯といつた例とせられやうし、かの有名な高勾麗朱蒙傳説の朱蒙が「我是日子河伯外孫」と云つて魚鼈を集めるのも、鼈を河伯に關係させた思想の現はれかと考へられるし、『晏子春秋』卷一「景公欲祠靈山河伯」

以禱雨」の條に「河伯以水爲國、以魚鼈爲民」とあるのなども字句の潤色はあるが、みな相類する思想の表はれとして問題とせられる。而して、この場合支那の上代に龜類を河伯、もしくはそれに關係深いものとする思想が確かに存したであらうかといふに、それは一面存し得べき思想でもあるが、また他面に龜類が靈物視され、然も水と深い緣故のあるものである限り上のやうな思想は、思想發達の上から容易に展開し來ることも十分に肯されるであらうから、今私にかゝる事例の存することと、上の二様の考察が爲し得ることを述べるにとどめ、敢てその斷定は差控へ、これを他日に期することとする。

さて、本論に歸つて、前の例は龜が人を負つたといふ説話であつたが、それは龜が水中に浮ぶところから當然橋に聯想され得るのであつて、次の諸例は正にそれを示すものである。即ち『論衡』卷二吉驗篇に「北夷菴離國王侍婢有娠、王欲殺之、婢對曰、有氣大如雞子、從天而下、我故有娠、後產子、捐於猪淵中、猪以口氣噓之不_レ死……王疑以爲天子、令其母收取畜之、名東明、令牧牛馬、東明善射、王恐奪其國也、欲殺之、東明走南、至掩淲水、以弓擊水、魚鼈浮爲橋、東明得渡、魚鼈解散、追兵不得渡」とある。この「魚鼈浮爲橋」といふ事のうち魚鼈と並稱されてゐるのは、魚が同じく水中にゐるものであるところから、語調上鼈に附け加へられたに過ぎないので、その中心を爲してゐるのは鼈が物を載せるといふことから轉化して橋を爲すといふ事になつてゐる點である。而してこの説話の變異が高勾麗の朱蒙傳説になつた徑路については、既に内藤博士が高説を發表されて考證を盡されたところであるから、今更こゝに述べる必要はないが、『魏書』卷百

高勾麗傳には「朱蒙乃與烏引烏達等二人、棄夫餘東南走、中道遇一大水、欲濟無梁、夫餘人追之甚急、朱蒙告水曰、我是日子河伯外孫、今日逃去、追兵垂及、如何得濟、於是魚鼈並浮爲之成橋、朱蒙得渡、魚鼈乃解、追騎不得渡」と朱蒙の話になると共にや、潤色を増し、且つ「並浮爲之成橋」に記述の發達が認められるが、上に述べた龜類が人を載せ橋を爲す説話の中心點は變化するところがない。また『拾遺記』卷二には「舜命禹、疏川濟巨海、則鼈鼉爲梁」とあり、『竹書紀年』などにも「穆王三十七年、大起九師、東至於九江、架鼈鼉以爲梁、遂伐越至於紆」とあつてみな龜類が橋梁を爲すを云つてゐる。これらの例と同じ思想の階梯を示すものに、唐、王起の「鼈鼉爲梁賦」(『全唐文』卷六百四十三)があるから、やゝ煩冗に失する嫌があるけれども、こゝにその全文を引用して置く。

周穆窮輶迹之所、經、駕鼈鼉而感靈、所以濟浩汗、所以通杳冥、蛟々蛇々、以代造舟之利、匪雕匪刻、皆連外國之形、諒人力之不勦、信神功而永寧、當其師旅闐々、旌旗肅々、臨九江而澶汗、駐八駿而蟠蜎、望既濟於未濟、終歎無梁、思載沉而載浮、孰能剝木、得不乞靈於水府、假道於介族、則鼈也不得而深藏、鼈也不得而潛伏、既而擊波有聲、異狀可驚、出層潭而櫛比、駕飛浪而砥平、連足俄維、比浮柱之初立、鏤甲疊映、同版築之相成、齊首而繩墨勿用、曳尾而規模自呈、其利惟博、其安無傾、殊滄海之龜構、異銀河而鵲征、彼詭類之可覽、實至誠之所感、假最負以臨深、託盤跗而習坎、其勢邈迤、其狀參差、無遠不屆、惟危具持、照赫奕之五刃、度張皇之六師、乘以周旋、具異琴高之

鯉、載於沈溺、還符毛寶之龜、漁者徒驚、工人有恥、同風共羅而罔及、畫鷁雄虹而莫擬、題之不可、殊長卿之見書、抱之則難、謝尾生之沈水、是知伐鼈以冒鼓、其用匪良、解鼈而染指、其謀匪臧、孰若奮功於舟楫、感聖於君王、昔在深泉、懼屑沒於其穴、今符至德、忽結構而成梁、固蹂躪而無言、持騰躍而有光、我皇仁洽道豐、文修武偃、要荒畢服、淳離斯返、何必驅鼈而駕鼈、勞師以襲遠、

これが龜族梁を爲すといふ思想を本として、それに文學的修飾や誇張やを附け加へたものである事は明かである。かやうに種々の事例を観察して來ると、その形態に由來する龜が物を負ひ或は人を負ふといふ思想と共に、龜が水邊に棲みまた水面に浮ぶ様から、更に相集まり相並んで橋梁を形作るといふ思想の存した事も明瞭になつたが、それは思想發達上現はれ來るべき極めて自然な説話で、思想展開の跡を辿る上からは「巨鼈負山」説話などよりは遙かに根原的な幼稚な思想であることが知られよう。

かく龜類が橋梁を爲すといふやうな思想は、上に考察を試みたやうに極めて自然に生じ得べきものと推察せられるが、『太平御覽』に、『華陽國志』に曰ふとして引用されてゐる「秦惠王十二年、張儀司馬錯破蜀、儀因築城、終類壤、後有一大龜從而出、周行旋走、乃依龜行所築之乃成」は、『搜神記』卷十三にある「秦惠王二十七年、使張儀築成都城、屢類、忽有一大龜浮於江、至東子城東南隅而斃、儀以問巫、巫曰依龜築之便就、故名龜化城」と、やゝ形を異にした同一の説話であるが、これには聊か複雑な思想の分子を含んでゐる。即ち前者は「乃依龜行所築之乃成」をそのままに解すれば、靈物たる龜は最も安泰なる城地の規模を周行旋走

上代支那の「巨鼈負山」説話の由來について

によつて示したといふのであり、後者は龜は既に斃れこれを巫に問つたところ「依_レ龜築_レ之便就」とあつて、靈物たる龜を城地の鎮めとし、その上に城を築いたもののやうに解される。が、私はこの例は龜が城地を負つてゐるとまでは言へないにしても、龜に依つて城を築くといふ限りに於いては、やはりその根柢に龜が物を負ふといふ思想の存することは、否定し難い事實であらうと考へると共に、『淮南子』卷六、覽冥訓にある「往古之時、四極廢、九州裂」を女媧は「鍊_レ五色石、以補_レ蒼天、斷_レ鼈足、以立_レ四極」によつて整へたのであるし、それと同じ事實を言つてゐる王充『論衡』談天篇の「女媧銷_レ煉五色石、以補_レ蒼天、斷_レ鼈足、以立_レ四極」も共工と顛頂の争ひによつて、天柱が折れ地維の絶たれた時であつたことを併せ考へると、かの一見重さうな甲を負ひ、その甲の大きさに比して如何にも短い太い龜類の足は、見る人をして力強さと安定な感を懐かしめるから、説話上一度び壊れたものを修復するやうな場合に龜類がかゝる役割を有つに至つたものであらうといふことも考へられる。かくの如く説話の展開が認め得るとするならば、これが今一步空想化されて『楚辭』の天問篇にその片鱗を現はしてゐる「鼈戴_レ山抃、何以安_レ之」の鼈が山を戴くといふ思想ともなつて行つたであらう。そして、それに一層複雑な種々の分子の結合したものが、『列子』卷五、湯問篇中の

渤海之東、不知幾億萬里、有大壑焉、實是無底之谷、其下無底、名曰歸墟、八紘九野之水、天漢之流莫不注_レ之、而無增無減焉、其中有五山焉、一曰岱輿、二曰員嶠、三曰方壺、四曰瀛洲、五曰蓬萊、其山高下周旋三萬里、其頂平處九千里、山之中間相去七萬里、以爲鄰居焉……而五山之根、無所連著、常隨

潮波上下、往還不得暫時焉、列聖毒_レ之、訴_レ之於帝、帝恐_レ流_レ於西極、失_レ群仙聖之居、乃命禹疆、使_レ巨鼈十五舉_レ首而戴_レ之、迭爲三番、六萬歲一交焉、

である。なほ巨鼈が蓬萊山を負ふことが劉向の『列仙傳』、張衡の「思文賦」や郭氏『玄中記』にあることは故藤田博士の普く示された所であるから茲には敢て述べない。而して、巨大な龜類が山を負ふといふ思想は、龜類が水に浮ぶといふ事實と、天柱たる崑崙山を中心として擴がる陸地の四方には海があるとするかの四海の思想、換言すれば大地は海中に浮かんでゐるものとする觀念との間に、多少の聯想が働いたこともその一つの由來を爲したかとも思はれる。

なほ上のやうな思想が發展して現はれたと思はれるものに、唐、楊濤の「巨鼈冠靈山賦」(『全唐文』卷九百五十)がある。その全文は次の如くである。

海環_レ四方、東爲_レ之滄、有_レ巨鼈_レ兮、其大無_レ極、戴_レ仙山_レ兮、其力難_レ量、是山也、根無_レ附麗、彼鼈也、勢則騰_レ、積浪淪_レ、拖其身而歎_レ以動蕩、擗峯回互、加_レ於首_レ而隨_レ以低昂、豈不_レ以稟_レ茲魁大_レ、舉_レ其峻極_レ、當_レ一動一息之際、見_レ翻海迴山之力、延_レ頸而羣嶺騰_レ青、聳_レ身而半天映_レ黑、徵_レ物象之無_レ比、見_レ神用之罕_レ測、巨_レ橫天極地之質、遼_レ爾形標、冠_レ蓬萊、方丈之尊、輕如_レ首飾、然則神岳之高兮、莫_レ知、大鼈之壯兮、若_レ茲、視_レ銀鵬_レ如_レ纖芥、比_レ嵩華_レ於_レ毫釐、嶽_レ峯之容、初結_レ根於無地、突_レ兀之狀、終冠_レ首於此時、舉_レ其大_レ、吞舟不_レ足稱也、喻_レ於小_レ、戴勝有_レ以似_レ之、觀_レ其轉_レ峯盤_レ、偃_レ波浪、萬派沸涓、特立放曠、荷_レ三至重_レ而非

上代支那の「巨鼈負山」説話の由來について

重、見大壯而用壯、風水之運、最厲而上摩天垠、邱山可勝、嶮岬而高標海上、蓬臺之靈、神仙之局、獨冠岩亭、橫截滄溟莫、無究其廣大之形、豁谷陵阜、嶄巖紛糾、仰戴於首、無可無不、乃與夫天地相久者哉、故嶺磅礴、隨流混淪、聳切雲之高、且知其抗首、鼓翻波之勢、想見其側身、順時而或踴或躍、推理而乃聖乃神、比愚公之移有異、想龍伯之鈞無因、茲可謂氣冠澎湖、力均造化、則鼈之戴山也、以地載之力相亞、

これであつて、かくして巨鼈と仙山との關係が結成して來る。

なほこゝに一言を發して置きたいと思ふことがある。それは前にも引用した『淮南子』覽冥訓に「於是女媧鍊五色石、以補蒼天、斷鼈足、以立四極」とあることで、鼈の足については前に考察を試みたやうな點が是認されるとして、なほこの事は漢代に鼈が山を負ふといふ事から進んで大地を負ひ、もしくは巨鼈を大地と見る思想の存したのであらうことを想はしめ、且つその思想が存したからこそかゝる事が言はれたのであらうと推察される。

さて、龜と仙山との關係の外になほ注意を要するのは龜と仙人との關係であつて『列仙傳』卷上、桂父の條に「南海人見而尊事之、常服桂及葵、以龜腦和之」とあるのはやゝ特殊なものではあるがその一例ともせられよう。併し『洞冥記』卷二には「黃安代郡人也、爲代郡卒、自云卑猥不獲處人間、執鞭懷荊而讀書、畫地以記數、日久地成池矣、時人謂黃安年可八十餘、視如童子、常服朱砂、舉體皆赤、冬不著裘、坐一神龜廣

二尺、人問子坐此龜幾年矣、對曰、昔伏羲始造網罟獲此龜、以授吾、吾坐龜背已平矣、此龜長日月之光、二千歲即一出頭、坐此龜已見五出頭矣、行即負龜出趨、世人謂黃安萬歲」とあつてこれは仙人が龜に乗つてゐる明瞭な例である。なほ、かやうに仙人と龜とが結びつき、その上に更に別の思想の分子が附け加はつたものと思はれる顯著な例はかの『疑仙傳』にある李陽についての事實である。即ち、

李陽者蜀人也、學道十餘年、志不退、嘗於江邊見一大龜、白色如玉、異之收養焉、後三載此龜忽乘虛而去、七日復來、陽乃祝之曰神仙之道玄之又玄、固不可鑽仰也、余自開三清之景、覽十洲之事、知塵世不可依倚已、十餘年苦心於虔禱也、其如無髣髴之迹、以堅我心、忽一日江邊見爾龜、其色白潔白如玉、本異之收養何、今日忽昇空去又復來、爾是仙家之龜也、當每去而復來、若不爾其永去勿復住、其龜遽又昇空而去、經七日又復至、陽深疑是神仙變化因引之、徐行於江邊遊賞、忽一老叟遽問陽曰、此龜我所失也、君何得、陽曰我昔年於此水濱收得養之、老叟曰此龜能乘虛空而遊、又能入水底不濡溼、人若乘之可以遊萬里之外、入四海之內也、君既收養已久、我今與君、君當試乘之、但自訪神仙、乘此即可以周遊八極矣、陽拜謝之、其老叟忽然不見、陽乃以一足試踏龜背、龜乃漸漸變身大如一牛、陽因乘之、龜負陽走入江中、陽見水皆自分流、略不濡溼、乘之數日或入水或乘空、約行萬里、陽懼乃祝龜曰爾當負我歸、須臾之間舉目已見、欲復舊隱也、陽既知此龜有異、因乘虛西邁、又數日至一山上、有瓊林瑤樹、仍見一玉池、聞山頂有人歌聲、陽不測此事、又祝龜而同、復又

上代支那の「巨鼈負山」説話の由來について

思_二仙境_一因乘_二此龜_一、東邁倏忽間至_二一大川_一、四望無際、中有_レ山、山上有_二樓閣_一入_レ雲、陽又懼不_レ敢入_レ水而祝_レ龜、回蜀人頗怪、陽去而復來、有_二訪_レ之以問者_一、陽曰我多在_二山中_一取_レ藥耳、人又問_二其龜者_一、陽曰此龜長生之物也、我昔日在_二江邊_一見_レ之、收得_レ以養、雖_二色奇_一而別無_レ他、異_二其問_一者又因至_レ夜竊_二此龜_一去、陽乃遠遊不_レ知_レ所_レ之、

がその全文であるが、これを一讀すれば直ちに説話が甚だ複雑になつてゐることを悟り、且つ種々の點で問題とすべきところがあるやうに思はれる。併しこゝでは龜が仙人或は仙界と密接に關係づけられた點を注意して置きたいのである。

かくて、上に聊か考察を試み來つたやうな思想の展開を是認して太過無しとすれば、仙人と結びつけられた龜に仙人の不老不死、換言すれば長生長壽の屬性が附加されるに至つたとしても何等の不思議はないので、既に『述異記』には「龜千年生毛、龜壽五千年謂之神龜、壽萬年曰靈龜」などとあつて、かゝる思想の由つて來る所にも上に考察を試みたやうな思想の展開の上から容易に推知せられると信ずる。この場合龜が動物中比較的長命であるといふ實際の事實も考慮の上つて來るのであるが、人間より遙かに長壽であるものを、經驗的事實として知り得たといはんよりは、思想展開の跡を辿つて考へる方が寧ろより妥當とせられよう。

以上未熟ながら考察を試みた結果として、巨大な龜類が山を負ひ、或ひは地を負ふといふ思想の由來は、古い文書の上に思想發達の痕跡を辿ることによつて、ほゞ明瞭になること、及び山を負ふといふ事に關聯して仙山を

負ひ神仙もしくは仙境と關係づけられ、ついで龜が長生長壽のものとしてせられるに至る思想展開の徑路をも明かにし得たかと思ふ。而しても以上の考察の徑路に太過なしとするならば、この説話を影響關係の痕跡を明確に跡づけるに多くの困難の存する今日の研究が一層進歩を遂げてその間の證左を指示し得るに至るまでは、これを必ずしも印度からの影響によつて現はれ來つたものとせず、支那独自の思想の展開に於いてこれを認めて置いて何等の不可とすべき點はないであらう。

最後に考察の方法について一言附け加へて置きたいと思ふことがある。それはこの小考を進めるに當つて、例へば『楚辭』に現れてゐるやうな古い思想を明かにするために、概ねそれより後の世の史料に依るといふことを敢てした點である。而して、これは機會ある毎に、私が述べた支那説話の考察に當つて常に逢著する極めて困難な問題なのである。併し、これは上代支那の記録の性質上或る一つの思想が、種々な發達の過程を辿つて、既に相當發達した形に結成されてゐたにしても、その過程に屬する各階梯が古記録には全然書き遺されなかつたり、もしくは發達過程に屬するものと思はれる説話の形なり、或は發達を遂げた形の片鱗なりがやゝ古い世の記録に現はれて、然も却つてそれより後世になつてその思想發達の過程にある種々な階梯に屬する思想が——特に六朝時代以後に——多くの文獻の上に書き遺されるに至つたものやうである。かるが故にかやうな問題を考察するに當つては、寧ろより後世の記録に依つて、それより古き時代の思想發達の過程を明かにしようと思ひねばならぬので、この種の問題を究めようとするに當つては、かゝる方法が許さるべきであらう。

- (1) 藤田豊八博士「支那に傳ふる二三の Myth をつきて」〔白鳥博士遷居記念『東洋史論叢』八四五—八六九頁、引用文は八五三頁〕
- (2) E. B. TYLOR, *Researches into Early History of Mankind*, pp. 340—345.
- (3) D. G. BUNTON, *The Myths of the New World*, p. 204.
- (4) DANHARDT, *Natursgen*, Bd. I, ss. 77—78.
- (5) J. FISKE, *Myths and Myth-Makers*, pp. 171—172.
- (6) E. B. TYLOR, *Primitive Culture*, Vol. I, pp. 364—365.
- (7) M. R. COX, *An Introduction to Folklore*, p. 234.
- (8) A. CONRADY, *Das älteste Dokument zur chinesischen Kunstgeschichte Tien-Wen*, S. 244, V. 83.
- (9) J. G. FRAZER, *Totemism and Exogamy*, Vol. I, p. 6.
- (10) 各地の諸民族の間に龜の歩みの遅くといふ事といふ種々の所傳があるが、今はそれらの事實は凡て省略した。
- (11) J. G. FRAZER, *Magic Art*, Vol. I, pp. 151—155.
- (12) M. R. COX, *An Introduction to Folklore*, pp. 244—256.
- (13) *Folklore, A Quarterly Review of Myths, Traditions, Institutions and Customs*, Vol. XX, 1909, pp. 443—414.
- (14) *Folklore*, Vol. XXXVII, 1925, *Collectanea*, p. 180.
- (15) 龜が人を負つた説話の例として『搜神後記』卷上

都陽黃結、入山采荆楊、遂迷路數日、忽見大龜、結便呪之曰、汝是靈物、而吾迷不知道、今騎汝背、頭向便是路、龜即回右轉、結即從行十許里、便得溪水、即估客行舟者也、とあるのを書き漏したので、こゝに追記して置く。この説話は靈物視してゐる點にも注意すべきであらう。

(16) 内藤虎次郎博士「東北亞細亞諸國の開闢傳説」〔民族と歴史〕第壹卷第四號、大正八年四月、三三—四〇頁。

(17) 私の見た『華陽國志』〔漢魏叢書〕本、「四部叢刊」本にはこの文は無い。『蜀志』卷三に「六年陳壯反、殺蜀侯通國、秦造庶長甘茂張儀司馬錯、復伐蜀、誅陳壯……惠王二十七年、儀與若城成都、周迴十二里、高七丈、郫城周迴七里、高六丈、臨邛城、周迴六里、高五丈、造作下倉上皆有屋、而置觀樓射圃、」とあるから、この城を築く話に龜の話の附加されたものがあつたのだらうと思はれるが、その間の事情は明瞭でない。

附記 前に引くところの二賦については、近藤潤次郎先生の示教を得るところが多であつた事を特記して拜謝の意を表す。

(昭和七年十二月十八日稿)

社を中心として見たる社稷考

昭和九年十月早稻田大學「哲學年誌」第四卷

- 一 緒言
- 二 従來の諸説の紹介
- 三 社の起原に對する臆測
- 四 社に於いて行はるゝ諸行事
- 五 社の發達とその整備
- 六 稷后稷と社稷への展開
- 七 結言

一 緒言

社が土地の神であり、稷が穀物の神であり、その兩者を合した社稷が、宗廟と相對して支那王宮の右と左に祭られた事は、支那史上著明な事實である。そして、社稷なる語がその事から轉じて國家を意味するに至つたのであるといふことも、一般に信ぜられてゐるところである。それ程社稷が重要なものであつたとすれば、社及び稷

社を中心として見たる社稷考

の原義を究め、ついで社稷の意義を明かにすることは、漢民族古來の宗教思想社會思想を檢覈する上に相當必要な作業であると云はねばならぬ。それ故、從來支那學に志す學者の内にこの點に注意し所思を陳べられたものもあつたが、その中に就き學術的意義の豊かな點で看過すべからざるものは、ほど次の四篇の論文であると云つてよからう。即ち第一はフランス支那學界の巨擘故エドワール・シャヴンヌ(Edouard CHAVANNES)教授の「上代支那の地神(社)」⁽¹⁾ Le dieu du sol dans la Chine antique であり、第二は我が津田左右吉博士がその著「上代支那人の宗教思想」⁽²⁾の中に論及せられた社竝に稷に對する見解であり、第三は社一般についてではないが、京都大學の那波利貞氏の「次睢社攷」⁽³⁾なる一篇であり、第四は慶應義塾大學の松本信廣氏が公にされた「社稷の研究」⁽⁴⁾である。蓋しこの四篇の論説は余がこの小考の基石であり、各、異つた意味に於いて、恩恵に浴し刺戟を受けたところ尠くなかつたものであつて、就中、シャヴンヌ教授の論文は殆ど餘すところなく史料を網羅してある點に於いて、また津田博士のは簡明の中に洞破せられたその見解に於いて負ふところ極めて多いのであるから、本篇は余が聊か史料を加へ、それを整理し、且つ纔にその展開を跡づけようと思つたにとゞまるのである。

(1) CHAVANNES, Le 'T'ai-Chan. Essai de monographie d'un culte chinois. 1910. Appendice, Le dieu du sol dans la Chine antique. pp. 437—525.

(2) 津田左右吉博士「上代支那人の宗教思想」(滿鮮地理歴史研究報告)第六、大正九年)一一七五頁。

(3) 那波利貞氏「次睢社攷」(藝文)第拾三年第六號、大正十一年)三一三九頁。

(4) 松本信廣氏「社稷の研究」(史學)第二卷第一號、大正十一年)一一一一—一三〇頁。

二 從來の諸説の紹介

先づ紹介を要するのはシャヴンヌ教授の「上代支那の地神(社)」であるが、それは教授の名著『泰山誌』の附篇として公にされた論文である。元來多くの支那學者を擁する點に於いて、また潑刺たる新學説を提示する點に於いて、フランス支那學界の活躍には目覺しきものがあるが、その中でもシャヴンヌ教授の力作には不滅の意義を有するものが尠くない。例へば、その司馬遷『史記』の佛譯 Les mémoires historiques de Se-ma Tsien は翻譯の精確なる、譯調の流麗なる、校註の周到なる點で驚くべき勞作であり、有名な『北支那考古圖録』 Mission archéologique dans la Chine septentrionale は種々の困難と戦ひ、遍く北支那を跋渉して撮影された圖版を以つて編成されたもので、その苦心察するに餘ある殆ど永世忘るべからざる名著であつて、他の數多き著作も今なほ教授の堅確濃厚なる風格を物語る如く、いづれも、一片の資料だも忽にせぬ博覽と穩妥の見識とは眞に敬服の外はない。而してこの『泰山誌』も苟しくも泰山を論ずる者の一應精讀すべきものと信するが、その附篇たる Le dieu du sol dans la Chine antique も關係典籍を遍く涉獵し、正確なる典據に立脚して一々の事實を説明し進まれた態度には我等の學ぶべき點が尠くないのである。是を以つてかフレージャー教授(J. G. Frazer)はそ

の著 *The Worship of Nature* の内に大地の崇拜を論じ、第八節に「支那に於ける大地の崇拜 (*The Worship of Earth in China*)」なる一節を設け、尊敬すべき碩學の所説を借るとしてシャヴンヌ教授の説を簡譯し、たゞ數行の私見を加へて、その著書の重要な部分を充して居られる。シャヴンヌ教授の高説は後に一々の事實を論ずる際に引用し、以つて學界に對する裨益に感謝するつもりであるが、こゝには先づ該論考の構成の大様と各節の要旨だけを陳べて置かう。即ちその各節は

1. Les divers dieux du sol.
- 2,3. L'autel du dieu du sol.
4. L'arbre du dieu du sol.
5. Le fût du pierre symbolisant le dieu du sol.
6. Le dieu du sol et les éclipse de soleil.
7. Le dieu du sol dans les cas de trop grandes pluies ou de sécheresse.
8. Les dieux du sol et des moissons.
9. Le dieu du sol président aux châtimens.
10. Le dieu du sol et le temple ancestral.
11. Le culte du dieu du sol antérieur à celui de la déesse Terre.

の十一節より成り、(一)社の種類については家の五祀の一なる中霽、二十五家を單位とする里の里社、その書社、二千五百家を有すとせられた州の州社、縣の公社、諸侯及び天子が社稷を立てる中に就いて諸侯が百姓のために祭る國社、自らのためにする侯社、天子が群姓のために立てる泰社、自らのためにする王社(帝社)などの存する事を明かにし、(二、三)社は土壇によつて表示され後には方色を以つて形成されとの説あること、社壇は常に大氣殊に天に開かれてゐて天氣と相交接してその意義を發揮すとせられ、その點から殷の湯王が夏朝を滅ぼした際、敢てしたと傳へられてゐる亡國の社に屋したといふ事例と、かく前王朝の社を存置するのは新王朝の誠めとするところに意味ありとしこれを誠社と稱したことを説き、(四)社の古字に窺はれる如く社は樹木によつて表示され、その間原形を思はしめるが後までその關係が發展し社は樹木と種々な關係を保つて居り、(五)ついで、思想の發達に伴ひ樹木により表示された社は神に象る主を有するに至り、それが石を以つてせられる場合も存した。(六)また社は日蝕の場合に呪術的儀式を行ふところであり、即ち日蝕に際して鼓を打ち、牲を供へ朱絲を用ひなどするが、それは陰陽思想に基くものやうであることを説き、(七)旱魃や大雨に民の苦しむ時、社に於いて種々の祭式が行はれた事を明かにし、(八)かやうな社が展開してやがて人事に及ぼした作用は稷と結合し祖國の表徴としての意義を有するに至つた事實であつて、こゝに所謂國家を意味する社稷なる語が固定し、既に古い文書の上に主社稷、失社稷、鎮撫社稷、辱社稷、社稷之衛などの語が現はれ(九)更に一方では社も稷も共に擬人化され、他方では刑罰を司るものともせられた。(一〇)次には社稷が宗廟と相對し、王宮の西と東に建てら

れた事實及び君主の出師に當つて祝が社主を奉じて隨ふ次第を述べ、(一一)最後に皇天后土など對稱せられる場合の后土の事例に及んで検討を試み、社稷が宗廟と共に古來支那人の思想上に有する由來遠く且つ深い事を縷陳説明せられてゐる。

わが津田博士が社及び稷に論及されたのは上に述べた「上代支那人の宗教思想」の中に於いてであつて、先づその神祇の條に草木をも神とすることを論ぜられ社には樹があり、それが神位の表徴なること、それから轉化して社に木柱を立てる場合の存すること、また石をも社主としたことを考察せられ、ついで郊社の條に於いては社が地を祭るところであつたこと、出師に際して社で祭事を營んだ事や農事と關係づけられたこと、社に於いて日蝕の場合に呪術的儀式の行はれたこと、古に、社が數多く存在したことなどに注意せられ、更に穀神としての稷が別に祭られたのでなく社と共にその祭式が行はれたのである事を推定せられてゐる。そして、かくして結成した社稷は後世祭天郊祀の儀式が成立するに伴つて、地の祭として固定するに至つた趣を説明せられてゐる。

今この二つの論説を概括的に考へると、シャヴンヌ教授の著書が刊行されたのは一九一〇年であり、津田博士のが上梓されたのは大正九年即ち一九二〇年であるが、後者は前者と全く獨立に公にせられたものである。そして、シャヴンヌ教授の方は典籍の涉獵を盡して關係事項の舉例に勉め、そこに記載されてゐるところを綜合して説明せられたところに敬服すべき特色があるのに對し、津田博士の論考はこの著述の特殊な必要からか簡明を主とせられた中に、文献の記載を透してその背後に潜む原義や原始形式を洞破するに勉められてゐ、その鋭い觀察

に追隨を許さぬ特長があると信ずる。

なほ、那波利貞氏の「次睢社攷」は前に言及したやうに社稷一般の考察ではなく、『左傳』僖公十九年の「宋公使邾文公用鄆子於次睢之社」の『公羊』『穀梁』の記載から、昭公十年の「始用三人於亳社」に及び、その間に考ふべき諸事項を考説し human sacrifice とその展開の跡とその意義とを究明された興味ある論文であり、松本信廣氏の「社稷の研究」は今を去る十二年既に堪能なる佛語もて極めて巧みにシャヴンヌ教授所説の要領を要約紹介せられ、併せて津田博士、那波學士、ヴント、フレーザー兩學者の説をも参考して一二の所思を披瀝されたものである。

今日までに示された業績の顯著なものは以上以上のやうであつて、史料の點に於いてはシャヴンヌ教授の舉示されたもの以外に幾何も出で難いし、社、稷の原形からの展開については、躬ら問題を委細に考究して見ると、一層、津田博士が簡単な言葉で洞破せられた見解に異議を挟む餘地無きことを切實に感ずるに至るのであつて、余がこゝに特にこの小考をものするの意義に乏しいやうであるが、聊か前に述べたやうな意味から敢て鄙見を草して識者の叱正を仰ぐこととしたのである。

(5) J. G. Frazer, The Worship of Nature, Vol. 1, pp. 357—375.

三 社の起原に對する臆測

凡そ、上代漢民族の間に存したと信ぜられる原始的思想を究明しようとするに當つて、必ず逢着する困難な問題は、既に早くから發達した政治道德の思想や陰陽五行説などによつて、今日まで遺つてゐる古文獻に記されてゐる一切の所説が、修飾され改變されてゐるために、ありしがまゝの原始的思想を窺ひ知ることは殆ど不可能なることで、この點は識者の驥尾に附して、余の機會ある毎に力説してゐるところである。故に社の本質を究めようとするに當つても、既に發達した諸思想によつて潤色されてゐる古文獻の中から、社の原義なり、その原始形態なりを明かにしようとするのがこの種の研究の出發點に於いて最も緊要な事なのである。かるが故に、余は先づその推考を敢てし、然る後にその原形が如何に發展し、如何に諸思想の修飾を受けたかの過程を明かにし、以つて今日見るが如き形のものになつたかを考へてみようと思ふのである。

問題考究の便宜上先づシャヴンヌ教授の社樹 *L'arbre du dieu du sol* の説の要點を摘記すると、『説文』なる字彙には社の古文を扁の示は神を表はし旁は土の上に木の存する表示であると説いてゐ、社が木と土によつて表示されてゐた事を語つてゐる。また『説文』の社の定義の中にはその土に適する樹木が植ゑられると言つてあるとて、『周禮』大司徒の條の「設其社稷之壇、而樹之田主、各以其野之所宜木、遂以名其社與野」、班

固の『白虎通』社稷の條所引の「尙書曰太社唯松、東社唯柏、東社唯梓、西社唯栗、北社唯槐」また『論語』八佾篇の「哀公問社於宰我、宰我对曰夏后氏以松、殷人以柏、周人以栗、曰使民戰栗也」その他、『莊子』人間世篇、『淮南子』説林訓、『史記』封禪書、『前漢書』五行志中などの文を引いて社が樹木によつて表示された事を明かにし轉じてその意義に及び、『白虎通』には「社稷所以有樹何、尊而識之、使民望見即敬之、又所以表功也」と簡単に説明してある。併し、溯つて周代の典籍を参考して見ると、遠き上古には社の木は單なる社の標幟ではなくして社神そのものとせられてゐたやうである。劉向が『五經通義』に「天子大社王社、諸侯國社侯社、制度奈何、曰社皆有垣無屋、樹其中以木、有木者土主生萬物、萬物莫善於木、故樹木也」と説明してゐるのは『白虎通』の説よりは適當であると信ぜられる。更に漢代以後社の離るべからざる要素となつた祭壇は、本來はその中に一本の木が樹つてゐる *esplanade* に過ぎなかつた。そしてその木そのものが眞の地の神であつた。然るにもつと溯ると社はたゞ孤立した木でなく神聖な茂みであつた時代があつたやうに思はれる。と推定の歩武を進められたが、余はこの見解は信憑するに足るものであると考へる。

また津田博士は上述の論文の郊社の條で、社と地、兵事、農事、日蝕などとの關係を論ぜられた後に「だから社はむしろ思想の極めて幼稚な時代の magic 的儀式を其のところで行つた場所であり、又たそれが宗教思想の進歩と共に神の祭祀の場所となつたので、ところによつては樹や石の崇拜がそれに結合せられたのではあるまいか。かの日蝕の場合の如きまた木の柱を立てる如きは其の最も古い時代の遺風であらう。社といふものが到

るところにあるのも、本来かういふ民間崇拜の儀式を行ふ場所だからであつて、禮記の祭法に「王爲群姓立社曰三大社、王自爲立社曰王社、諸侯爲百姓立社曰國社、諸侯自爲立社曰侯社、大夫以下成群立社曰置社」とあるのなどは、社といふものの多く立てられてゐる民間の風習を採つて斯ういふ制度としたのか、さなくば多くの社があるといふ事實を本にして、それを思想上系統立てたに過ぎないのであらう」として社が土地を祭る所とせられるのは特殊の知識によつて構成せられた思想で、社の原形は呪術的儀式を行ふ民間信仰の場所であるとせられた。

この兩學者の高説は、言ひ表はしの上からは全然別個の事のやうであるけれども、考へ方によつては甚だ相接近してゐ、殆どその見解が致一するばかりであると思ふが、そのことは後に述べることとし、次に松本信廣氏の述べられたところを引用すると、氏は「要するに上代支那に於ける『社』は今日吾人の有する材料によつてはその土神ならざることを證すること困難であり、たとひ『禮記』に云へる如く社が齊一的に祭られしことは信ずべからざるも之をもつて俄かに社が主として民間儀式を行ひし地であるとか、次睢社の如き人身供御の行はれし社は猛獸毒蛇を畏怖して祭りしものなりとは忽卒に論斷し難いと思ふ」と上のやうな民間的意義を有するものとの見解に異議を挾まれてゐる。

本來この問題は、文獻に記載されてゐるところから思想展開の跡を辿ること殆ど不可能であるから、せめて廣く他の民族の事例などから原形を臆測するより方法がないのであつて、こゝに聊か余の所思を陳べるのも一私見

を開陳するに過ぎぬ程度のものである。シャヴンヌ教授が引用説明された『周禮』の地官大司徒の條にある「設其社稷之壇、而樹之田主、各以其野之所宜木、遂以名其社與野」に鄭玄は「社稷后土及田正之神、壇壇與壝壝埒也、田主田神、后土田正之所依也、詩人謂之田祖、宜木謂若松柏栗也、若以松爲社者則名松社之野、以別三方面」と注して居り、かく社は壇とその神たる樹木とによつて表示されるのが一般であつたのである。而して既にシャヴンヌ教授も暗示されたやうに、標石とか木柱とかが社に結合してゐるのは、本來の要素たる丘壇と樹木の屬性が發達した後に附け加はつた分子であつて、その起原に於いては之を有さなかつたものであるから標石や木柱については今暫く措くこととする。さて、その丘壇と樹木との中何れが社の起原に關するところ大であるか、或は兩者共に不可分の關係にあるかといふことであるが、上の『周禮』の記載のやうに壇狀を爲した一定の土地に限られ、而してその壇上に木が樹つてゐる形式は、恐らく社が制度化した後に作られたもので、原形ではあるまいと想像される。そこで先づ木の樹てられた事から考へてみるとシャヴンヌ教授は上に引いたところでは知られるやうに *le dieu du sol était, non pas un arbre isolé, mais un bois sacré* とて林叢の茂みの長怖からその崇拜へと進展したものがその起原であるとして、その徵證に『墨子』明鬼篇の「昔者虞夏商周三代之聖王、其始建國營都日、必擇國之正壇、置以爲宗廟、必擇木之脩茂者以爲敢位」を引き、こゝに『墨子』の所謂敢とは木の茂み (*un bouquet d'arbres*) の意味で、その茂みこそは國家創建の際宗廟と相對して建てられた社を現はしたものであると考定された。そこで、余は孫詒讓の『墨子閒詁』によつて「立以爲敢位」の條を見

ると「敢與叢同、位當爲社字之誤也、隸書社字漢魯相韓勅造孔廟禮器碑作社、史晨祠孔廟奏銘作社因譌而爲位、急就篇祠祀社稷叢臘奉叢一本作敢、顏師古曰叢謂草木叢蔚之所、因立神祠、卽此所謂擇木之脩茂者、立以爲敢社也、秦策恒思有神叢高注曰神祠叢樹也」などとあつて茂みの處を社とせられる場合のあつた事はほゞ疑ひがない。竹添光鴻氏の『左氏會箋』の僖公十九年次雒之社の條には「張華博物志曰、琅邪臨沂縣東界次雒有大叢社、民謂之食人社」と云つてあり、『佩文韻府』の「次雒社」「大叢社」共に『博物志』としてその文が引いてあるが、今日の所謂張華『博物志』にはそれを缺いてゐる。那波利貞氏は「次雒社攷」の中でその點を檢討され、その文が『玉函山房輯佚書』所收、漢、唐蒙『博物記』なるものに琅邪の二字を缺き、全く同一で現はれてゐる事を發見されて居られる⁽¹⁰⁾。かゝる事例より考へると、いま古記録に見るやうな制度化され整頓した形を有する社が現はれぬ以前には、自然の林叢の茂みを社としてゐた事實があつたと推定して大過ないであらう。然らばシャヴンヌ教授の *un Bois sacré* と云はれたのは正に傾聴に値すると云はねばならぬ。

なほ文獻の記載からは社壇に木を樹てるとあつて、獨立樹木であると斷定しても大過なく思はれるのに、余はその原形として樹木の茂みを考へた事には上の『墨子』の言ふ所にとゞまらず、なほ聊か考ふところがあつたからである。即ち、一は世界諸民族の間に存する林叢に對する特殊な觀念と、一は社の屬性の吟味から來る事であつて、その何れもが民間的意義の豊かなものである點に注意を要すると信ずる。その第一の一般的事例は限られた紙上に一々の場合を委曲を盡して説明し難いから詳細は省略に従ふが、林叢が原始心理に於いて特殊なものと考

へられる事實は原始文化を研究する諸學者によつて屢々究明されてゐるところであつて、一二の例を示せば、タイラー (E. B. Tylor) 教授はかの *Primitive Culture of Animism* の章の中にマレー、スマトラ、トンガ島等の諸部族及びアフリカのネグロ、南亞細亞の諸族の林叢を畏怖しまたそれを崇拜する諸事實を示され、フレージャー教授もその大著 *The Golden Bough* の中 *The Worship of Trees* を論じ「歐洲アリアン民族の宗教思想上林叢の畏怖は重要な意味を有してゐる。元來之は極めて自然な觀念で、歴史の黎明の頃歐洲は涯無き原始林に蔽はれ、そのところゝに緑の海の中の島でもあるかのやうに人類の開墾地が存してゐたのである⁽¹¹⁾」と前提して歴史時代に入つても今日の都邑或は耕地が鬱葱たる大森林であつた事を説き、ゲルマン、スラヴ、フィンウグリアンなどの實例に及び、更に進んで北アメリカのインディアン、東西アフリカ、南アジア諸族の例に就いて林叢が畏怖の對象から崇拜に進み行く事を縷述された。そして、それは *animism* の思想階梯にある原始心理に於いては、時には木々等しく靜止し時にはその無數の枝葉は等しく風に搖ぎ暴風に逢つて戦くところから枝葉そのものが *spirit* であり、またその宿るところであり、場合によつてはそれが *demons* と考へられ、然もその林叢の陰闇なところは古代人が同じく靈的に考へた諸動物爬蟲類の棲むところで、恐らく最初は畏怖の對象たるところであり、やがて靈的のところと考へられたに相違ない。上の世界諸部族の例のやうな事實、そしてこゝに説くやうな事實が、遙か古代の支那にも存したらうとは容易に想像されるところであるが、マスベロ教授 (Henri Maspero) が『古代支那史』(La Chine antique) の中で支那大陸の諸地方に存したと推考される上古漢民族の

原始林中の生活を恰も眼前にその状態を髣髴たらしめるやうに記述⁽¹⁴⁾されるされてゐるのを参考し、且つ上の『墨子』の葢位また叢社、更にかの木の脩茂せるもの云々のことを思ひ併せると、余は大森林の一部の林叢が恐らく spirit の寄り集ふ處、換言すれば到るところの靈場とされたであらうと確信する者である。

第二は、前に余が社の屬性から来る性質が、社の原形を茂みとする理由になりはすまいかと云つた事であるが、元來社では、種々な呪術宗教的な儀式が行はれることになつてゐて、それは殆ど社の屬性ともいふべきものである。即ち古記録に現はれてゐるところでは、日蝕の場合、旱魃や洪水の場合、さては盟約や出師凱旋の場合まで社で行事があるので、恐らくそれらは何れも社が靈的なところであつた事からその行事の靈的性質を強化しようとの動機に出發し、その由來たるや深く且つ遠いもので後になつて社に附加されたものではあるまいと考へられる程なのである。而して、かゝる行事は必ずや或る地域を要したものである事に疑ひはないので、所謂樹木崇拜のやうな神聖視された樹木を中心とする一定の地域——そしてそれは後世に社の境となつた——の内で行はれたとも考へられるが、余はむしろ原始形式は animistic な木々に圍繞された林叢の spirit 寄り集ふ靈的地域であつたやうに思はれ、行事の性質から靈的な觀念を伴ひ、やがて神聖視された林叢の茂みの地域を要したものと考へるのである。その間の事實を明かにするに足る史料が殆ど無いために、臆測にとゞまるのは余の甚だ遺憾に堪へぬところであるが、上に述べた諸事由によつて余は暫く社の原形中有力なる一を林叢の茂みと假定して置く。そして、フレーザー教授が特に The Worship of Nature の大地崇拜の節⁽¹⁵⁾で説明された、アフリカ各地に於ける

やうに、開墾に先立つて森林が焼き拂はれる際に豫め森林に群らがる spirit 進んでは神を慰めその寛容を乞ふの祭式がその森林の縁邊の大木ある林叢に營まれ、その一角だけは森の神同時に地神の永く鎮座する靈場として保存されるといふやうな事實が支那にもあつて、それが後世社の起原を爲したものでないかと想像される。

併し、記録に現はれてゐる社は一定の限界を有してはゐるが、概ねそれは林叢の地域ではなく、たゞその限界の中に木が樹つてゐるものやうである。然らば、それは寧ろ林叢の崇拜ではなくして、樹木崇拜即ち孤立せぬ樹木、獨立樹の崇拜が形を改めたものではなからうかとの疑問が生ずる。今更いふまでもなく所謂樹木崇拜とは恰もかの stone worship が決して路傍に散在する礫石などでなく、概ね巨石が對象であるやうに、大樹巨木が對象を爲してゐ、その豪壯な感じから力強きものとされて、終に崇拜されるのであつて、林叢の長怖崇拜とは樹木を對象とする點に聯絡は生じ得るけれ共、本來は別個のものなのである。而して、社には確かに單なる樹木崇拜から來た分子も混入したのである。恐らくその間の關係は林叢に對する長怖も、いつしかその中の大木がそれを代表する傾向を助長し、他面、漸次林叢の崇拜が衰へ、これに反して樹木崇拜がその勢力を増し來つて、終に兩者は著るしく接近し進み、且つまた社が人為的に或る位置に築造される必要さへ生ずるに至ると、起原の如何に顧るところなく單に獨立樹によつて表示されるに至つたのではあるまいか。想ふに、古來社につき「各樹其土所宜木」と云はれてゐるのは、木を樹てることこそ、その原形で、「其土所宜」といふのは社を土神とするやうになつた後に敢て附け加へられた説明に過ぎぬのであらう。